

北大時報

March 2011

No.684

平成23年

3

**鈴木 章 名誉教授に
衆議院・参議院から祝意表明**

**北海道大学一般入試（前期日程・
後期日程）の実施と合格者の発表**

お知らせ

●〈共済組合員の皆様へ〉

被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに



「一般入試前期日程の合格発表」（2011.3.8，関連記事3頁に掲載）

目次

総長メッセージ

- 東北地方太平洋沖地震及び津波により被災された皆様へ… 1

全学ニュース

- 鈴木 章 名誉教授に衆議院・参議院から祝意表明… 2
 ○鈴木 章 北海道大学名誉教授 ノーベル賞受賞記念市民講演会を開催… 2
 ○北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表… 3
 ○医学研究科 浅香正博教授と農学研究院 三上哲夫教授が平成22年度北海道科学技術賞を受賞… 6
 ○公共政策学連携研究部 権左武志教授に和辻哲郎文化賞… 8
 ○防災訓練（図上訓練）を実施… 9
 ○北大フロンティア基金… 10
 ○第8回「九大・北大 合同フロンティア・セミナー」開催… 12
 ○人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催… 13
 ○平成22年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催… 14
 ○留学生センター日本語研修コース修了（2010年10月入学者）… 15

部局ニュース

- 触媒化学研究センター第6回情報発信型国際シンポジウム in 北京（CRC International Symposium in Beijing）を開催… 16
 ○附属図書館講演会「大学の教育改革と図書館の役割」を開催… 20
 ○文学研究科大学院生が日本学術振興会育志賞を受賞… 21
 ○文学研究科FDを開催「ハラスメント～教員または教員組織として留意したいこと」… 22
 ○先端生命科学研究院でFD研修会（ハラスメントを考える）を開催… 23
 ○総合博物館で新しい地震火山の展示を開始… 24
 ○えりも町と理学研究院が「相互協力協定」を締結
 -地震津波防災の普及啓発等を通じ、相互発展を目指す- … 25

- 北方生物圏フィールド科学センターが様似町との包括連携協定を締結… 26
 ○第11回観光創造コロキウムを開催… 27
 ○第10回観光創造フォーラムを開催… 28
 ○大学院生による博物館展示リニューアルの取り組み（3）… 29
 ○総合博物館土曜市民セミナー「北海道の背骨の生い立ちを探る～衝突によってできた日高山脈～」を開催… 30
 ○総合博物館でバラタクソノミスト養成講座を開催… 31
 ○総合博物館で北大教育GP主催「卒論ポスター発表会」開催… 34
 ○北海道大学病院で病後児保育室「ぶらん」開室… 35

お知らせ

- 〈共済組合員の皆様へ〉被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに… 36

理事・副学長退任にあたって

- … 38

定年退職を迎えるにあたって

- … 40

表敬訪問

- … 85

諸会議の開催状況

- … 86

学内規程

- … 87

人 事

- 新任部局長等紹介… 89
 ○新任部局長等紹介… 90

訃 報

- 名誉教授 寺山 吉彦 氏… 91

総長メッセージ

東北地方太平洋沖地震及び津波により被災された皆様へ

このたびの東北地方太平洋沖地震及び津波により被害を受けられた多くの皆様に、心よりお見舞い申し上げます。皆様が一刻も早く平穏な生活を取り戻されることをお祈り申し上げます。

北海道大学では、被災された皆様や地域のために、できる限りの支援を行うとともに、被災された学生や本学入学予定の方々、被災地の出身学生などが修学機会を失うことのないよう、迅速な対応を進めてまいります。

平成23年3月17日
北海道大学総長 佐伯 浩

○被災地への義援金について

このたびの東北地方太平洋沖地震については、東北地方を中心に多数の死傷者・行方不明者を出し、その被害は想像を絶するものです。また、被災者の中には、本学の教職員・学生のご家族もおられ、本学にとりましても人ごとではありません。

つきましては、すでにご案内のとおり、北海道大学教職員の有志として被災地への義援金を募り、日本赤十字社を通じてお贈りしたいと存じますので、賛同いただける方は、各部局等をおしてお申し込みくださるようお願い申し上げます。

○本学の対応について

今回の東北地方太平洋沖地震及び津波への本学の対応に関する情報を集約し、ホームページ上で公開しています。（<http://www.hokudai.ac.jp/eq/>）

- 東北地方太平洋沖地震及び津波により被災された皆様へ（総長メッセージ）
- 新入生・在学生の皆様へ
- 各部局等からの情報
- 東北地方太平洋沖地震に伴う本学の節電状況について
- 留学生の皆様へ（留学生センターからのお知らせ）
- イベントの延期・中止に関する情報

全学ニュース

鈴木 章 名誉教授に衆議院・参議院から祝意表明

3月7日（月）、鈴木章名誉教授が根岸英一パデュー大学特別待遇教授と共に衆議院と参議院に招かれました。

衆議院では横路孝弘議長、衛藤征士郎副議長らから、参議院では西岡武夫議長、尾辻秀久副

議長らから、それぞれ祝意が表されました。

両夫人同席の元、祝辞及び記念品が贈呈され、その後行われた懇談では両受賞者から披露されたノーベル・メダルを囲み、終始晴れやかな雰囲気になりました。



衆議院議場にて



参議院議長応接室にて

（総務部広報課）

鈴木 章 北海道大学名誉教授 ノーベル賞受賞記念市民講演会を開催

2月28（月）札幌市民ホールにて、鈴木章名誉教授のノーベル化学賞受賞を記念し、北海道新聞社との共催で市民講演会を開催しました。

当日は、一般の参加者や本学関係者等、約1,400名の参加がありました。

講演に先立ち、佐伯浩総長から挨拶があった後、鈴木先生が研究されてきた有機合成に関するビデオを上映しました。

講演は、「精進努力で“鈴木カップリング”

を見つけた！」と題して、ノーベル化学賞受賞に至るまでの経緯やご自身の研究内容について、一般の方にわかりやすく説明されていました。

講演終了後には、本物のノーベル・メダルを特別に見せていただき、また、質疑応答では、ご自身の経験をもとに、参加者から事前に寄せられた質問に丁寧に答えられ、会場はおおいに盛り上がっていました。



多くの聴衆で埋まった講演会の様子



ノーベル・メダルを披露する鈴木先生

（学術部研究協力課）

北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成23年度一般入試の前期日程試験は2月25日（金）・26日（土）に実施しました。3月12日（土）の後期日程試験は、前日に発生した東北地方太平洋沖地震の影響により、試験の開始時間を函館地区の試験場で2時間、札幌地区の試験場で1時間繰り下げて実施しました。さら

に、地震の影響により受験できなかった者については、後日再試験を実施しました。

また、私費外国人留学生入試第2次選考を2月18日（金）に実施しました。

各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1 前期日程

志願者は5,736名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が3名おりました。また、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は5,733名で、受験者は5,589名でした。

合格者は2,074名で、合格発表は、3月8日（火）午前9時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、午前9時30分頃に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が1,024名で全体の49.4%。卒業年度別では、平成23年3月高等学校卒業者が1,316名で全体の63.5%。また、男女別では女子が625名で全体の30.1%でした。

2 後期日程

志願者は4,254名で、このうち、本学が指定した大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を受験していなかった失格者が1名おりました。また、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、志願者全員が合格し、受験対象者は4,253名で、受験者は2,066名（再試験の受験者を含む）でした。

合格者は560名で、合格発表は、3月22日（火）午後4時に高等教育推進機構正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、午後4時30分頃に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が189名で全体の33.8%。卒業年度別では、平成23年3月高等学校卒業者が349名で全体の62.3%。また、男女別では女子が134名で全体の23.9%でした。

3 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は116名で、第1次選考の合格者は53名、第2次選考の受験者は38名、合格者は17名でした。

全学ニュース

平成23年度一般入試（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者
総合入試	文系	100	463 (161)	11 (2)	452 (159)	4.5	110 (36)
	数学重点選抜群	130	319 (59)	7 (1)	312 (58)	2.4	139 (20)
	物理重点選抜群	235	752 (77)	13 (1)	739 (76)	3.1	251 (27)
	化学重点選抜群	235	698 (190)	19 (7)	679 (183)	2.9	251 (57)
	生物重点選抜群	177	459 (186)	11 (5)	448 (181)	2.5	189 (78)
学部別入試	総合科学選抜群	250	601 (197)	18 (5)	583 (192)	2.3	268 (89)
	文学部	118	342 (175)	5 (1)	337 (174)	2.9	128 (57)
	教育学部	20	64 (31)	3 (1)	61 (30)	3.1	20 (9)
	法学部	140	336 (110)	5 (1)	331 (109)	2.4	149 (52)
	経済学部	140	449 (113)	8 (0)	441 (113)	3.2	154 (38)
	医学部	97	281 (73)	19 (4)	262 (69)	2.7	100 (25)
	保健学系						
	看護学専攻	60	149 (130)	10 (9)	139 (121)	2.3	66 (57)
	放射線技術科学専攻	28	77 (27)	2 (1)	75 (26)	2.7	31 (8)
	検査技術科学専攻	28	96 (62)	0 (0)	96 (62)	3.4	30 (18)
	理学療法学専攻	13	38 (13)	1 (0)	37 (13)	2.8	15 (5)
	作業療法学専攻	13	29 (19)	1 (1)	28 (18)	2.2	18 (12)
	歯学部	30	107 (36)	3 (2)	104 (34)	3.5	30 (6)
	獣医学部	20	103 (41)	4 (2)	99 (39)	5.0	20 (4)
	水産学部	105	370 (97)	4 (1)	366 (96)	3.5	105 (27)
計		1,939	5,733 (1,797)	144 (44)	5,589 (1,753)	2.9	2,074 (625)

※ () 内の数字は女子で内数

平成23年度一般入試（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者
学部別入試	文学部	37	318 (131)	163 (59)	155 (72)	4.2	41 (14)
	教育学部	10	78 (35)	30 (15)	48 (20)	4.8	11 (4)
	法学部	40	391 (109)	199 (58)	192 (51)	4.8	45 (13)
	経済学部	20	235 (53)	122 (24)	113 (29)	5.7	26 (7)
	理学部						
	数学科	13	89 (8)	40 (1)	49 (7)	3.8	14 (1)
	物理学科	5	100 (7)	44 (6)	56 (1)	11.2	11 (1)
	化学科	15	130 (33)	65 (15)	65 (18)	4.3	16 (4)
	生物科学科(生物学専修分野)	5	78 (27)	41 (14)	37 (13)	7.4	7 (4)
	生物科学科(高分子機能学専修分野)	5	51 (21)	21 (9)	30 (12)	6.0	5 (0)
	地球惑星科学科	5	61 (13)	29 (4)	32 (9)	6.4	8 (2)
	医学部						
	保健学系						
	放射線技術科学専攻	7	62 (27)	32 (9)	30 (18)	4.3	8 (7)
	検査技術科学専攻	7	95 (69)	52 (35)	43 (34)	6.1	8 (7)
	理学療法学専攻	4	49 (21)	30 (9)	19 (12)	4.8	4 (2)
	歯学部	8	115 (36)	49 (12)	66 (24)	8.3	9 (2)
	薬学部	24	252 (87)	144 (45)	108 (42)	4.5	28 (9)
	工学部						
	応用理工系	34	330 (48)	190 (24)	140 (24)	4.1	47 (6)
	情報エレクトロニクス系	38	286 (24)	144 (12)	142 (12)	3.7	43 (2)
	機械知能工学系	30	240 (3)	140 (1)	100 (2)	3.3	37 (2)
	環境社会工学系	53	395 (69)	198 (31)	197 (38)	3.7	62 (8)
	農学部	53	418 (120)	255 (76)	163 (44)	3.1	55 (14)
	獣医学部	15	114 (42)	43 (11)	71 (31)	4.7	16 (6)
	水産学部	50	366 (101)	156 (36)	210 (65)	4.2	59 (19)
計		478	4,253 (1,084)	2,187 (506)	2,066 (578)	4.3	560 (134)

※ () 内の数字は女子で内数

注) 受験者数には、地震の影響により3月12日の試験を受験できず、再試験を受験した者を含む。

平成23年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

【学部・学科等】

学部・学科等			志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	合格者数
文学部	人文学科	文学科	8 (6)	3 (3)	2 (2)	0
教育学部	教育学	教育学科	7 (3)	4 (1)	4 (1)	1 (1)
法学部	法学	法学課程	7 (5)	3 (3)	3 (3)	1 (1)
経済学部	経済学	経済学科	7 (1)	1 (1)	1 (1)	0
	経営学	経営学科	15 (5)	2 (1)	2 (1)	0
理学部	数学	数学科	4 (1)	4 (1)	2 (1)	1 (1)
	物理学	物理学科	2	2	1	1
	化学	化学科	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0
医学部	保健学科	(検査技術科学)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
歯学部	歯学	歯学科	2	2	1	0
薬学部	薬学	薬学科	1	0		
	薬学	薬学科	2 (2)	0		
工学部	応用理工系学科	(応用物理工学)	4 (1)	4 (1)	4 (1)	4 (1)
		(応用化学)	9 (5)	4 (2)	1 (1)	1 (1)
		(応用マテリアル工学)	4 (1)	1	1	1
	情報エレクトロニクス学科	(情報工学)	6 (2)	2 (1)	2 (1)	1 (1)
		(コンピュータサイエンス)	1	1	1	0
		(電子情報)	1	1	0	
		(メディアネットワーク)	1	0		
		(システム情報)	3	1	0	
	機械知能工学科	(機械情報)	2	2	0	
		(機械システム)	1	0		
	環境社会工学科	(社会基盤学)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	0
		(建築都市)	2 (2)	1 (1)	0	
		(衛生環境工学)	1	1	1	0
		(資源循環システム)	3 (2)	1	1	1
農学部	応用生命科学	応用生命科学科	2	0		
	生物機能化学	生物機能化学科	6 (4)	0		
	森林科学	森林科学科	1	1	1	0
	畜産科学	畜産科学科	2 (1)	0		
	農業経済学	農業経済学科	2 (2)	2 (2)	1 (1)	0
獣医学部	獣医学	獣医学科	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
水産学部	海洋資源科学	海洋資源科学科	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
	増殖生命科学	増殖生命科学科	1	1	1	0
	資源機能化学	資源機能化学科	3 (2)	3 (2)	3 (2)	2 (1)
計			116 (51)	53 (25)	38 (20)	17 (10)

※ () 内の数字は女子で内数

【国・地域別】

国・地域	志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	合格者数
中国	83 (38)	43 (21)	31 (17)	14 (9)
韓国	28 (11)	8 (4)	6 (3)	3 (1)
台湾	2	1	1	0
ベトナム	2 (2)	0		
インドネシア	1	1	0	
計	116 (51)	53 (25)	38 (20)	17 (10)

※ () 内の数字は女子で内数

(学務部入試課)

医学研究科 浅香正博教授と農学研究院 三上哲夫教授が 平成22年度北海道科学技術賞を受賞

2月25日（金）、平成22年度北海道科学技術賞受賞者が発表され、医学研究科教授 浅香正博氏と農学研究院教授 三上哲夫氏が選ばれました。

この賞は、科学技術上の優れた発明、研究等を行い、本道産業の振興、道民生活の向上など

経済社会の発展振興等に功績のあった者に北海道知事表彰として贈呈されるものです。

贈呈式は3月10日（木）に札幌市内で行われました。

各氏の受賞にあたっての功績等を紹介します。

○医学研究科・教授 あさか まさひろ 浅香 正博 氏

医学研究科 浅香正博教授は、「わが国からの胃癌撲滅をめざした具体的方策の提唱」の功績により、授賞されました。同氏の功績と略歴を紹介します。



略 歴 等

昭和47年 3 月	北海道大学医学部卒業
昭和53年 4 月	北海道大学医学部附属病院助手
昭和56年 4 月	北海道大学医学部附属病院講師
平成 6 年11月	北海道大学医学部教授
平成12年 4 月	北海道大学大学院医学研究科教授
平成17年 4 月	北海道大学病院副病院長
平成19年 4 月	北海道大学病院病院長
平成22年 3 月	
平成22年 4 月	北海道大学大学院医学研究科教授

功 績 等

同氏は、平成8年から平成12年にかけて、文部省の科学研究費がん重点研究“ヘリコバクター・ピロリ菌と胃癌の発生”班班長としてヘリコバクター・ピロリと胃癌の関わりを疫学的観点から明らかにし、平成12年、JAPANGAST Study Groupという大学、病院にとらわれない臨床試験を行うためのグループにおいて、ヘリコバクター・ピロリ除菌が早期胃癌の内視鏡的切除後の異時性胃癌の発生予防が可能か否かの試験を開始し、平成20年8月、除菌群は非除菌群に比して異時性胃癌の頻度は約1/3に減少したという研究結果をLancetに報告し、わが国はもとより海外でも大きな反響を呼びました。

その後、一次予防としてのヘリコバクター・ピロリ菌除菌と二次予防としての胃癌検診を結びつけばわが国から胃癌を10年以内に撲滅す

る可能性が高いことを明らかにして日本消化器病学会誌に発表、この論文は学会のみならず、マスコミに大きく取り上げられ、胃癌対策基本法の成立へ向けて大きな一歩を踏み出しました。

胃癌で亡くならないためにはヘリコバクター・ピロリ菌の除菌と内視鏡などによる検診を組み合わせることが重要ですが、すでに北海道大学病院のピロリ菌外来で応用されており、道民の胃癌予防に大きく貢献しています。

また、胃癌の医療費は北海道でも年々増加の傾向を見せていますが、ピロリ菌除菌と胃癌検診の組み合わせが普及すると医療費の軽減が図られ、本道の科学技術の発展とともに経済に与える効果が大きく、道民生活の向上に多大な貢献を果たしました。

（医学研究科・医学部）

○農学研究院・教授 ^{みかみ てつお} 三上 哲夫 氏

農学研究院 三上哲夫教授は、「テンサイの細胞質雄性不稔性の解明と一代雑種育種への貢献」の功績により、受賞されました。同氏の功績と略歴を紹介します。

略 歴 等



昭和46年 3 月	北海道大学農学部卒業
昭和48年 3 月	北海道大学大学院農学研究科修士課程修了
昭和52年 4 月	日本学術振興会奨励研究員
昭和53年 3 月	北海道大学大学院農学研究科博士課程修了（農学博士）
昭和55年 4 月	北海道大学農学部助手
昭和64年 1 月	北海道大学農学部助教授
平成 4 年 4 月	北海道大学農学部教授
平成11年 4 月	北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4 月	北海道大学大学院農学研究院教授

功 績 等

テンサイの優良な一代雑種種子を生産するためには、細胞質雄性不稔性（花粉が不能となる現象）を示す雌を交配親に利用することが重要となります。同氏は、テンサイの細胞質雄性不稔性が細胞内のミトコンドリアにある異常な遺伝子に起因することを、世界で初めて明らかにしました。

次いで、異常なミトコンドリア遺伝子が、どのように細胞質雄性不稔性を発生するのか、その作用機構を解明し、研究過程において、シロイヌナズナに次いで植物で二番目にテンサイでのミトコンドリア全ゲノムの情報解読に成功しました。

複雑な構造を持つ植物ミトコンドリア全ゲノムの比較解析により、目的のミトコンドリア遺伝子の異常を見いだしたことは、ゲノム解析手法として高く評価されています。

テンサイは、本道の最も重要な農作物の一つで、日本の砂糖原料の75%を占める我が国の基幹甘味資源であります。テンサイの優良な一代雑種種子を得るため、同氏の研究成果によりテンサイのミトコンドリアDNAに基づく細胞質型の分類が可能になり、細胞質雄性不稔性の遺伝的特性の峻別、鑑定が容易になりました。

このことは、テンサイの採種に技術革新をもたらし、本道の農業生産の発展に大きく寄与しています。

（農学院・農学研究院・農学部）

公共政策学連携研究部 権左武志教授に 和辻哲郎文化賞

この度、公共政策学連携研究部 権左武志教授が和辻哲郎文化賞を受賞され、3月6日（日）姫路市市民会館において授賞式が行われました。

同賞は、姫路市出身の哲学者 和辻哲郎（1889～1960）の幅広い学業を顕彰し、和辻哲学の今日的意義を国の内外にわたって探るとともに、研究者の育成かつ市民の文化水準の向上に資するために姫路市が創設しました。第23回に当たる今回、権左教授の著書「ヘーゲルにおける理性・国家・歴史」が同賞の学術部門を受賞しました。

権左教授は昭和34年生まれ、愛知県出身で、東京大学法学部卒業後、北海道大学で法学博士

号を得て、北海道大学法学部助教授、大学院法学研究科教授を経て、現職に至っています。

専門は西洋政治思想史で、ヘーゲルやC.シュミット等を中心とする近現代ドイツ政治思想、並びに丸山眞男を始めとする戦中・戦後日本の政治思想を主に研究しています。

本受賞作は、現代国際政治思想の観点から、ヘーゲル哲学を体系化された思想と見る従来の理解に疑問を投げかけ、フランス革命以後のヨーロッパにおける政治的激動の時代体験から初期の思想形成のプロセスを解明するとともに、現代につながるヘーゲル歴史哲学・法哲学の革新性に関する見解を大胆に提示しています。



姫路市市民会館での授賞式の様子



スピーチをする権左教授

（公共政策学連携研究部・教育部）

防災訓練（図上訓練）を実施

2月18日（金），事務局大会議室において主に事務局職員を対象に地震発生を想定した図上訓練形式による防災訓練を実施しました。

この訓練は，昨年12月に作成した「災害対策ガイドライン」の実効性の検証及び関係者の災害対応能力の向上などを目的に行われ，当日は，関係の理事，事務局各部課並びに医学研究科，理学研究院，農学研究院，工学研究院の4部局の事務部など，総勢約70名が参加しました。

訓練は，平日の午後1時に札幌市内で震度6強の地震が発生した想定で，危機管理対策本部に置かれた各班へ被害状況の報告や救援の要請が書面で次々と配付され，それに対し各班が対

応を検討し，他の班に連絡や指示をしたり，調査の結果を対策本部に報告したりするなどの内容で行われました。

訓練終了後，危機管理室長の逸見勝亮理事・副学長から，参加者の熱心な取り組みや協力に対して感謝の言葉がありました。また，今回の訓練について具体的なシナリオ作りやアドバイスを依頼したNTT東日本の防災専門家からは，このような規模で職員が参加して行う訓練は希であり，訓練の重要性を共有するために大変有意義であったとの講評を受けるなど，各人が災害時の行動について改めて深慮する良い機会となりました。



当日の訓練の様子

（総務部総務課）

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動を行うこととしています。平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北大フロンティア基金情報】

基金累計額 (2月28日現在)

10,469件 1,892,805,849円

教職員の寄附率 24.9% (956件/3,842人)

<2月のご寄附状況>

法人等4社、個人32名の方々から19,982,559円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

なお、基金累計額には、北海道大学国際交流事業基金より移し替えた2億円を含んでおります。

寄附者ご芳名

(法人等)

株式会社IHI、医療法人社団 たて歯科医院、富士ゼロックス株式会社、
北海道大学生生活協同組合

(個人)

石井 善雄、上田 敦、遠藤 哲夫、太田 裕之、大畑 昇、岡田 尚武、小内 透、
近藤 健二、杉浦 秀一、直田 恒夫、瀬名波栄潤、高橋 光彦、高橋 幸夫、田口 道治、
土家 琢磨、寺澤 睦、所 伸一、豊田 威信、野坂 政司、早坂 孝一、広田 凱則、
増子 忠恕、松本 恒一、村本 太平、吉田 広志、渡辺 尚

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(法人等)

株式会社IHI、富士ゼロックス株式会社

(個人)

石井 善雄、太田 裕之、増子 忠恕

感謝状の贈呈



浅香正博様（平成23年3月19日）

ご寄附のお申し込み方法

①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ > 教職員向け > 学内限定情報・システム > 北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/gakunai/fund.pdf>

②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ ———— 基金事務室（事務局1階・学内電話2012／2017）

（基金事務室）

第8回「九大・北大 合同フロンティア・セミナー」 開催

2月7日（月），東京都千代田区丸の内の東京ステーションコンファレンスにおいて，第8回「九大・北大 合同フロンティア・セミナー」を，「日本のボーダー研究最前線：地域を融かす境界研究」をテーマに開催しました。

当日は，首都圏の企業や官庁などで活躍している両大学のOBやOGの皆様をはじめとして，約160名の方々に参加いただきました。

大学大学院法学研究院の出水薫教授がコーディネーターとなり，講演を行った本学岩下教授及び九州大学松原教授がコメンテーターとなって，講演された内容に対する質問に両講師が応える形で進められ，両先生方の，知的興奮を誘った講演内容に出席者からの質問も活発になり，終了後も講演者が対応する一幕もあり，盛会裏に終了しました。



講演中の岩下教授



パネルディスカッション風景

最初に登壇した九州大学韓国研究センター長の松原孝俊教授は「海峡あれど，国境なし：シームレスな日韓海峡圏構築の試み」と題し，日韓の国境を越えた新しい地域連携，地域統合の提案，日韓海峡人育成などの最新のボーダー研究について講演されました。

次に，本学スラブ研究センターの岩下明裕教授が，「国境から世界を包囲する」と題して，世界の境界研究（ボーダースタディーズ）や北方領土問題等について講演されました。

休憩後のパネルディスカッションでは，九州

今回のセミナーも，前回同様有料で開催し，休憩中に軽食，オードブルやビール等を提供しました。

（学術部研究協力課）



講演会の会場風景

人材育成本部上級人材育成ステーションで 「赤い糸会 & 緑の会」を開催

人材育成本部のS-cubicとHoP-Stationでは、2月21日(月)東京の品川プリンスホテルにて「赤い糸会 & 緑の会」を開催しました。

本会は、企業と若手研究者(DC, PD)との直接情報交換会であり、企業には博士研究者の高い専門性や総合力を理解いただき、若手研究者には企業の研究開発活動や企業における博士の活躍状況等を知ってもらうことで、相互理解を深め、視野の複線化、活躍フィールドの拡大を図ることを目的としています。

今回で「赤い糸会」は13回目、「緑の会」は5回目の開催となり、若手研究者の参加も回を重ねるにつれ増加し、理学院、生命科学院、先端生命科学研究院、農学院、工学研究科、情報科学研究科、環境科学院、獣医学研究科、国際広報メディア・観光学院等から27名(DC:21名, PD:6名)の若手研究者の方々が参加しました。

企業からも、電機、機械、化学、鉄鋼、建設、医薬、食品等の各種業界から14社(30名)に参加いただきました。

本会では、冒頭の川端和重先端生命科学研究院長による会の趣旨説明の後、参加企業の皆様から業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己スキルポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行なわれました。

また「赤い糸会」を通じ企業に就職した博士研究者の先輩方も企業説明会に参加し、後輩達に対して熱い思いを語ってくれていました。

併せて、今回は翌22日(火)に東急建設株式会社、帝人株式会社の企業見学会を実施し、貴重な企業情報交換、研究現場見学をさせていただきました。

人材育成本部では、上記の活動に加えて、AdvancedCOSAやキャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、博士研究者の実践力を高める事に注力していますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

尚、興味のある方はS-cubicホームページ(<http://www.sci.hokudai.ac.jp/s-cubic/>)をご覧ください。



挨拶をする川端和重研究院長



企業のショートトーク



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換



東急建設(株)の見学



帝人(株)の見学

(人材育成本部)

平成22年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催

平成22年4月以降に入学した留学生の歓迎と本年3月に勉学や研究を終えて帰国する留学生の祝賀を兼ねた総長主催の懇談会が、2月14日（月）に京王プラザホテル札幌において開催されました。

当日は、留学生を始め、在札幌外国公館、留学生支援団体の方々のほか、各部局長、指導教員、留学生関係委員会委員の先生など、例年を大きく上回る470名の出席がありました。

懇談会は、佐伯浩総長の挨拶に始まり、その後、来賓を代表して在札幌大韓民国総領事館尹善化（ユン ソナ）領事からご挨拶をいただきました。

ついで、入学生を代表してトルコから来たメシュズルフィヒカルさん（HUSTEP）から、札幌に着いたときにはトルコとの違いに驚き、慣れることができるか心配だったが、各国から

来ている留学生や、日本人の学生ともすぐに友達になることができ、今は楽しく生活しているとの話がありました。

また、帰国留学生を代表して、台湾の官宏霖（カン コウリン）さん（経済学研究科博士後期課程）からは、日本に来た初めの頃や、大学での勉学、卒業後のことなどが語られました。

代表者のスピーチの後、本堂武夫理事・副学長・国際本部長の乾杯の音頭で懇談に入り、留学生と指導教員を始め大学関係者や留学生支援団体の方々との懇談の輪が広がり、楽しい交流の一時を過ごしました。

最後に、新田孝彦留学生センター長の励ましの言葉と締め乾杯で懇談会は盛況のうちに終了しました。



佐伯総長からの挨拶



多くの留学生が集まった会場

（国際本部国際支援課）

留学生センター日本語研修コース修了 (2010年10月入学者)

留学生センター日本語研修コース研修生の修了式が2月14日(月)午後2時より留学生センターで行われました。

この研修コースは、主に大使館推薦の国費外国人留学生のうち、修了後に本学大学院又は道内の他大学大学院に進む研究留学生や北海道教育大学へ進む教員研修生、また、本学工学部に入学する日韓共同理工系学部留学生等に日本語予備教育を行うためのもので、留学生センターにおいて6ヶ月間開設されています。

今回修了式を迎えたのは、昨年10月に入学した国費外国人留学生3名と日韓共同理工系学部留学生6名、それに加え、学内公募により、本コースを集中日本語コースとして受講した18名の計27名です。

修了式では、来賓や指導教員の方々が見守る中、日本語研修コース研修生には修了証書が、集中日本語コース受講者には履修証明書が、本堂武夫国際本部長より一人一人に授与されました。引き続き本堂国際本部長から、祝辞と今後の飛躍を祈念する激励の言葉が述べられ、修了者は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念撮影をし、終了しましたが、その後もしばらく、留学生同士あるいは4月から指導を受けることになっている教員との写真撮影や懇談が続いていました。



修了証書を受け取る学生



全員での記念写真

(留学生センター)

部 局 ニ ュ ー ス

触媒化学研究センター第6回情報発信型国際シンポジウム
in 北京 (CRC International Symposium in Beijing) を開催

本国際シンポジウムは、文部科学省の共同利用・共同研究拠点の認定を受けている触媒化学研究センターが、拠点活動の一環として「日本が誇る先駆的研究成果を“日本の研究機関の主導で”海外において情報発信する」というコンセプトの基で企画され、平成17年のアーヘン工科大学（ドイツ）、平成18年のパデュー大学（アメリカ合衆国）、平成19年のリヨン大学（フランス）、平成20年のスウェーデン王立科学アカデミー（スウェーデン）、平成21年のモスクワ大学（ロシア）に続き今回が6回目の開催となり、3月4日（金）北京大学において開催しました。

CRC International Symposiumは、『クロスカップリング反応』を主なテーマとしています。クロスカップリング反応は、非常に有用な炭素-炭素結合生成反応として工業的にも重要性を増しており、『溝呂木・ヘック反応』のリチャード・ヘック氏（米国デラウェア大学名誉教授）、『鈴木カップリング』の鈴木章氏（北

海道大学名誉教授、触媒化学研究センター特別招へい教授）、『根岸カップリング』の根岸英一氏（米国パデュー大学特別待遇教授、触媒化学研究センター特別招へい教授）の3氏が2010年ノーベル化学賞を受賞したことから、その重要性は明らかであります。

本年のシンポジウムには、2010年ノーベル化学賞受賞者鈴木章氏と根岸英一氏、この分野で先駆的な役割を果たしている日本人研究者1名（山本嘉則：東北大学特任教授）に加え、地元中国から2名（Prof.Shengming.Ma：East China Normal大学, Prof.Quilin Zhou：Nankai大学）の研究者を講師として招待しました。

また、今回の同シンポジウムが中国での開催となったことに伴い、本学と大学間交流協定を締結している大連理工大学から、鈴木章氏及び根岸英一氏のノーベルレクチャー開催の強い要請があり、同シンポジウムに先立ち3月3日（木）同大学でノーベルレクチャーを行いました。

【3月2日】大連理工大学 欧進萍学長と鈴木章・根岸英一特別招へい教授の会見
(於：大連FURAMAホテル)

大連市到着の3月2日（水）、同市内のFURAMAホテルにおいて大連理工大学 欧進萍学長とノーベルレクチャーの講演者である鈴木章・根岸英一触媒化学研究センター特別招へい教授との会見が行われました。

欧学長からは、両先生への謝辞が述べられた

後、今後、同大学に対しアドバイスをいただきたいこと及び北海道大学と米国パデュー大学と大学間交流協定を締結しているので、これを機に交流を更に深めたい旨、述べられました。

次いで、鈴木章・根岸英一両教授から今回の招へいに対する謝辞が述べられました。



会見風景



会見後に鈴木夫妻・根岸夫婦を囲んで

【3月3日】ノーベルレクチャー（於：大連理工大学）

ノーベルレクチャーは「2010年ノーベル化学賞獲得者大連理工大学名誉教授称号授与式兼学術報告会」として大歓迎ムードの中、大連理工大学主催で行われました。

300名を超える参加者が集まる中、同大学欧学長から両名に名誉教授称号記が授与された後、鈴木先生は「Cross-Coupling Reactions of Organoboranes: An Easy Way for Carbon-Carbon Bonding」と題し、根岸先

生は「Magical Power of d-Block Transition Metals」と題しノーベルレクチャーを行いました。質疑応答では多数の参加者から挙手があり、幸運な数名が質問を行う機会を得ました。最後の質問は大連理工大学附属高校の女子学生からでした。同レクチャーは英語で行われたため、質疑応答も英語でしたが、同人の懸命に質問する姿に中国の国力を垣間見る思いがしました。



挨拶する欧進萍学長



称号記を持つ鈴木先生（左）、根岸先生（右）と欧学長（中央）



講演する鈴木章特別招へい教授



講演する根岸英一特別招へい教授



講演後に笑顔をもせる両特別招へい教授



多くの参加者に囲まれての記念撮影

【3月4日】CRC International Symposium in Beijing（於：北京大学）

会場となった北京大学化学科講堂は400名を超える参加者を集め、通路にびっしりと立ち見者が出るほどの盛況ぶりで、活発な議論が展開されました。

第1部はNobel Lecturesとして、鈴木章先生が「Cross-Coupling Reactions of Organoboranes: An Easy Way for Carbon-Carbon Bonding」と題し、根岸先生は

「Magical Power of d-Block Transition Metals: Past, Present and Future」と題しレクチャーを行いました。

鈴木先生は淡々と、根岸先生は滑らかな語りでジョークを交えながら、ノーベル化学賞を受賞した研究や、これから目指していく研究等について熱心にレクチャーを行いました。



開催校を代表し挨拶する
Kai Wu 北京大学化学科教授



開催大学を代表し挨拶する
Wang Enge 北京大学研究生院院長



主催者を代表して挨拶する福岡淳センター長



聴衆で溢れる講演会場



講演する鈴木章特別招へい教授



講演する根岸英一特別招へい教授

第2部はEast China Normal大学のShengming. Ma教授が「The Reaction of 2,3-Alleenoates with Organometallic Reagents」と題し、東北大学の山本嘉則特任教授が「From Molecular Catalysts to Nanostructured Materials Skeleton Catalyst」と題し、最後にNankai大学のQilin Zhou教授が「Highly Efficient Enantioselective Hydrogenation」と題し講演を行いました。

三者とも、クロスカップリング反応をベースに研究を発展させており、研究のベースとなる反応や現在の研究内容等について丁寧に講演が行われました。

どの講演に対しても多くの質問が寄せられ、予定時間をオーバーとなりましたが、盛況のうちに終了となりました。

第1部終了後には北京大学主催の昼食会が行われ、忙しい中、北京大学の周其鳳学長も参加されました。

今回のCRC International Symposium in Beijingの開催に当たっては、北京大学化学与分子工程学院有機学化学研究所の席振峰教授に会場の手配、シンポジウム開催の周知等大変お世話になりました。誌上を借りて感謝申し上げます。

触媒化学研究拠点として認定を受けている触媒化学研究センターは、拠点への研究者コミュニティからの要請に応えるべく、今後も情報発信型シンポジウム等の活動を継続する予定です。



講演する Shengming. Ma 教授



講演する 山本嘉則特任教授



講演する Qilin Zhou 教授



質疑応答風景

(触媒化学研究センター)

附属図書館講演会「大学の教育改革と図書館の役割」を開催

3月2日（水），百年記念会館大会議室において，附属図書館が主催する講演会が開催され，学内外から57名の参加がありました。

今回の講演会は，「大学の教育改革と図書館の役割」と題して，高等教育推進機構高等教育研究部高等教育開発研究部門長の細川敏幸教授に講演をいただきました。

はじめに，逸見勝亮附属図書館長より，講師の細川先生が本学の教育改革プロジェクトの活動を推進されており，特に本学の1～2年生の教養教育は，日本で最も進んだ内容なので，この講演を通じて今の大学教育を学び，図書館は何を提供できるか具体的に考えてほしいと挨拶されました。

細川先生の講演は，はじめに大学がこの10年余，教育改革の対応を迫られてきたその背景を理解するために，大学が誕生した歴史から始まり，大学の教育改革がなぜ必要なのか，モデルとした米国における大学改革の系譜，そして日本の大学改革の動向について話されました。次に，本学の教育改革の具体的な例として，単位の実質化の取り組みやGPA制度の導入，総合教育部の導入とその支援プロジェクト，TA制度やFDの導入とその後の新しい動向等をお話いただき，最後に図書館の役割も大学の教育改革に合わせて変化し，学習支援の場となる新たな図書館像を考えてほしいと結ばれました。

休憩をはさんだ質疑応答では，学内外の参加者から活発な質問がだされ，予定の時間を超え，講演会は盛況のうちに終了しました。



講演する細川教授

概要

1. 大学の教育改革はどこからの要請？
2. モデルは？
3. 米国の大学教育の系譜
4. 日本の大学教育の系譜
5. 北海道大学の教育改革
6. 図書館の役割
7. まとめ

講演の概要

（附属図書館）

文学研究科大学院生が日本学術振興会育志賞を受賞

このたび、文学研究科博士課程大学院生高岸治人氏に日本学術振興会育志賞が授与されました。育志賞は、天皇陛下の即位20年にあたり若手研究者を支援・奨励する目的で日本学術振興会に贈られた御下賜金をもとに、我が国の学術研究の発展への寄与が期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰・奨励するために本年度より創設された賞です。第1回授賞式は、2月1日(火)に天皇皇后両陛下御臨席のもとに日本学士院でとり行われました。

高岸氏は2月8日(火)に博士論文の口述試験を終え、教授会での承認を経たうえで3月に博士号の授与がされました。博士論文の内容は、行動経済学で用いられる経済ゲームを幼稚園児を対象として実施するための方法を開発し、幼児の心の理論の発達と利他行動との関連を検討したものです。博士号取得後は、学術振興会PDとして、東京大学大学院医学系研究科で新しい研究の展開をめざしています。



授賞式の様子



授賞式会場で記念写真におさまる高岸氏



一同での記念撮影 (左から2人目)

(文学研究科・文学部)

文学研究科FDを開催 「ハラスメント～教員または教員組織として留意したいこと」

3月2日（水），文学研究科FDが開催されました。文学研究科では，昨年度より文学研究科・文学部学生相談室を設け，学生のメンタルヘルスやハラスメント問題への対応を強化しているところです。今年度の文学研究科FDは，ハラスメント問題をテーマとして，学外の専門家をお招きしての講演会を企画しました。

講師は吉武清實氏（東北大学教授，高等教育開発推進センター学生相談所副所長）にお願いし，「ハラスメント～教員または教員組織として留意したいこと」という題目の講演を行っていただきました。吉武先生は，ご専門はコミュニティ心理学・臨床心理学であり，平成11年から東北大学学生相談所カウンセラーを務め，近年ではセクシュアル・ハラスメント，アカデミック・ハラスメントなどハラスメント被害の相談にもあたっておられる，この分野の専門家です。関連する共著に東北大学高等教育開発推進センター編『大学における学生相談・ハラスメント相談・キャリア支援－学生相談体制キャリア支援体制をどう整備・充実させるか－』東北大学出版会・2008年，日本学生相談会50周年記念誌編集委員会『学生相談ハンドブック』2010年などがあります。

当日は，文学研究科教員41名が出席し，熱心に講演に耳を傾けました。吉武先生は，文系研

究科・学部で起こりがちな教員と学生との間のハラスメントについて，豊富な事例を踏まえて明快に話を進められました。そのなかで，教員に求められる態度として，「研究室・分野・学科をマネジメントする姿勢」ということを指摘されていたのが印象的でした。また，大学院重点化によって，大学院生数は急増したことに加えて，多様な学力，多様な経歴の大学院生が存在していることにも注意を促しておられました。また，「叱責，叱ることについて」「脅すようなことば」など具体的に示しながらのお話しも大変有意義なものでした。これらを踏まえて，先生の言葉を借りると「生産性の高い研究室文化を作っていきたい」ものだと思います。

講演後には質疑応答の時間を設け，文学研究科教員との率直な意見交換も行っていただきました。ハラスメントに対応するための体制は，大学によって異なり，東北大学のあり方は大変よくわかりました。本学との違いも見受けられ，今後の体制づくりに大いに参考になりました。また，吉武先生も中心的な役割を果たしておられる日本学生相談学会の活動についてもご案内をいただきましたので，今後とも文学研究科としてこの方面における情報収集と研鑽に努めていきたいと考えています。



講演する吉武教授



真剣に聴き入る教員

（文学研究科）

先端生命科学研究院でFD研修会（ハラスメントを考える）を開催

先端生命科学研究院では2月14日（月）に「上級研究員セミナー」と題して学部・大学院教育担当教員を対象とするFD研修会を開催しました。プログラムは2部からなり、第一部では川端和重研究院長から「先端生命科学研究院の教育・研究活動報告」と題して、理学部生物科学科（高分子機能学）と生命科学院生命融合科学コースのそれぞれの教育組織の沿革、今後の大学院教育改革への取り組みなどが紹介されました。

第二部：「ハラスメントを考える」では、（1）ハラスメントに関するアンケート調査結果、（2）講演「大学のハラスメント」、（3）討論を行いました。研究室の学生指導や研究・事務業務の実態を把握し、その結果についてFD研修会で討論するため、FD研修会開催に先立ち、2ヶ月前に研究室スタッフ（学部・大学院教育担当教員（正規・非正規）、博士研究員、事務・技術職員）および研究指導を受ける学部生・大学院生合計約350名に対してハラスメントに関するウェブアンケート（理学

情報システムのアンケート機能を利用し、留学生・外国人スタッフのために英語版も作成）を実施しました（回答率は全体で約80％、正規教員で約95％）。

研修会当日は、アンケート集計結果のうち学生・スタッフそれぞれのアカハラ、セクハラに関する5大学平均化事例に従ったケーススタディの回答結果が紹介されました。二部後半では大畑昇教授（学生相談室補佐・歯学研究科）から「大学のハラスメント」について、本学の全学的な取り組みや学生相談室の利用方法などご講演いただき、参加者との活発な質疑応答が交わされました。

最後に川端研究院長から研究室の学生・スタッフの教育・研究環境支援として「なんでも相談窓口」を新たに設置することについて紹介されました。今回の教員FD研修会では日頃なかなか意識することが少ないハラスメントの防止への取り組みについて教員間で意見を出し合い、意識を新たにするきっかけになったことと思います。



一部：川端和重研究院長による教育組織と大学院教育改革の紹介



二部：学生相談室補佐 大畑昇教授による講演



熱心に傾聴する参加教員

（生命科学院・先端生命科学研究院）

総合博物館で新しい地震火山の展示を開始

理学研究院では3月1日（火）から、総合博物館1階の学術テーマ「知の統合」コーナーにおいて、地震火山に関する新しい展示を始めました。

新しい展示は、理学研究院で地震・火山現象を対象として研究に取り組んでいる地震火山研究グループ（附属地震火山研究観測センター、自然史科学部門地球惑星システム科学分野および地球惑星ダイナミクス分野）が共同で更新作業に当たりました。

総合博物館には、従来から地震火山に関する展示がありましたが、展示内容の大半が2000年有珠山噴火関連のものとなっていました。噴火から10年以上が経過していささか話題性に欠ける、地震に関する展示が少ないなどの指摘もあり、我々研究グループから展示内容の見直しを総合博物館に提案し、実現の運びとなりました。

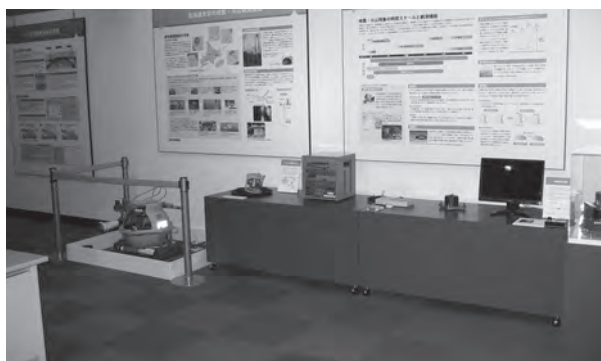
北海道は世界屈指の地震・火山地帯に位置しており、これまでに多くの災害を経験してきました。このため、地震・噴火災害から地域の安心安全を確保することは、北海道にとって最重要課題の一つとなっています。我々の研究グループは、地震・火山現象の発生メカニズムを

解明するための基礎研究を進めると同時に、地震・火山災害の防止軽減を目指した発生予測に関する研究にも取り組んでいます。

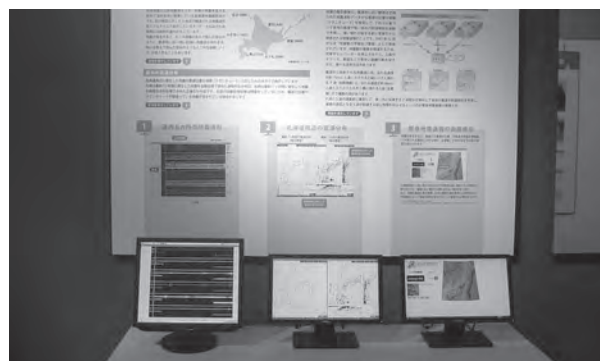
そこで、新しい展示では、『北海道の地震・火山－プレート沈み込み帯で繰り広げられる壮大なドラマ－』というテーマのもと、地震・火山現象に関する知識の普及啓発や我々の研究活動を紹介するパネルのほか、実際に使用している観測機器あるいは噴火による噴出物の展示を行っています。

また、地震火山研究観測センターのデータサーバとLAN接続した端末では、北海道周辺に発生する地震波形データや震源分布のリアルタイム表示も行っています。さらに、展示ブースには質問コーナーを新たに設け、訪れた見学者から展示内容に関する質問や我々の研究グループに対する要望などをお聞きし、それらに回答することによって、地域社会との持続的な対話交流の場として位置づけていきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の展示内容更新にあたり、ご支援ご協力下さった総合博物館の松枝大治館長はじめ多くのスタッフの方々に厚くお礼を申し上げます。



新しい地震火山の展示風景



リアルタイムデータの表示画面

（理学研究院附属地震火山研究観測センター）

えりも町と理学研究院が「相互協力協定」を締結 —地震津波防災の普及啓発等を通じ、相互発展を目指す—

えりも町と理学研究院は、防災教育、学術文化、地域振興、人材育成等の幅広い分野において連携、協力を深めることを目的として、3月1日(火)に本学で相互協力協定を締結しました。

えりも町は太平洋プレートが北海道下に沈み込む最前線に位置しており、北海道で最も地震活動の活発な地域のひとつです。漁業を基幹産業とするえりも町は、これまで多くの地震・津波被害を経験しており、特に津波に対する関心は非常に高いものがあります。一方、北大は、1971年に地震予知研究のための観測施設「えりも地殻変動観測所」をえりも町内に設置し、40年間にわたり地震・地殻変動観測を継続してきました。

調印式は、理学部本館中会議室において、岩本溥叙えりも町長、小山内幸治えりも町企画課長、山口佳三理学研究院長、谷岡勇市郎地震火山研究観測センター長ほか多数の関係者が参加

して、細野正廣理学・生命科学事務部長の進行により行われました。

山口研究院長からは、「幅広い分野での連携、協力を深めることで、5年後、10年後には必ずや地域社会の発展に貢献できると自負するとともに、我々自身の研究活動の一層の推進に繋がると確信している」との決意が述べられました。続いて、岩本町長からは、「本日の協定締結を契機に、当町が進めるべく防災行政や地域の振興発展、そして時代を担う子どもたちに受け継がれる事項となるよう最大の努力を傾注し、より災害に強いまちづくりを進めてまいりたい」とのご挨拶を頂戴しました。

今回の協定締結を機に、地域における地震・津波災害の軽減に向けた普及啓発活動や学校教育・生涯学習、人材育成などを充実させるとともに、地震津波に関する調査研究活動のより一層の進展を目指して、努力していきたいと考えています。



調印式で挨拶をする山口佳三研究院長



岩本溥叙町長と握手をする山口佳三院長(左)

(理学研究院附属地震火山研究観測センター)

北方生物圏フィールド科学センターが様似町との包括連携協定を締結

北方生物圏フィールド科学センターと様似町は、3月7日（月）に様似町において包括連携協定を締結しました。

様似町とは、これまで一部の研究者が交流を進めてきましたが、同町には特産品の日高昆布のほか、山全体がかんらん岩等で形成されたアポイ岳があり、そこには80種類以上の高山植物が生育しているなど学術的にも大変貴重な地域であることから、本センターとしても森林から耕地、海に至る研究者が揃う特徴を生かし、教育・研究及び地域の振興に貢献することができるフィールドとして活用が期待できるため、今回の包括連携協定の締結に至ったものです。

様似町で行われた調印式では、木下好和副町長から協定締結までの経緯について説明が行われた後、関係者が見守る中、長谷川周一セン

ター長と坂下一幸様似町長による協定書への署名が行われました。調印後の挨拶では、坂下町長から「地域の将来を担う人材育成やこの町が持つ自然や特徴を生かした地場産業の振興を期待したい」と述べられると、長谷川センター長からは「山、里、海へとつながるこの町は学術的にも興味深く貴重な生態系を有していることから、本センターの特徴を生かし、学術、教育及び地域の発展に貢献していきたい」と述べられました。

今後は本協定の趣旨である学術、教育及び文化の発展に関する各分野の協力を深めるとともに、地域の将来を担う人材育成や様似町の貴重な資源を生かした地域産業の振興の推進に向け、連携・協力を進めていくこととしています。



協定書にサインした長谷川センター長（左）
と坂下町長（右）

（北方生物圏フィールド科学センター）

第11回観光創造コロキウムを開催

2月18日(金)午後2時から、「社会における観光創造の地平～企業と社会との新たな関係構築を目指して～」をテーマに、第11回観光創造コロキウムをメディア・コミュニケーション研究院棟6階608号室にて開催しました。

予想を上回る約50名のご参加をいただき、立ち見がでるほど盛況な会となりました。本学国際広報メディア・観光学院観光創造専攻で学んだJR北海道、JR東日本の社員である滝澤真氏、田部井華代子氏、原田雅敏氏により、2年ないし1年間の在籍中に取り組んだ学修、研究成果をもとにしたプレゼンテーションを行いました。その後、3氏に加え臼井冬彦特任教授を司会役として、座談会風に企業と社会との関係はどうあるべきか、大学院生による研究の果たす役割、“観光創造”とは何か等について、和やかな中にも活発な意見交換が行われました。

会場からもJRの役割、社会における企業の役割等のご質問をいただき、現実社会に貢献できる観光創造研究を探求するための有意義な時間を参加者全員で共有でき、また今後の研究活動に各自が課題を持ち帰ることができたコロキウムとなりました。



会場との議論の様子



登壇者全員でのディスカッション

(観光学高等研究センター)

第10回観光創造フォーラムを開催

2月27日（日）午後1時半から登別市民会館において、第10回観光創造フォーラム『地域づくりの視点～地域づくりのプラットフォーム』を開催しました（後援：登別市、登別市教育委員会）。

観光学高等研究センターでは、NPO法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶ（理事長：松原條一）と共同で、昨年5月から「地域の中間システムの評価に関する共同研究会」を進めてきました。このフォーラムは、1年間の共同研究会の成果を広く市民に公表することを目的に行われました。当日は登別市の市民や市職員、モモンガくらぶ会員、大学関係者など、78名が参加しました。

小笠原春一登別市長の挨拶に続き、株式会社計画情報研究所研究員の森重昌之さんが「人と人をつなぐ」という地域づくりの中間支援の役割について講演しました。そして、中間支援の具体的な事例紹介として、モモンガくらぶ事務局長の吉元美穂さんから、モモンガくらぶの子

育て支援の取り組み経緯について報告がありました。

後半は、社会福祉法人札幌厚成福祉会札幌第二保育所副所長の田辺達也さん、小田原足柄異業種勉強会主宰の中村壯一郎さん、モモンガくらぶ理事長の松原條一さん、池ノ上真一特任助教の4名のパネリストと、コーディネータ・敷田麻実教授によるパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションでは、市民がモモンガくらぶのボランティア活動を通じて学習していること、地域や企業における学習機会が失われつつある中で、こうした人材育成が重要になっていること、人材育成を図る中間支援としてモモンガくらぶが大事な役割を担っていることなど、各地の取り組みを交えながら議論しました。

フォーラムは飲み物を片手に和やかな雰囲気で行われ、地域づくりの中間支援について考えるひと時となりました。



パネルディスカッションの様子



会場を埋めた多くの参加者

（観光学高等研究センター）

大学院生による博物館展示リニューアルの取り組み (3)

平成19年度後期より、文学研究科の佐々木亨教授に総合博物館の湯浅万紀子准教授が協力して、来館者調査に基づいた展示制作に取り組む「展示制作プロセス演習」を行っています。その演習の一環として、平成20年度より、総合博物館の監修のもと、大学院生達が同館1階の「人間・社会・自然と科学技術」展示室のリニューアルに取り組んでいます。平成20年度と21年度の取り組みについては、本誌平成21年5月号と平成22年4月号に報告しました。

平成21年度以降、新規展示を単年度更新制で制作しています。平成22年度は、工学研究院エネルギー環境システム部門 エネルギー変換システム研究室の近久武美教授と、工学研究院応用物理学部門 量子機能工学研究室のオリバー・ライト教授が、展示制作にご協力下さいました。

展示制作プロセス演習の大学院生は、2グループに分かれ、両研究室へのヒアリングを重ねて、研究内容を展示という形でいかに社会に伝えるかを検討しました。両研究室とも、教員や大学院生、学部生が、文系の大学院生の多い展示制作演習のメンバーに対して丁寧に説明を続け、多方面でご協力下さいました。総合博物

館の教職員には、随時進捗を報告し、議論・確認しながらリニューアルを進めました。展示制作演習の大学院生達が担った役割は、展示パネルの解説文の推敲、模型の説明文や操作マニュアルの作成、絵本の翻訳、展示物の制作・設営の補助など、多岐にわたります。今年度は総合博物館の藤田良治助教の指導を受け、映像コンテンツの制作にも挑戦しました。展示物を提供する企業や展示制作会社など学外の方々との協働作業の場面も多くありました。

そして、1月末に、近久教授の研究を紹介する「PEM型燃料電池で創る未来」と、ライト教授の研究を紹介する「音を見よう！ーナノレベルの波が見せる結晶と螺旋上の波の不思議な世界」という展示が完成しました。いずれも実物資料や体験型の展示から構成されており、来館者の能動的な観覧を促すことが意図されています。

今後、来館者調査を実施し、展示制作者の意図が伝わっているかを検証する予定です。ぜひ、工学院と展示制作演習のメンバーと総合博物館のコラボレーションの成果である展示をご覧いただき、ご意見をいただきたいと思います。



「PEM 型燃料電池で創る未来」
(近久武美教授研究室)



「音を見よう！ーナノレベルの波が見せる結晶と螺旋上の波の不思議な世界」
(オリバー・ライト教授研究室)

(総合博物館)

総合博物館土曜市民セミナー「北海道の背骨の生い立ちを探る～衝突によってできた日高山脈～」を開催

総合博物館では1月8日（土）に、資料部研究員の在田一則氏が講師を務め、土曜市民セミナー「北海道の背骨の生い立ちを探る～衝突によってできた日高山脈～」を開催しました。

「動かざること山の如し」と言いますが、一方では「桑田変じて滄海となる」という言葉もあります。46億年の地球の歴史のなかで、地球の表層部（深部も）は地質学的時間スケールでは常に千変万化しており、山が海になるどころか、大陸が移動し、互いに衝突・融合して超大陸を造ることもありました。北海道の背骨（脊梁山脈）といわれる日高山脈は島弧-島弧衝突型の造山帯で、衝突型造山帯の内部や地表で起こるいろいろな出来事（地殻変動）がよく観察できます。天然記念物に指定され、最近では日本ジオパークにもなった日高山脈南端部のアポイ岳を作っているかんらん岩が、本来の場所である地下100kmを越える深部（マントル）から上昇し、現在地表に露出しているのもこの衝突過程の産物です。

講演は、地球の深部構造と大陸の移動をもたらすプレート運動の説明から始まり、日本を含む東アジアの約2億年前の古地理、さらに1億年前以降の北海道周辺でのプレートの配置とそれらの相互運動が話されました。中央北海道は数千万年前以降のユーラシアプレートとオホーツクプレートの接近・接合により形成され、その過程で、現在の日高山脈に分布するいろいろな岩石が深いところでは地下30km近い深部で作られました。その後、太平洋プレートの沈み込みによって千島弧（島弧）が南西に移動し、

前方の東北日本弧（島弧）に衝突するという現象（千島弧の西進・衝突という）が生じました。この西に押し付ける構造力の影響により、地下30kmで作られた岩石が東に傾斜した断層にそって西側にめくり上がって地表に露出したのが原日高山脈で、千数百万年前以降のことです。

日高山脈をもたらした断層は日高主衝上断層と呼ばれ、現在山脈の西側にそって山脈全体に延びています。山脈を作った日高主衝上断層の運動はやがてほぼ終息しましたが、千島弧の西進運動はその後も続き、衝上断層の活動場は時代とともに西方に移動しました。日高山脈西方の石狩炭田に見られる、地層が褶曲し断層で切られる複雑な地質構造、あるいは活断層であるさらに西方の馬追丘陵西縁の馬追断層は、この現在も続いている西に押し付ける構造力の反映と考えられています。

東の十勝原野から見る日高山脈が、山岳画家坂本直行氏が描くように間近に迫って蜿々と延びているのに対して、西の日高海岸からみる日高山脈が幾多の前山の向こうに見え、また、山脈西側の河川の土砂流出量が日本でも有数に多いのは、このような日高山脈の成り立ちを反映しているからとのことでした。

3連休の初日、さらに荒天という悪条件にも関わらず、約100名の参加者があり、また、同じ地学ではありますが、火山や地震とは異なりあまりなじみのない造山運動の話題であったにもかかわらず、多くの質問も寄せられ盛況のうちに終えることができました。



講演する在田講師

（総合博物館）

総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催

総合博物館では平成16年より、学術標本やサンプルを正しく同定し、整理する能力を有し、環境調査・教育において必要とされる人材である「準分類学者（パラタクソノミスト）」を養成することを目的に、パラタクソノミスト養成講座を開催しています。平成20年度の後半からは本学教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」のもとで開催してきました。今年度は、計30講座が開講されており、1月～2月にかけては、以下の日程で5つの講座が開催され、多くの市民や学生が参加し、熱心に取り組んでいました。

1. 木製品パラタクソノミスト養成講座（中級）

1月22日（土）と23日（日）の両日、埋蔵文化財調査室室員の守屋豊人氏、農学研究院助教の佐野雄三氏、北方生物圏フィールド科学センター研究員の渡邊陽子氏が講師を務め、学生や市民ら7名が参加しました。

1日目は、まず、前回の初級講座の復習も兼ねて、木製品についての説明や観察方法の説明があり、その後遺跡の発掘から木製品の採取・保存・観察の流れについての説明を受けました。午後からは、札幌市立中央図書館へ移動し、守屋講師の解説のもと、北海道における遺跡や昔の人びとの暮らしについて学んだほか、実際に出土した木製品を観察し、木製品の特徴をそれぞれ発表しました。その後、本学埋蔵文化財調査室に移動し、北大構内の遺跡から出土した木製品を観察しました。

2日目は、はじめに、肉眼的な特徴に基づく、木材の樹種識別を行う上での注意事項についての説明があり、その後、針葉樹と広葉樹と

に分けて、木材を肉眼識別する際の指標についての解説を受けました。午後からは、午前中に行われた針葉樹と広葉樹の指標説明、検索工程に基づいて、18種類の樹木の同定に挑戦しました。休憩後、総合博物館を見て回り、肉眼識別によってある程度まで樹種同定ができることを確認し、最後に、同定した18種類の樹種の現在の使用状況、硬さ、熱伝導性などの特徴についての説明を受けました。



講義を行う佐野講師

2. 昆虫パラタクソノミスト養成講座（初級）

1月29日（土）と30日（日）の両日に開催され、当館の大原昌宏准教授と大阪府箕面公園昆虫館学芸員の澤田義弘氏、当館資料部研究員の稲荷尚記氏が講師を務めました。

1日目は、まず、昆虫の体制や系統、それぞれの昆虫の目の形態・生態などに関する講義と、昆虫の捕虫網や罠を使った昆虫の採集法についての説明を受けました。講義後、昆虫の検索票の使い方についての説明を受け、その後、

実体顕微鏡と検索票、図鑑などを用いて、あらかじめマレーゼトラップによって採集されていた昆虫の目までの同定に挑戦しました。

2日目は、前日に引き続き、マレーゼトラップによって採集された昆虫サンプルの目までの同定を行いました。また、平行して、あらかじめ用意した昆虫サンプルを用いて、マレーゼトラップでは採集されないような昆虫も含む、同定困難な昆虫（コナカゲロウ、トコジラミな

ど)の同定をクイズ形式で行いました。その後、サンプルを片付けてから、ツルグレン装置を用いた土壌動物の採集法に関して、実際の抽出の様子を見ながら、解説を受けました。午後からは、午前に説明を受けたツルグレン装置で抽出された動物をソーティングし、昆虫については目までの同定を行いました。その後、昆虫の標本作成法(用いる道具、作成手順、ラベルの記入の仕方と意義など)に関して簡潔な説明を受けました。

3. 鉱床パラタクソノミスト養成講座(上級)

2月12日(土)と13日(日)の両日に開催され、当館の松枝大治教授と工学研究院博士研究員の高橋亮平氏が講師を務めました。

1日目は、まず、基礎講義から始まり、その後、昼休みまで配布された岩石試料や受講者が各々持ち込んだ試料を岩石用カッターで数cm四方の大きさにカットし、切断面を回転研磨台で粗磨きしました。午後は研磨片作りの続きを行い、まず粗磨きした研磨面をガラスプレートと研磨剤で徐々に磨き上げ、最終的に、細かいダイヤモンド粒子が入ったペーストを使ってダイヤモンド琢磨機で鏡面仕上げをしました。それぞれ1~3個の試料を磨き終えた後は、用意された流体包有物用の試料を使って、流体包有物がどのようなものか顕微鏡で観察しました。

2日目は、午前・午後通して1日目に作成し

4. 化石パラタクソノミスト養成講座(初級)

2月19日(土)に開催され、当館の小林快次准教授が講師を務めました。

初めに、脊椎動物の骨格の作りやその進化、古生物の研究法などに関する講義が行われ、その後、2組に分かれて、現生ワニの全身骨格とティラノサウルスの頭骨模型の組み立て、デスマスチルス、ワニ、ニッポノサウルスの骨のスケッチ・記載を行いました。午後もし引き続き、骨格標本の組み立てと骨標本のスケッチ・記載を行い、組み立て班は、講義の内容をヒントに、骨の観察をじっくり行いながらバラバラになった数十個の骨を組み立て、ある程度組み立て終わると、講師と答え合わせをしながら、脊椎動物の骨格に関して理解をさらに深めまし



昆虫標本の作成方法を説明する大原講師と参加者

た研磨片と博物館で用意した流体包有物用の試料を用い、4つの組に分かれて、1組が流体包有物の加熱・冷却実験、1組が反射率・Vickers硬度測定実験、残り2組は反射顕微鏡で鉱物観察・流体包有物観察というようにローテーションを組んでそれぞれ実験を行いました。



研磨作業に取り組む参加者

た。スケッチ班は、観察やスケッチの要点についての指導を受け、動物の種類や骨の部位を知らされないまま観察を行い、その後、3階展示室に移動し、自分で描いたスケッチと記載のみを頼りに、その骨がどの動物のどの骨かを同定しました。



現生ワニの骨格標本の組み立てに取り組む参加者

5. 岩石パラタクソノミスト養成講座（上級）

2月19日（土）と20日（日）の両日に開催され、当館資料部研究員の在田一則氏と当館の松枝大治教授が講師を務めました。

1日目は、午前中に、簡単な岩石薄片の作り方や2日目に観察する変成岩についての基礎講義を受け、午後からは薄片作りを行いました。それぞれ持参した岩石試料や在田講師より配布された岩石試料を手に、岩石カッターを用いてスライドガラスに収まるようなサイズにカットし、回転研磨機にて粗粒な研磨粉で粗磨きを行いました。粗磨きが終わると、より細かい研磨粉を使いガラス板で磨き上げ、鏡面仕上げをし、樹脂を用いてスライドガラスに貼り付け、作業を終了しました。

2日目は前日に引き続き、薄片試料作製を行い、スライドガラスに貼りつけられた岩石試料を二次切断機によって厚さ約0.5mmにカット

し、それを回転研磨機と粗粒な研磨粉でさらに0.1mm以下の厚さにし、さらにガラス板を用いて0.03mmの厚さに調整しました。午後からは、顕微鏡下での薄片試料の様子をモニターに映しながらの講義や、質問の時間を挟みながら、偏光顕微鏡で自作試料と配布試料の観察を行いました。



偏光顕微鏡で資料の観察に取り組む参加者

（総合博物館）

総合博物館で北大教育GP主催 「卒論ポスター発表会」開催

総合博物館では、本学教育GPの社会体験型科目の一環として、平成20年度より「卒論ポスター発表会」を開催しています。この春本学を卒業するさまざまな学部・分野の学生が、4年間で学んだことや研究した成果を1枚のポスターにまとめて発表するもので、学会での発表とは異なり、一般市民や他分野の学生にも理解できるようなポスターを作成し、わかりやすく説明することが求められます。卒業研究を市民の方々や他分野の学生に分かりやすく発表し、質問に应答することによって、コミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。

今年度は、2月26日（土）と27日（日）に、総合博物館1階「知の交流」コーナーで開催されました。ポスターとHPでの公募により、工学部から1名、水産学部から1名、理学部から1名、農学部から4名、文学部から4名の計11名の発表者が参加しました。ポスター展示は2日間行われ、2日目には発表者がポスターの前に立ち、来場者に向けて発表を行い、質問に答えました。また2日目の午後にはPRタイムを設け、発表者が3分ずつ、それぞれのポスターの内容や見所などを紹介しました。最後に、2

日間の来場者の投票による「来館者賞」と、市民7名、教員6名から成る審査員の投票による「優秀コミュニケーション賞」、「優秀デザイン賞」、「最優秀賞」を決定し、表彰式と講評会を行いました。

今年度は、「来館者賞」は水産学部の深谷厚輔さんが、「優秀コミュニケーション賞」は農学部の細谷信二さんが、「優秀デザイン賞」は農学部の村松弘規さんが、「最優秀賞」は工学部の鈴木雅人さんが、それぞれ受賞しました。

来場された市民の方々にとっては、北大生がどのようなことを学び、研究しているのかを知る良い機会となり、一方、来場された教員や学生にとっては、普段は知ることのない他学部の研究成果を知る良い機会となりました。また、発表した学生達にとっては、卒業研究を分かりやすく1枚のポスターにまとめ、それを異なる分野の方々に分かりやすく伝え、さまざまな質問に答えるといった、普段の学生生活では味わうことのできない貴重な経験を積む良い機会となりました。

「卒論ポスター発表会」は来年度も引き続き開催していきますので、ご協力のほどよろしくお願いします。



ポスター前で来場者の質問に答える参加学生



表彰式の様子

（総合博物館）

北海道大学病院で病後児保育室「ぶらん」開室

北海道大学病院では、2月24日(木)北海道大学病院病後児保育室「ぶらん」開室式が行われました。

病後児保育室については、子育て支援に関して病児保育のニーズの高まりがあることを受け、安心して子育てが出来る環境を整備するために、北海道大学病院教職員を利用対象として、歯科診療センター1階に開室することとなりました。

「ぶらん」とは仏語で「白」を意味しており、北国の白銀の雪景色と子供のピュアさをイメージし、暖炉のぬくもりのような暖かい保育室になるよう願いを込めて名付けられました。

開室式では、福田諭病院長より保育室の命名者への賞状授与が行われ、賞状授与後には、福田病院長、川畑いづみ看護部長等が新設された「ぶらん」を見学し、終始あたたかい雰囲気の中、開室式は終了しました。



賞状を授与する福田病院長



「ぶらん」前にて福田病院長(右)と
川畑看護部長(左)



「ぶらん」室内の様子

(北海道大学病院)

お知らせ

〈共済組合員の皆様へ〉

被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに

新たに被扶養者として認定となる場合、又は被扶養者としての資格を失う場合は、組合員証を添えて「被扶養者申告書」を下記の添付書類とともに、速やかに（30日以内）所属部局の共済事務担当係へ提出願います。

なお、届出が30日を超えると、組合員の皆様に不利益が生じる場合がありますのでご注意ください。

○新たに被扶養者となる場合（認定）

1. 子供が生まれたとき・・・戸籍謄本等
2. 結婚したとき・・・戸籍謄本、扶養の申立書等
3. 会社を退職したとき・・・戸籍謄本、扶養の申立書及び雇用保険関係書類等
※配偶者の認定の場合は、同時に国民年金の変更手続きも必要となります。
詳細につきましては、所属部局の共済事務担当係へお問い合わせください。

○被扶養者が満22歳に達し、翌年度以降も引き続き扶養する場合（認定更新）

★「扶養の申立書（認定更新用）」の添付は必須。

1. 学 生 ……………在学証明書（平成23年4月以降の発行年月日のものに限る）
2. 無 職 ……………前年分（平成22年分）の所得の内訳が証明された所得（課税）証明書（市町村交付）
3. アルバイト等……給与支給（見込）等証明書（平成23年4月～平成24年3月の1年間分）
注意）・平成22年検認時の申告が、「無職」の場合は、前年分（平成22年分）の所得の内訳が証明された所得（課税）証明書の添付も必要となります。
・平成23年4月以前よりお勤めされている場合は、平成22年検認時提出分以降から（検認後からお勤めされている場合は採用日から）平成23年3月就労分までの実績の証明も必要となります。

※平成23年4月中に、速やかに手続きをお願いします。

※外国の在学証明書等には、必ず和訳を添付願います。

※所得（課税）証明書については、例年5月中旬以降より前年分の所得内訳が証明されたものが交付されるため、5月中旬以降速やかに提出願います。

○被扶養者としての資格を失う場合（取消）

1. 就職したとき……採用の辞令の写し又は就職証明書等（採用後の発行年月日のものに限る）
2. 死亡したとき……戸籍謄本又は埋葬許可証若しくは火葬許可証の写し
3. 所得が増えたとき…給与支給（見込）等証明書、年金受給者の場合は年金証書又は年金改定通知書の写し及び申立書

※ 将来に向かって1年間（注1）に130万円以上、又は①月額108,334円以上の収入が2ヶ月以上引き続き見込まれるとき、②3ヶ月間の平均月額が継続的に108,334円以上となることが見込まれるとき（その後、無職無収入となることが確定している場合も含む）は、恒常的所得とみなし、見込まれる時点（給与の支

給日ではなく、就労開始日等、被扶養者としての要件を欠くに至った事実が生じた日)において取消となります。

(注1) 暦年(1月～12月)又は会計年度(4月～翌年3月)という特定の期間の所得ではなくどの時点からも将来にわたり見込まれる所得です。

★年末調整における所得の見方とは異なりますのでご注意ください。

※①、②いずれの場合も、年額130万円未満であったとしても取消となります。

※給与所得とは、通勤手当や賞与等の諸手当を含み、税金等控除前の給与所得総額を指します。手取りの金額ではありませんのでご注意ください。

※給与支給(見込)等証明書の様式については、所属部局の共済事務担当係より指定された様式を使用し提出願います。

※事業所得等については、経費の考え方が所得税法上とは異なりますのでご注意ください。

<注 意>

①被扶養者としての資格を失っているにもかかわらず、扶養取消の手続きをせずに医療機関等で組合員証を使用した場合は、後日その分の医療費を返還していただくことになります。

特に、例年9月の組合員証等の検認時、あるいは所得税法上の所得調査等の関係で所得額超過が発覚し、高額な返還金が発生する事例が数多く見受けられますのでご注意ください。

②取消の届出が30日を超えてなされた場合は、上記の添付書類の他に「遅延申立書」が必要となります。(届出の遅延につきましては、財務省等の監査時においても厳しい指摘を受けていることから、速やかに届出をお願いします。)

③認定・取消、いずれの場合も必ず事実発生日を確認できる公的な書類及び証明書等の添付が必要となります。申立書のみでの認定・取消をすることはできませんので、ご承知おき願います。

④戸籍謄本等の証明書類については、3ヶ月以内に発行されたものを添付願います。

⑤共済組合への提出書類の訂正は、必ず訂正印を使用願います。(砂消・ホワイト不可)

⑥申告書、申立書等の申告者等氏名については、必ず署名(ゴム印等不可)となりますのでご注意ください。

⑦申告書等への押印については、シャチハタ以外の印鑑を使用し、鮮明に押印願います。

上記については一般的な例であり、この他にも認定又は取消の対象に該当する場合がありますので、被扶養者に異動があったときは、速やかに所属部局の共済事務担当係にご相談願います。

また、お引越しをされて住所が変更になった場合は、組合員証を添えて「記載事項変更申告書」を所属部局の共済事務担当係へ提出願います。申告をせずにご自身で組合員証等の記載事項を加筆修正することは認められていませんので、ご注意ください。

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

理事・副学長退任にあたって

本年3月31日限りで理事・副学長を退任される方々の略歴とお言葉を紹介します。



逸見 勝亮 氏 (理事・副学長)

昭和18年6月3日生

(略歴)

昭和41年3月

北海道大学教育学部教

育学科卒業

昭和49年4月

北海道大学教育学部助

手

昭和54年4月 北海道大学教育学部助教授

平成元年4月 } 教養部連絡教官

平成2年3月 }

平成3年3月 北海道大学教育学部教授

平成7年4月 } 学生委員会委員

平成11年3月 }

平成9年5月 } 総長補佐

平成10年4月 }

平成10年4月 } 北海道大学評議員

平成14年3月 }

平成12年4月 北海道大学大学院教育学研究科
教授

平成13年5月 } 総長補佐

平成14年3月 }

平成14年4月 北海道大学大学院教育学研究科
長・教育学部長

平成17年5月 北海道大学理事・副学長，附属
図書館長，大学文書館長

事・副学長の6年間を書くことはできないが、役員補佐・各種委員を引き受けてくれた教員に御礼申し上げる。そして、僕と一緒に業務に精励してくれた事務職員に、敬意を込めて多謝と記しておく。

4月からは研究三昧ぞ。

学生と渉りあうのは、試行錯誤だったとしか言いようがない。勤めた頃の頃、演習に行き詰まり、学生と「生きる」（黒澤明，1952年）を観た。ブランコに揺られて「ゴンドラの唄」を眩くように歌う志村喬，見終わって誰も声を発しなかった。僕は朝から晩まで学生と一緒にだった。

学生委員会第二小委員長・評議員・総長補佐が重なったのは、「激務」だった。恵迪寮生とは月に2回は渉りあい，会う毎にコトは進んだ。改修成った寮の風呂で，寮生が僕の背中を流している光景は，美しくはないが，愉快そのものではないか。拙著『学童集団疎開史』（1998年）は，このさなかに上梓なった。

教養部連絡教官のことは書きたいが，紙幅がない。研究科長の3年間は書きたくない。理

はやし

ただ

ゆき

林 忠 行 氏 (理事・副学長)



昭和25年 7月26日生

(略 歴)

昭和50年 3月

東京都立大学法学部卒業

昭和50年 4月

一橋大学大学院法学研究科博士前期課程修了
(法学修士)

昭和53年11月} チェコスロヴァキア政府奨学金

昭和55年11月} でカレル大学哲学部留学

昭和57年 3月 一橋大学大学院法学研究科博士
後期課程単位修得退学

昭和57年 4月 一橋大学法学部助手

昭和60年 4月 広島大学法学部助教授

平成 3年 8月 広島大学法学部教授

平成 6年 4月 北海道大学スラブ研究センター教授

平成 8年 3月} 北海道大学スラブ研究センター長,

平成10年 3月} 評議員

平成16年 4月} 北海道大学役員補佐

平成18年 3月}

平成18年 4月 北海道大学理事・副学長

スラブ研究センターに赴任したのは17年前の春でした。札幌生まれなので、およそ30年ぶりの帰郷ということでした。研究対象とする東欧の大変動から5年ほど経過した時期で、体制転換の過程を追跡するという仕事に夢中になっていました。センターでは国際的な共同研究プロジェクトの組織という任務が加わり、その過程で数多くの優れた外国の研究者との交流も広げることができました。

平成8年度から2年間、センター長を仰せつかり、平成16年の法人化と同時に役員補佐、18年から理事・副学長になり、5年間もその職にとどまることになりました。その間、私の専門の外で活躍する北大の数多くの優れた先生たちや事務局の職員の皆さんと様々な道筋で仕事をともにさせていただきました。

再度、新しい環境で教員として生きるべく、北大を離れる決心をしましたが、合計で17年間を過ごした北大のさらなる発展を、少し離れたところから、心よりお祈り申し上げます。

おか

だ

ひさ

たけ

岡 田 尚 武 氏 (理事・副学長)



昭和19年 3月 4日生

(略 歴)

昭和41年 3月

北海道大学理学部卒業

昭和43年 3月

北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
理学修士昭和46年 3月 北海道大学大学院理学研究科博士
課程修了 理学博士

昭和46年 3月 ウッズホール海洋研究所研究員

昭和48年10月 コロンビア大学附属ラumont・
ドーティ地質学研究所研究員

昭和51年11月 山形大学理学部助教授

昭和63年 4月 山形大学理学部教授

平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成13年 5月} 北海道大学評議員

平成15年 4月}

平成15年 5月 北海道大学大学院理学研究科長
・理学部長平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院長
・理学院長・理学部長

平成19年 4月 北海道大学理事・副学長

学生・教職員として通算25年間を北大で過ごさせて頂きました。学生・院生時代は北海道の自由さと自然を満喫しましたが、最後の2年は大学紛争で異様な雰囲気でした。しかし、学位取得後の6年を過ごした米国では、夜のニュースの最後に、キャスターが「我々は今週敵(ベトナム共産党)を何人殺し、見方の兵士何人を失った。これが現実です」といって締めくくることが常でしたし、同じラボのPDが「徴兵逃れのために明日からカナダへ逃げ出す」と告げていなくなるなど、日本の大学紛争などとはレベルの違う緊迫感でした。

大学人としての後半の16年間は北大で勤務し、最後の8年間は管理職でしたが、研究者として係わる範囲とは異なる種類のトラブルシューティングと、時々刻々の判断を求められ大変でした。しかし、チームを組んだ教員・職員の協力で、部分的ではありますが法人化後の大学運営のあり方がある程度整理できたかなと自負しています。協力頂いた方々に感謝すると共に、北大が今以上に良くなることを祈念しております。

脇 田

みのる

氏（理事・副学長）



昭和19年 4月20日生

（略 歴）

昭和45年 5月

東京医科歯科大学歯学部卒業

昭和49年 3月

東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了

昭和49年 3月 歯学博士（東京医科歯科大学）

昭和49年 4月 新潟大学歯学部助手

昭和49年10月 新潟大学歯学部講師

昭和52年 5月 新潟大学歯学部助教授

昭和56年 8月 北海道大学歯学部教授

平成 6年 8月 } 北海道大学評議員
平成 8年 7月 }

平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科教授

平成12年 8月 } 北海道大学評議員
平成13年 3月 }

平成13年 4月 } 北海道大学大学院歯学研究科長
平成15年 3月 } ・歯学部長

平成19年 5月 北海道大学理事・副学長

1981年 8月に新潟大学から本学に赴任して、30年近くがたちました。恵まれた研究生活の最後の4年間を佐伯総長の下で、教育、学生、入試、ハラスメント等を担当させていただき、それぞれの分野でよりよい方法を考えてきました。任期当初から最大の課題であった大きく入試方式の導入も、各部署の教職員のご協力で見事実現しました。これに伴う初年次教育の見直しも、関係各位のご努力で輪郭の明瞭なカリキュラムになりました。今年度からの導入で、学生がのびのびと大学生活を送ってくれることを期待しています。教育改革室を主宰するものとして中期目標・中期計画の実現に力を尽くしたつもりでしたが、振り返ってみると不十分な点が多々あります。2009年の前期日程入試では、大雪のために1日順延しましたが、全ての教職員が粛々と対応されたことは、忘れられない事件でした。

世間から学生が“さすが北大”と言われる北大の教育がさらに充実することを期待いたします。

定年退職を迎えるにあたって

本年 3月31日限りで定年退職される方々の略歴とお言葉を紹介します。

うら

い

やす

お

氏（文学研究科教授）



昭和22年 7月24日生

（略 歴）

昭和44年 3月

京都大学理学部

昭和46年 3月

京都大学文学部卒業

昭和48年 3月

京都大学大学院文学研究科修士課程修了

昭和51年 3月 京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学

昭和52年 5月 福井大学教育学部講師

昭和54年10月 福井大学教育学部助教授

平成 9年10月 北海道大学文学部教授

平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授

50歳の時、福井から北大に移り13年間お世話になりました。理学部（化学）出身の私には、頭の中で概念を操作して論を運ぶという、文学部の発想は最後まで苦手でしたが、手でデータを操作して物を考えるという領域を言語学の中に見つけ、なんとか生き残ることが出来ました。また「数学生まれの英語育ち」と言われた計算機に、ロシア語処理の可能性を見出し、それにのめり込んで作業を進めました。おかげでパソコンによるロシア語の分析で、ロシア人でも手作業では決して見通せないデータを作成し、それに基づいて研究を進めるというスタイルを作り上げました。

多感な精神形成の時期を京都で過ごし、その後もずっと関西の古代ロシア研究会に参加していたため、関西の実証的で開放的な学風に慣れた私には、関東的な北大の気風はなかなか馴染めませんでした。ただ60歳を前にして胃の全摘手術をしてからは、大学の同僚、事務方、学生さんに公私共に支えられ、定年を迎えることができました。皆様に感謝しています。

たか へい ひで とも
高 幣 秀 知

氏 (文学研究科教授)

昭和23年 3月29日生

(略 歴)

昭和47年 3月

東京大学教養学部教養
学科ドイツ分科卒業

昭和50年 3月

東京大学大学院人文科
学研究科修士課程修了



昭和56年 4月 中央大学法学部専任講師
昭和60年 4月 北海道大学文学部講師
昭和63年 4月 北海道大学文学部助教授
平成 8年 2月 北海道大学文学部教授
平成11年 4月 博士(文学) (東京大学)
平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授

在職26年のうち、最初の10年余はおもに旧・教養部で社会思想史を、その後は文学部・大学院哲学講座で社会思想史・哲学を担当してきた。かつての騒乱と反動の時代、そしてこれから予見される混迷の時代に比すれば、やや平穏な時間ではあり、また無為無策の期間でもあったとおもわれる。

ルカーチ弁証法の探究からはじめた私の研究は、日本学術振興会「日独科学協力事業」によって、フランクフルト・ゲーテ大学の社会研究所 ホネット教授との連携へと展開され、昨今では「ハンガリーの窮状と危機にかんする声明」へと連なっている。北海道大学創成科学研究機構に係った時期には、「承認をめぐる闘争」の論理を科学・技術論へと接続し、テクノ・ビューロクラシー問題を主題化すべく試みた。社会文化的維持・再生産の行程は、保身と支配だけではなく、選択と刷新の契機を含意しているからである。こうした契機が欠落するとき、破綻の果てに望見されるのは廢墟であろうか。

哲学・社会思想史上の古典を学生諸君と精読するその都度、なお未決の課題群に想到し、未踏の問題次元が開かれる。江戸のむかし、白石と号した碩学は、幕閣を退いたあとようやく著述に専念することができた、という。較ぶべくもなからうが、願はくはひとつの鑑であってほしいものである。以前には遠くおもわれもした「都ぞ弥生」、そのワン・フレーズが、ふと近く聴こえては、消えてゆく。

たき がわ てつ お
瀧 川 哲 夫

氏 (文学研究科教授)

昭和22年10月16日生

(略 歴)

昭和45年 3月

関西学院大学文学部卒
業

昭和47年 3月

関西学院大学大学院文
学研究科修士課程修了



昭和50年 3月 関西学院大学大学院文学研究科
博士課程単位取得退学
昭和50年 4月 親和女子大学文学部専任講師
昭和54年 4月 親和女子大学文学部助教授
昭和55年 4月 北海道大学文学部講師
昭和60年11月 北海道大学文学部助教授
平成 7年 4月 北海道大学文学部教授
平成10年 2月 } 北海道大学評議員
平成12年 3月 }
平成12年 4月 北海道大学大学院文学研究科教授
平成12年 4月 } 北海道大学大学院文学研究科長
平成14年 3月 } ・文学部長
平成14年 4月 } 北海道大学留学生センター長
平成16年 3月 }

世界有数のすばらしいキャンパスを持つ北大で人生の半分を過ごせたことは幸甚でありました。多くの人に助けられて、研究教育と運営の生活を続けることができました。同僚や学生諸氏との楽しい知的会話は何事にも代え難い経験でした。触れ合えたみなさまに深く感謝申し上げます。

その後半では、国立大学の位置づけが急激に変化していくプロセスを目の当たりにしました。日本の高等教育百年の大計があったが故とは思えなかったもので、そのような時代ということかもしれません。これからは国立大学法人という制約のもとで北大独自の高等教育文化を作り上げることが北大のアンビションになるのでしょうか。今後、どのような道筋であれ、北大が高等教育・研究の拠点として名実ともにさらに発展していくことを心より願っております。

まつ おか まさ のり
松 岡 昌 則



氏（文学研究科教授）

昭和22年 9月24日生

（略 歴）

昭和46年 3月

東北大学教育学部卒業

昭和48年 3月

東北大学大学院教育学

研究科修士課程修了

昭和51年 3月

東北大学大学院教育学

研究科博士課程単位修

得退学

昭和52年 4月 東北大学教育学部助手

昭和56年 5月 秋田大学教育学部講師

昭和58年10月 秋田大学教育学部助教授

平成 5年 4月 秋田大学教育学部教授

平成10年 4月 秋田大学教育文化学部教授

平成14年10月 北海道大学大学院文学研究科教授

大変お世話になりました。8年半という短い期間でしたが、北海道という広い大地で、そして北大で学ぶことができ、感謝しております。本州の、なかでも東北の農村を歩いてきた小生にとって、北海道の農村・農民を理解するのに、かなり時間を要しましたが、やっと何とか整理しようと思っているところです。

現在の地域研究では縮小化する社会における地域の再生が大きな課題になっているところですが、日本の村落が持っているさまざまな知恵を、現代に活かす方法を考えたいと思います。分断化する個人や家族をもう一度結集する論理の構築です。もちろんそう簡単にはいかないとおもいますが、これからゆっくり進みたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

やま ざし とし お
山 岸 俊 男 氏（文学研究科教授）



（略 歴）

昭和45年 3月

一橋大学社会学部卒業

昭和47年 3月

一橋大学大学院社会学

研究科修士課程修了

昭和57年 6月

社会学博士

（ワシントン大学）

昭和56年 5月 ワシントン大学社会学部研究員

昭和56年10月 北海道大学文学部助教授

昭和60年 4月 ワシントン大学社会学部助教授

昭和63年 4月 北海道大学文学部教授

平成 5年 1月 北海道大学大学院文学研究科教授

平成19年 4月 北海道大学社会科学実験研究セ

平成23年 3月 ンター・センター長

最初に北大に奉職してから30年になります。その間、特に一度辞職しアメリカの大学で3年間の教員生活を過ごした後北大に戻ってからの、北大をはじめとする日本の大学の変化はとても印象的です。アメリカでの研究生生活を一方ではエンジョイしながら、もう一方では本当に意味があると思える長期的研究をしたいという思いで戻ってきた日本の大学は、気がついてみると、いつの間にか短期的な成果競争に追われる世界になっていました。

それでも、21世紀COEからグローバルCOEにかけて、世界のトップ研究者たちに伍して成果を上げていくことの厳しさを身をもって体験できたことは、とても良い経験だったと思っています。こうした経験は、とかく井の中の蛙になりがちないわゆる文系の研究者である私にとっては、経験しないですんでいればそのほうが幸せだったとは思いますが、終わってみると、やはり何物にも代えがたい貴重な経験だったと思います。

これからは初心に戻り、ほんとうに自分で納得のいく成果をまとめあげたいと思っています。

瀬 川 信 久 氏



(法学研究科教授)

昭和22年12月22日生

(略 歴)

昭和46年 6月

東京大学法学部卒業

昭和48年 3月

東京大学大学院法学政治
学研究科修士課程修了

昭和48年 4月

東京大学法学部助手

昭和51年 7月 北海道大学法学部助教授
 昭和60年 7月 北海道大学法学部教授
 昭和61年 6月 法学博士(東京大学)
 平成12年 4月 北海道大学大学院法学研究科教授
 平成16年 4月 北海道大学大学院法学研究科
 平成18年12月 副研究科長
 平成18年 4月 北海道大学評議員・大学院法学
 平成18年12月 研究科副研究科長
 平成18年12月 北海道大学大学院法学研究科長
 平成20年12月

1970年代半ば、赴任当初の早春に経験した北大の自然は鮮烈でした。春の吹雪の吹きだまりと、雪解け水があふれて突然に現れる小川の流れ。牧草地だった第2農場はその水をたたえ、枯れた牧草が立つ水面が、朝日に映える手稲山を逆さに映していました。4月になると、中央道路の簡易舗装の脇にクロッカスが芽を出し、その横を馬術部の馬が駆けてゆく姿は、「馬糞風」という言葉のきれいな風景でした。

やがて頻繁に利用するようになった図書館の蔵書が、先輩の先生方のご努力の上に、70年代半ばの法学部大規模な拡充の効果によってますます充実していくのに驚嘆しつつ、文系学部のほか農学部や工学部の蔵書を利用させていただいて、札幌を出発点として、明治から今日までの日本の都市の土地所有の変遷を研究したのが仕事のひとつとなりました。

10年ほど前から大学をめぐる状況は大きく変化し、個人それぞれの教育と研究のうえに、それらをつなげる工夫が要求されるようになりました。しかし、北大の利点を活かせばこの課題に十分に 대응できると思います。

34年間、快適な環境での教育と研究に従事できたことについて、熱心に講義を聴いてくれた学生の皆さんと、ご支援いただいた先生方・職員の皆様に心より感謝申し上げ、皆様の教育と研究の発展をお祈り申し上げます。

道 幸 哲 也 氏



(法学研究科教授)

昭和22年11月13日生

(略 歴)

昭和45年 3月

北海道大学法学部卒業

昭和47年 3月

北海道大学大学院法学
研究科修士課程修了

昭和47年 4月

北海道大学法学部助手

昭和50年 4月 小樽商科大学商学部講師
 昭和51年10月 小樽商科大学商学部助教授
 昭和58年 4月 北海道大学法学部助教授
 昭和60年 6月 北海道大学法学部教授
 昭和63年 3月 法学博士(北海道大学)
 平成12年 4月 北海道大学大学院法学研究科教授

学部学生、大学院生さらに助手時代で9年間、また教師となって28年間北大にお世話になりました。というより北大での生活でした。学部卒業間際は、疾風怒濤の青春時代であり、ものを考えるには良い機会でした。教師となつてからは、ゆったりと自由な研究ができました。不当労働行為制度を中心とする労組法については、一定の知見を得ることができましたが、未解明の問題も少なくありません。また、40年にわたる研究会での議論により、労使紛争の背景、解決のメカニズム、裁判や法理のあり方を知ることができました。研究会を通じ、多くの研究者を知ることができ、また若い研究者の養成の場でもありました。さらに、演習を通じてその時々20代と接触ができたことも幸せでした。

はやし
林

たつみ

氏 (法学研究科教授)



昭和22年10月1日生

(略歴)

昭和45年3月

北海道大学法学部卒業

昭和48年3月

北海道大学大学院法学

研究科修士課程修了

昭和48年4月

北海道大学法学部助手

昭和52年10月 北海道大学法学部助教授

昭和61年2月 北海道大学法学部教授

平成12年4月 北海道大学大学院法学研究科教授

商法担当の助教授に昇任してから、30数年が経過し、3月で定年を迎える。

初めて出席した教授会は昭和52年10月27日開催の教授会であった。議題は異議なく了承されて、教授会は終了した。しかし、その審議が順調に進行するとは限らないことを知ったのは、以後の教授会においてである。

当時の緊急の課題は、第2次入学試験の教科・科目如何であった。入学試験は、学生編成およびカリキュラムと関連しているから、その変更は大きな問題である。審議にかなりの時間を要したことを記憶している。

法科大学院の開設も、入学試験の変更であるから、法学研究科にとって大きな問題であった。新司法試験の合格実績は良好であるが、北大法科大学院の教育には課題があるかもしれない。その解決を同僚の諸兄に御願ひするほかないのは、はなはだ申し訳ないことであると考えている。

定年を迎えるにあたり、感謝を申し上げたいかたは多いが、とりわけ恩師近藤弘二先生から賜った御指導に対し、感謝の意を表したい。初めて研究室に参上したときの先生の笑顔を、忘れることができない。

あさ
浅

か

まさ

ひろ

氏 (医学研究科教授)



昭和23年1月1日生

(略歴)

昭和47年3月

北海道大学医学部卒業

昭和53年4月

北海道大学医学部附属

病院第三内科助手

昭和56年4月

北海道大学医学部附属

病院第三内科講師

平成6年11月 北海道大学医学部内科学第三講座教授

平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科消化器内科学分野教授

平成17年4月 北海道大学病院副病院長

平成19年4月 北海道大学病院病院長、評議員、副理事

平成22年4月 北海道大学大学院医学研究科消化器内科学分野教授

1年間の市中病院勤め、1年半の米国留学、3ヶ月間のサウジアラビア出張を除くと、北大医学部へ入学してから45年間、その大半を北大のキャンパスで過ごしたことになります。素晴らしい環境の中でこのように長期間過ごせたことは大変に幸せなことで改めて感謝しております。ニワトリの取り扱いがわからなかったときは、私の患者であった農学部の方がその方面に詳しく懇切丁寧に教えていただき、総合大学としての良さを再認識しました。

広いキャンパスと開放的な雰囲気を有する北海道大学はわが国の大学の中では特筆すべきものであると思っております。米国の大学に留学した際、東大などから来ていた方たちは米国の大学構内の広さや誰とでも話すことのできる雰囲気をしきりに感心しておりましたが、私にとっては北大にいるときとあまり変わらない状況でした。

あまりに居心地のよい北海道大学を去りがたいため、この4月よりがん予防内科学講座という寄付講座を立ち上げ、しばらく北海道大学においていただくことになりました。もう少しの間、よろしくお願いいたします。

川口秀明氏(医学研究科教授)



昭和22年6月9日生
(略歴)
昭和48年9月
北海道大学医学部卒業
昭和48年12月
北海道大学医学部附属
病院医員(研修医)

昭和50年11月 } 北海道大学医学部附属病院医員
昭和53年3月 }
昭和58年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程(生理系専攻)修了
昭和58年7月 北海道大学医学部附属病院助手
平成5年10月 北海道大学医学部附属病院講師
平成7年8月 北海道大学医学部臨床検査医学教授
平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科病理学講座病態医科学分野教授

北大医学部を卒業後、大学院生の時にスウェーデンカロリンスカ研究所と米国ミネソタ大学に留学しました。札幌、ストックホルム、ミネアポリスと北方圏で環境は似ていますが、研究スタイルは全く違い、大きな収穫を得て帰国できました。帰国後生化学の大学院を卒業し、循環器へ戻りました。当時、循環器内科では、生理、薬理研究グループがありましたが、新たに生化学研究グループを立ち上げました。その頃、日本の循環器研究では生化学的研究は少なく、学会としても小さなグループでした。米国で学んだ培養細胞の知識がここで大きく役に立ちました。

あれから30年以上経ち、循環器の基礎研究は大きく進歩し、生化学から、分子生物学へと研究手法が変わり、病態の本質に迫ろうとしています。しかし、治療法は、まだ完全ではなく今後の研究の進歩が待たれます。循環器領域に大きな足跡は残せませんでした、流れの中にいて多くの事を経験できて幸せでした。

小池隆夫氏(医学研究科教授)



昭和22年10月4日生
(略歴)
昭和47年3月
北海道大学医学部卒業
昭和47年7月
北海道大学医学部附属
病院医員(研修医)
昭和47年10月
北見赤十字病院内科医師

昭和48年9月 北海道大学医学部附属病院医員(研修医)
昭和49年6月 } 北海道大学医学部附属病院医員
昭和50年8月 }
昭和53年7月 カリフォルニア州立大学医学部(サンフランシスコ校内科学教室にて研究従事)
昭和55年6月 京都大学医学部附属病院医員
昭和56年2月 京都大学医学部助手
昭和56年5月 医学博士(京都大学)
昭和56年10月 順天堂大学医学部助手
昭和57年1月 千葉大学医学部附属病院助手
平成2年1月 千葉大学医学部助手
平成3年4月 千葉大学医学部附属病院講師
平成4年3月 千葉大学医学部講師
平成4年8月 北海道大学医学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

平成4年8月1日付で第二内科の教授に着任いたしました。平成23年3月に定年を迎えます。18年と数カ月の長きにわたりまして、皆さま本当にお世話になりました。就任の年の7月に千歳の飛行場が新しくなり、そのピカピカの飛行場に降り立った時の身の引き締まる思いを、今でもまるで昨日の事のように思い出す事が出来ます。それから今日まで実に様々な事がありました。

「一人で見る夢は夢でしかないが、一緒に見る夢は現実だ」

僕の大好きな言葉ですが、北大、特に医学部の沢山の素晴らしい仲間達のお陰で、この18年間、実に実に楽しい夢を見させていただきました。想像もできなかった多くの研究を成し遂げることができましたし、国内外に沢山の友人を得る事もできました。国際学会や国内学会も開

催させていただきましたし、それらに関する学会で「大きな顔」をする事もできました。北大医学部の諸兄が、僕が教授であった事が幸せであったかどうかは判りませんが、少なくとも僕は皆様と一緒に一時期を過ごせた事に、心からの幸せと誇りを持っております。

「人生は美しい事だけ覚えていればよい」

これも僕の好きなフレーズですが、今はそんな気持ちで一杯です。本当に有難うございました。北海道大学の発展を心から願っております。

こやま
小山



つかさ

司氏（医学研究科教授）

昭和22年4月5日生

（略歴）

昭和48年9月

北海道大学医学部卒業

昭和61年3月

医学博士

（北海道大学）

昭和48年12月

北海道大学医学部附属

病院医員（研修医）

昭和49年10月 市立旭川病院勤務

昭和52年4月 北海道大学医学部附属病院医員

昭和52年12月 北海道大学医学部附属病院助手

昭和56年8月 北海道大学医学部附属病院講師

昭和58年8月 米国シカゴ大学共同研究員（助教授）

昭和60年7月 米国ケースウエスタン・リザーブ大学客員准教

昭和62年1月 北海道大学医学部助教授

平成5年9月 北海道大学医学部教授

平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

平成17年4月 } 北海道大学医学部教務委員会委員長
平成19年3月 }

昭和42年4月、北海道大学医学進学課程に入学して以来、米国・シカゴ大学、ケースウエスタン・リザーブ大学での研究生生活を除いた42年6ヵ月の間、北大キャンパスで真に充実した日々を過ごさせていただきました。この間、精神医学・精神科医療の潮流に大きな変化がありました。力動的な精神医学から生物学的な精神医学へ、伝統的診断から計量的操作的診断へと振子が大きく振れ、研究面では遺伝子解析研究や形態・機能画像研究の進展がありました。医療面でも長期入院中心から地域ケアを基本とした開放化が長足に進みました。今後とも益々の発展が期待される領域といえます。定年後、特任教授になる予定で、厚生労働科学研究（こころの健康科学研究事業）の主任研究者として研究を続けることになります。平成5年に私が精神医学分野を担当して以来、良き恩師や先輩、同僚、また優秀な後輩諸氏に恵まれて、大過なく定年の日を迎えることができたことは喜びに堪えません。ここに関係の皆様にあつくお礼を申し上げます。これからは初心に戻り、ほんとうに自分で納得のいく成果をまとめあげたいと思っています。

とう どう
藤 堂

さとし

氏(医学研究科教授)



昭和22年10月30日生

(略 歴)

昭和41年 3月

福岡県立福岡高等学校
卒業

昭和47年 4月

九州大学医学部卒業,
同第一外科入局

昭和55年 4月 九州大学医学部第一外科助手

昭和59年 1月 ピッツバーグ大学外科客員研究
員

昭和60年 7月 ピッツバーグ大学外科客員講師

昭和63年 7月 ピッツバーグ大学外科客員助教
授

平成 5年 7月 ピッツバーグ大学外科助教授

平成 6年 7月 ピッツバーグ大学外科教授

平成 9年 1月 北海道大学医学部第一外科(現
北海道大学大学院医学研究科
外科学講座 消化器外科・一般
外科学分野) 教授

14年前、移植医療の確立と、医学教育の向上、中でもプロフェッショナルな外科医を育てることを目的として、13年間在籍したアメリカのピッツバーグ大学から北大第一外科に赴任しました。今春職を辞するにあたり、特に皆さんに伝えたいことは、クラーク博士の“Boys (Girls, also) be ambitious”という言葉も若い若きも改めて胸に刻んで欲しいということです。北大というブランドに満足するのではなく、色々な場所で、色々な立場で、色々な経験を積んで欲しいと思います。特に、ノーベル化学賞受賞者である鈴木先生もおっしゃっているように、将来、是非、海外に出て色々な経験を積んで欲しいと思います。「ガラパゴス化」と呼ばれるようになった悲しい今の日本の社会を変えるのは若い人達です。個人の事に拘泥するのではなく、社会に支えられている自分自身を見つめ、それぞれの道で自分自身の能力と努力によって作り上げた何かを、現在のそして未来の社会に還元することを目指して欲しいと思います。その為にも、一世紀前にこの学び舎に学んだ内村鑑三の「勇ましい高尚なる生涯」という言葉がきっと足許を照らす明松になる筈です。

ほん ま

本 間 さ と 氏(医学研究科教授)



昭和22年 7月 9日生

(略 歴)

昭和47年 3月

北海道大学医学部卒業

昭和51年 3月

北海道大学大学院医研
究科博士課程修了

昭和51年 3月

医学博士(北海道大学)

昭和51年 4月 } 北海道大学医学部附属病院医員
昭和53年 3月 }昭和53年 9月 } 西独マックスプランク生物物理
昭和54年10月 } 化学研究所にて研究に従事昭和54年11月 } 北海道大学医学部附属病院医員
昭和56年 3月 }

昭和56年 4月 北海道大学医学部助手

平成元年10月 北海道大学医学部講師

平成 4年 6月 北海道大学医学部助教授

平成12年 4月 北海道大学大学院医学研究科助教授

平成19年 9月 北海道大学大学院医学研究科教授

昭和41年に北海道大学医学進学課程に入学してから、院生、北大病院医員そして教員として、海外留学の1年余りを除き、図らずも人生の大半を北大で過ごして参りました。入学当時は「女子大生亡国論」がまかり通り、女子に高等教育を受けさせるのは税金の無駄と有名大学教授が堂々と述べる時代でした。博士研究員制度などなく、各医局も女性の入局をいやがる中で、後に続く女性医師・研究者に迷惑がかからないよう、とにかく休まず、諦めず仕事を続けて参りました。この間、専門とする生物時計研究領域の急発展を遂げた中で、新たな発見の瞬間を目の当たりにすることが出来たのは研究者冥利に尽き、教育者としても巣立った院生が優れた業績を挙げていくのは大きな喜びでした。

私は再雇用制度を受けるため、例年通り年度末の雑務や来年度の講義計画などに追われ、今のところ定年を意識する余裕がありませんが、これまで健康で好きな研究に打ち込むことができたことに心から感謝いたします。

三 浪 明 男 氏 (医学研究科教授)



昭和22年11月21日生
(略 歴)
昭和47年 3 月
北海道大学医学部卒業
昭和47年 4 月
北海道大学医学部整形
外科入局
昭和52年 4 月
北海道大学医学部附属
癌研究施設病理部門
(3年5ヶ月)

昭和55年 8 月 北海道大学医学部附属病院整形
外科助手
昭和57年 5 月 } 米国メーヨクリニック
昭和58年 6 月 } Orthopaedic Biomechanical
Laboratory Research Fellow
昭和61年12月 北海道大学医学部附属病院講師
平成 2 年 8 月 北海道大学医学部助教授
平成 6 年 8 月 北海道大学保健管理センター整
形外科教授
平成12年 8 月 北海道大学大学院医学研究科
高次診断治療学専攻 機能回復
医学講座 運動器再建医学分野
教授
平成15年 4 月 北海道大学大学院医学研究科
高次診断治療学専攻 機能再生
医学講座 (整形外科学分野へ名
称変更)
平成19年 4 月 北海道大学大学院医学研究科
医学専攻 機能再生医学講座
(整形外科学分野へ名称変更)
平成22年 4 月 北海道大学病院デイスার্ジャ
リーセンター部長
平成22年 4 月 北海道大学病院手術部長

昭和41年 4 月に北海道大学医学部卒業後、北
海道大学整形外科に入局し、以後、整形外科学
とくに上肢外科学を専攻して基礎的、臨床的研
究を行ってまいりました。手関節に発生した外
傷・変性疾患の病態の解明と外科的治療の開
発を主な研究テーマとして国内外の学会および
外国雑誌に発表し、幸いにして標準的手術手
技に取り入れられたものもありますことは私の
喜びです。この間、多くの先生に温かいご指
導を受けました。本当にありがとうございました。

学会としては、日本整形外科学会学術総会を
平成20年に札幌の地で約7,000人が参加して
盛会に開催させていただきました。

北海道大学在職中には、本当に素晴らしい先
輩・同輩・後輩に恵まれ楽しい研究生を送る
ことができました。皆様のご高配により退職
を迎えることができ、本当に感謝申し上げます。
1年間ですが、特任教授として本職に在籍いた
しますので、今後ともご指導・ご鞭撻のほど
よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

北海道大学のますますのご発展を退職後も遠
くから楽しみにいたしております。

井 上 農夫男 氏 (歯学研究科教授)



昭和22年10月14日生
(略 歴)
昭和49年 3月
北海道大学歯学部歯学
科卒業
昭和49年 6月
北海道大学歯学部附属
病院医員

昭和49年10月 北海道大学歯学部附属病院助手
昭和50年 5月 北海道大学歯学部助手
昭和54年12月 北海道大学歯学部附属病院講師
昭和58年 3月 歯学博士(北海道大学)
昭和59年 5月 北海道大学歯学部講師
昭和60年 4月 北海道大学歯学部助教授
平成 5年 3月 北海道大学歯学部附属病院助教授
平成12年11月 北海道大学大学院歯学研究科教授

北大に憧れ、昭和43年に歯学部2期生として入学してから43年間、私の人生の2/3を北大で過ごしました。入学当時の歯科医師不足は深刻で、私は当然の如く卒業後は郷里の田舎町で開業することを目指していました。しかし、指導医の一言で、2年間だけの研修目的で口腔外科学講座に入局しました。ところが卒後間もなく新米教員として教科書を片手に学生指導と日常臨床に携わることになり、その後はさらに炎症の組織修復過程および顎骨の再生・修復などの研究にも取り組むことになりました。日々の全てが新しいことへの挑戦で、最後の挑戦は2000年に新設された高齢者歯科学教室の基礎を教室の仲間と築くことでした。気付いたときには2年を遙かに越えた30余年の歳月が流れていました。師に導かれ、勉強仲間に支えられ、やっと北大を卒業できることを皆様に深く感謝申し上げます。

最後に世界の北大へさらなる発展を願って
“Boys, Be ambitious”

戸 塚 靖 則 氏 (歯学研究科教授)



昭和22年 8月 5日生
(略 歴)
昭和48年 3月
北海道大学歯学部歯学
科卒業
昭和48年 6月
北海道大学歯学部附属
病院医員

昭和49年 3月 千葉県がんセンター嘱託, 千葉県技術吏員
昭和51年 4月 北海道大学歯学部助手
昭和54年 3月 北海道大学歯学部附属病院講師
昭和55年 9月 歯学博士(北海道大学)
昭和56年12月 北海道大学歯学部附属病院助教授
平成 4年 9月 北海道大学歯学部教授
平成 9年 4月 北海道大学歯学部長, 歯学研究
平成11年 3月 科長, 北海道大学評議員
平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科教授
平成15年 4月 北海道大学大学院歯学研究科長,
平成19年 3月 歯学部長, 北海道大学評議員
平成19年 4月 北海道大学病院副病院長
平成22年 3月

昭和42年に北海道大学歯学部の1期生として入学して以来、国内・国外留学の3年を除いた41年間で北海道大学で過ごしてきました。卒業後は口腔外科学を専攻し、口腔がんの手術や顎関節症の診療に明け暮れました。医局長や病棟医長としての仕事が重なり、多忙な毎日でしたが、臨床に加えて、幾つかの研究をまとめることもでき、口腔外科医として充実した日々を送りました。教授に就任したのは、大学や歯学部のあり方が問われ、また歯学部教育が大きく変わる時期に当たり、それらに対応するため、臨床とはある程度の距離を置かざるをえませんでした。学部一貫教育体制への移行を皮切りに、大学院重点化、国立大学法人化、病院統合などに取り組んできました。

歯学研究科・歯学部は所帯が小さなこともあってまとまりがよく、また皆大変おおらかで、理不尽なことや嫌な思いをせずに、教員生活を送ることができました。唯一、悔やまれることは同期の川崎貴生君と一緒に定年を迎えられなかったことです。最後に、私を育ててくれた北海道大学、またお世話になった諸先輩、教職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

定年退職を迎えるにあたって

福島和昭 氏（歯学研究科教授）



昭和22年 7月 6日生
（略 歴）
昭和48年 3月
北海道大学歯学部歯学科卒業
昭和48年 6月
北海道大学歯学部附属病院医員
昭和49年 6月
北海道大学歯学部助手

昭和54年 6月 北海道大学歯学部附属病院講師
昭和57年 6月 北海道大学歯学部講師
昭和58年 3月 歯学博士（北海道大学）
昭和62年 1月 北海道大学歯学部附属病院教授
平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科教授
平成12年 8月 } 北海道大学評議員
平成16年 3月 }
平成17年 4月 } 北海道大学病院副病院長
平成19年 3月 }

1967年（昭和42年）、北大に歯学部が新設されましたが、国会審議の遅れで入学式は6月30日、そして7月3日から8月26日にわたる夏季休暇返上での集中講義が、私の北大生活の始まりでした。

1969年、私は学部1年生、歯学部教授会が発足した年で、学生運動が吹き荒れ、北大でも施設の占拠等々で大学機能が一時麻痺しました。1987年、教授を拝命いたしました。欧米の空港で日本人が威風堂々と入国審査を受けていたバブル絶頂の頃でした。2000年前後から、評議員、副病院長等、幾つかの役職を仰せつかりました。歯学部附属病院診療科体制の再編、大学院重点化、附属病院統合、大学法人化など、‘変革’の波に揺さぶられる日々で非才の身、研究、教育、臨床、運営と相俟ってスタンスの置き所に苦渋しました。バブル崩壊と軌を一にした窒息感ある変遷の中でしたが、多くの有為な若者が歯学部から育ち勇躍、飛び立っていく様に、勇気をもらっていました。

2011年、定年退職を迎えましたが、特任教授で1年間、北大に籍を置かせていただきます。北大の人間として、秋に神戸で開催されるアジア歯科麻酔学会連合学術大会を主宰させていただく予定です。

このように、初めも、真ん中も、そして終わりのどこかクリアーではありませんでしたが、今はただ、愛する北大に、そしてご厚誼、ご指導をいただいた恩師、先輩、関係諸氏に深謝いたします。ありがとうございました。

雨宮好仁 氏（情報科学研究科教授）



昭和23年 3月 5日生
（略 歴）
昭和45年 3月
東京工業大学理工学部
電子工学科卒業
昭和47年 3月
東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了

昭和50年 3月 東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了
昭和50年 3月 工学博士（東京工業大学）
昭和50年 4月 } 日本電信電話公社
昭和62年 6月 }
昭和62年 7月 } NTT LSI研究所
平成 5年 2月 }
平成 5年 3月 北海道大学工学部教授
平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

私は、大学を卒業してのち前半の18年間は日本電信電話公社／NTTの研究所に勤務し、後半の18年間を北海道大学のキャンパスで過ごしました。一つの人生のなかで優れた企業と大学の両方にまたがる生活を経験できたことを幸せに思っています。NTTではシリコン集積回路の製造プロセスと設計の開発研究を行っていました。その過程で次世代の新しい集積回路についていろいろ考えるところがありましたが、北大はそれらの新しい開拓研究を手がける場所と時間を与えてくれました。若い学生たちに囲まれて新しいテーマを模索しながら学生とともに歩いていく日常の中に、企業の研究所とはまた違った楽しさと面白さを感じることができました。大学の教員にとって幸せなことは、歳月を経ても周囲にはいつも学生たちの若さが満ちていること、そして学生たちに与えた教育の成果が彼等の中で自分よりも長く生き続けると考えることでしょう。次世代の北大を担う若い教員の方々にも、学生たちとともに過ごす有意義で楽しい研究・教育の活動を期待しています。

かわ はら こう いち
河 原 剛 一

氏(情報科学研究科教授)

昭和22年7月1日生

(略 歴)

昭和45年3月

東北大学工学部通信工
学科卒業

昭和51年3月

北海道大学大学院工学
研究科電気工学専攻修
士課程修了昭和54年3月 北海道大学大学院工学研究科電
子工学専攻博士後期課程修了

昭和54年3月 工学博士(北海道大学)

昭和54年4月 旭川医科大学医学部助手

昭和58年4月 札幌医科大学講師

昭和60年4月 山形大学工学部助教授

平成2年7月 山形大学工学部教授

平成7年7月 北海道大学電子科学研究所教授

平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究
科教授

大学での教育・研究活動を始めてから30年以上が経過したが、毎日毎日をある意味では夢中になって研究・教育に取り組んできたこともあって、これまで過去を振り返ることはほとんどなかった。気がついてみると大学を取り巻く環境が大きく変化し、その変化は果たして良い方向に向かっているのか疑問な点も数多い。すでに戦後65年もの月日が経過しているが、日本の社会構造がその根幹部分で何も変わっていないことに、皮肉にも金融資本主義の綻びが教えてくれた。法人化した大学の教育・研究システムも、法人化の妥当性も含め、今後数十年の歴史の中で止揚されるであろう。例えば大学における研究は本来、個人の自由な発想に基づいた基盤的な研究であるべきで、その財政的支援は基盤校費と学振の科学研究費補助金、そして民間財団の助成金で十分であると思う。定年を迎えるにあたって、これまで私の研究のアイディアを支え、それを形にしてくれた多くの学生に心から感謝したい。

ほん ま とし ひさ
本 間 利 久

氏(情報科学研究科教授)

昭和22年9月26日生

(略 歴)

昭和45年3月

北海道大学工学部電気
工学科卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院工学
研究科電気工学専攻修
士課程修了昭和50年6月 北海道大学大学院工学研究科電気工
学専攻博士後期課程単位修得退学

昭和50年7月 北海道大学工学部助手

昭和51年9月 北海道大学大学院工学研究科電
気工学専攻博士後期課程修了

昭和51年9月 工学博士(北海道大学)

昭和54年4月 北海道大学工学部講師

昭和55年4月 北海道大学工学部助教授

昭和62年4月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究
科教授平成16年4月 } 北海道大学大学院情報科学研究科長
平成18年3月 }

1975年に加地郁夫先生のご尽力により工学部情報工学専攻の助手として採用していただき、以来工学部電気工学科、大学院情報工学専攻、電気工学専攻等で主に計算機工学、電気回路学、電気磁気学の教育に携わってきました。研究面では、プラズマ理工学、環境電磁工学、計算電磁気学など行ってきました。さらに、2004年に設置された情報科学研究科では、シミュレーション情報学、リモートセンシング、プロジェクトマネジメントを中心に北大の特徴であるフィールド研究と情報学との融合に関する教育研究にも携わることもできました。この間、計算電磁気学・フィールド情報学関連のテーマの国際会議・セミナーなど多数主催し、その成果の一部が、大学間学術交流協定、部局間協定へとつながったのは望外の喜びです。特にソウル大学との大学間シンポジウムは、学科レベルから学部レベルさらに大学レベルへと結実したもので、各学部のさまざまな研究者と大学本部の職員の協力のお陰であります。今後のグローバル化社会のなかで北海道大学の果たす役割はますます大きく、一層の発展を期待いたします。

宮 腰 政 明 氏 (情報科学研究科教授)



昭和23年2月13日生
(略 歴)
昭和45年3月
北海道大学工学部電子
工学科卒業
昭和45年4月～48年10月
民間 (日本アビオトロ
ニクス株式会社)

昭和51年3月 北海道大学大学院工学研究科情
報工学専攻修士課程修了
昭和54年3月 北海道大学大学院工学研究科情
報工学専攻博士後期課程単位修
得退学
昭和54年9月 北海道大学工学部助手
昭和59年8月 北海道大学工学部講師
昭和60年3月 工学博士 (北海道大学)
昭和61年4月 北海道大学工学部助教授
平成7年4月 北海道大学工学部教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究
科教授

約32年前、工学部助手として採用いただき、以来、数理情報工学の領域で数学を中心とした教育に関し、学部では情報工学科、コンピュータサイエンスコース及び大学院の情報工学専攻、コンピュータサイエンス専攻等で携わってきました。一方、研究面では、当時、誕生したばかりのファジィ集合論の研究に携わりました。情報科学研究科では、関数解析とその応用へ重点を移し、関数解析の画像処理や音響工学、学習理論への応用の研究を行いました。数学を手段として情報工学の分野を切り拓く研究は、数学的な証明を積み重ねていく地道な研究ですが発見された定理は未来永劫真であり続けます。それ故に数理情報工学を含む情報科学において数学の重要性は今後も強く認識されていくことと思いますが、学部大学院において数学に係わる教育により多くの配慮がなされることが重要ではないかと思っています。

最後に、ここまで教員生活を送れたことに対して関係各位に深謝するとともに北大の一層の発展を祈念いたします。

目 黒 敏 美 氏



(水産学部附属練習船うしお丸船長)

昭和22年11月5日生
(略 歴)
昭和47年3月
北海道大学水産学部漁
業学科卒業
昭和48年3月
北海道大学水産学部特
設専攻科修了

昭和48年4月 報国水産株式会社入社
昭和49年5月 北海道大学助手 (水産学部)、
附属練習船おしよ丸三等航海
士
昭和58年4月 附属練習船北星丸二等航海士
昭和62年4月 北海道大学講師 (水産学部)、
附属練習船北星丸二等航海士
昭和62年10月 附属練習船北星丸一等航海士
平成3年3月 北海道大学助教授 (水産学部)
平成5年4月 附属練習船北星丸船長
平成11年10月 北海道大学教授 (水産学部)
平成14年4月 附属練習船おしよ丸船長
平成21年4月 附属練習船うしお丸船長

私が北海道大学に入学したのは昭和43年、世は正に学園紛争真っ只中、我が北海道大学も例外ではなく大学閉鎖で、残念ながら札幌キャンパスの思い出は多くありません。

水産学部に移行して、練習船に乗船したことが、その後の私の人生を決定づけてくれました。卒業後昭和49年母校の練習船の航海士 (教官) として採用されました。

練習船での主な任務は、学部学生 of 漁業実習と大型漁船などの船舶職員養成の特設専攻科の教育でありましたが、時代の趨勢により平成14年3月に特設専攻科が廃止と成り、練習船が学内外から求められる教育・調査内容はそれを取り巻く時代背景によって様々に変化しましたが変わらぬものは、航海を終えるごとに確実に逞しく成長していく乗船学生の姿を見る楽しみと、航海や寄港地で様々な人々に巡り合えたことが私の大いなる財産と成っています。

大勢の人々に支えられた練習船での航海は、どれをとっても思い出深いものであり、私に貴重な体験と教訓を与え続けてくれました。

地球環境の温暖化、世界的人口の増加による

食糧確保の問題等取り組むべき課題が増大し続
けています。北海道大学水産学部練習船はこれ
からも水産科学教育や研究の場を提供するに留
まらず、船という洋上を動く実習施設としての
特徴を生かし、将来にわたってこれからの水産
科学・海洋科学の教育・研究を担う多くの人材
を育てていかなければならない使命がありま
す。またそれを担ってくれると期待していま
す。

皆さんに支えられ続けてきた練習船勤務でし
た。学生時代を含め40年間私を培い育てていた
だいた北海道大学に感謝いたします。

あべしゅういち
阿部周一

氏(水産科学研究院教授)

昭和22年11月3日生

(略歴)

昭和46年3月

北海道大学水産学部水
産増殖学科卒業

昭和52年3月

北海道大学大学院理学
研究科動物学専攻博士
後期課程修了

昭和54年7月 北海道大学理学部助手

平成2年10月 北海道大学理学部助教授

平成13年4月 北海道大学先端科学技術共同研
究センター助教授平成15年1月 北海道大学大学院水産科学研究
科教授平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究
院教授

昭和42年4月に石炭の煤煙で黒ずんだ残り雪を
踏んで北大に入学しました。以来、学生、院生、
教員として、約3年間の海外留学を除く40年余り
の長きにわたり水産学部、理学部、そしてまた水
産学部とお世話になった本学を、この度定年によ
り去ることになりました。この間、遺伝の担い手
であるゲノムの教育研究を専門として、とくに水
産生物の資源管理や保全の遺伝学的研究基盤の確
立に向けて貢献できたことは、無上の喜びです。

「都ぞ弥生」は誕生以来100年にわたり連綿と歌
い継がれてきましたが、キャンパス内の風景は時
代の流れのなかでめまぐるしく変わっています。
春先の残り雪もいまは黒くありません。変わらな
いものは、恩師や先輩諸兄姉に受けた薫陶、同僚
諸氏の支持と友情です。いま北大を去るにあた
り、お世話になった多くの方々に深く感謝申し上
げるとともに、本学の科学研究と教育の一層の発
展を祈りつつ、退職の挨拶といたします。

はら

あき

ひこ

氏 (水産科学研究院教授)



昭和22年8月17日生

(略歴)

昭和46年3月

北海道大学水産学部増殖学科卒業

昭和46年4月

的矢湾養蠔研究所研究員

昭和49年9月 北海道大学医学部助手
昭和55年9月 水産学博士 (北海道大学)
昭和59年4月 水産庁養殖研究所研究員
昭和62年5月 北海道大学水産学部助教授
平成7年4月 北海道大学水産学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授
平成18年4月 北海道大学大学院水産科学研究
平成22年3月 院長・大学院水産科学院長・水産学部長

母の兄が北大理学部学生であったことから、母は兄と友人らが宴会で歌う寮歌を覚え、幼い私にも歌って聞かせてくれた。いざ北大を受験するとなったとき津軽海峡は越えないでと言った母を思い出す。まさかあこがれの北大の教員として定年を迎えるとは思ってもみなかった。学生時代前半は70年安保闘争を控え、荒れた学生生活であったが、蜜カラ時代の最期を経験し少々苦い思い出でもあるがそれなりに有意義な時間が過ごせた。函館へ移行後、夢であったスクーバダイビングクラブの創設にも携わり、またおしよる丸での80日間の北洋航海でアメリカへ行くことができた。卒業後、縁あって医学部第一生化学教室にお世話になった。そこで学んだことがその後の研究生生活の柱となった。多くの若い学生諸君と研究を共にし、また魚を採集しに行くなど楽しい研究生生活であった。近年の輝かしい科学の進歩は目を見張るばかりであるが何とか今日まで過ごせたことに感謝の念で一杯である。

お

の

ゆう

こ

氏 (地球環境科学研究院教授)



昭和23年2月2日生

(略歴)

昭和45年3月

東京教育大学理学部地学科卒業

昭和47年3月

東京教育大学大学院理学研究科修士課程修了

昭和50年3月 東京教育大学大学院理学研究科博士課程修了
昭和50年3月 理学博士 (東京教育大学)
昭和50年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和50年5月 筑波大学地球科学系助手
昭和56年6月 筑波大学地球科学系講師
昭和61年7月 北海道大学大学院環境科学研究科助教授
昭和62年2月 北海道大学大学院環境科学研究科教授
平成5年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

全国にさきがけて北大に環境科学の大学院ができたのは、水俣病など公害に苦しんだ人たちの犠牲があったからです。既存の科学だけでは公害の発生を防げなかったことへの反省として環境科学ができたのです。私自身を含め、理学系出身者が多いのですが、どんなにいい研究をしても、それがたんに自然科学であればここは第二理学院になってしまうと考え、本当の意味での環境科学の確立を目指して今日までやってきました。医学に基礎と臨床があるように、自然科学にも基礎と臨床があり、環境科学はいわば「地球の臨床科学」なのです。ほっておけば壊されてしまう自然や、絶滅に追いやられてしまう生物があれば、すぐにとんでいって、まずそうした行為を止める。止めたうえで、どうすれば自然を損なわずに開発や経済活動ができるかを考える。それが環境科学の役割ではないでしょうか。

これからも、環境科学を通じて、北大と社会を結ぶ役割を果たしていきたいと思っています。

ひら かわ かず おみ
平 川 一 臣

氏(地球環境科学研究院教授)

昭和22年5月10日生

(略 歴)

昭和50年3月

東京都立大学大学院理
学研究科博士課程単位
修得退学

昭和54年4月

山梨大学教育学部講師



平成元年4月 東京都立大学助教授

平成5年4月 北海道大学大学院地球環境科学
研究科教授

まったく思ってもみなかった北海道大学に赴任し、以来18年間一度として風邪をひくことさえなく定年退職の日を迎えることができ喜んでいきます。思えば、まずはよき先輩に恵まれ、優れた恩師に、志を同じくする仲間達に、さらに学生達にまで恵まれた研究・教育の日々でした。十勝平野と日高山脈の氷河時代の自然環境から始まった研究が、南極や北極、熱帯雨林泥炭地からアンデスやパミールの乾燥高山にまで広がり、今また北海道の山・川・海岸の自然へ回帰しつつあります。北海道の自然と北海道大学なくしては、今のわたしはあり得ません。本当に有り難いことと感謝と幸せな気持ちでいっぱいです。この想いを胸に、次のステージへ踏み出します(特任の一年で踏み切りが少々鈍りますが)。困難の多い時代ですが、よき北海道大学であり続けることを心から願いつつ、今いちど御礼、感謝申し上げます。

附言：東北・関東巨大津波が発生し、関連する研究に携わってきた学徒として無責任感、無力感、虚無感に苛まれています。合掌

いし かわ けん ぞう
石 川 健 三

氏(理学研究院教授)

昭和23年1月25日生

(略 歴)

昭和46年3月

東京工業大学理工学部
卒業

昭和48年3月

東北大学大学院理学研
究科修士課程修了

昭和48年3月 理学修士(東北大学)

昭和51年3月 東北大学大学院理学研究科博士
課程修了

昭和51年3月 理学博士(東北大学)

昭和51年4月 日本学術振興会奨励研究員

昭和52年4月 東北大学理学部原子核理学研究
施設研究員

昭和52年9月 カリフォルニア大学研究員

昭和53年9月 カリフォルニア大学准助教授兼
研究員昭和55年9月 ドイツ エレクトロン・シンク
ロトロン理論部門研究員昭和57年9月 ニューヨーク市立大学物理学科
研究員

昭和58年9月 北海道大学理学部助手

昭和60年2月 北海道大学理学部助教授

平成1年6月 北海道大学理学部教授

平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

北大の教職に就いてから30年近くの期間、病気をすることもなく研究や教育にとっぷり浸かり、いつの間にか定年退職を迎える年齢になってしまった。大学の教員は、自分の好きなことを仕事として行える職業であり、自分が就けてきたことに、多くの方々に感謝している。この場所で、お礼を表わしたい。

大学の二つの役割である研究と教育には、共通点もあるが違いも大きい。未解明の科学を扱う研究では、専門化が進み、競争がつきものであり神経をすり減らすことも多い。一方、解明された科学、その役割、また幅広い文化を教える教育には、競争は殆ど無関係である。文明の発展の一翼を担いながら若者を育てる大学の使命は、社会にとっては大変重要であり、本人にとってはやりがいのある行いである。北大と北大に関与するすべての学生並びに教職員の皆様が、これからますます発展されることを願ってやまない。



片倉晴雄氏（理学研究院教授）

昭和22年12月21日生

（略歴）

昭和45年3月

北海道大学理学部卒業

昭和48年3月

北海道大学大学院理学

研究科修士課程修了

昭和48年3月

理学修士（北海道大学）

昭和53年4月 日本学術振興会奨励研究員

昭和53年7月 北海道大学理学部助手

昭和55年6月 北海道大学大学院理学研究科博士課程修了

昭和55年6月 理学博士（北海道大学）

昭和57年6月 北海道大学理学部講師

昭和63年5月 北海道大学理学部助教授

平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授

平成9年4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成16年4月 北海道大学大学院理学研究科副研究科長

平成18年4月 北海道大学理学研究院教授

昭和41年に入学してから今年3月まで、45年間北海道大学にお世話になりました。途中一年間大学院浪人の時期を挟みましたが、その時も理学部動物学教室に出入りしていたので、文字通り北大、それも理学部－理学研究科－理学研究院しか知らないまま、定年を迎える事になります。全くの幸運で出身講座に職を得、北海道の素晴らしい自然を満喫しながら生き物相手の研究に従事できたのは本当に幸せであったと思います。その間、恩師、先輩、同僚、友人、その他多くの方々に出会い、助けられてどうにか今に至りました。高校2年の進路指導の際に、勉強は好きじゃないので大学には行きたくない、と言い放って担任の先生を苦笑させた私ですが、そのような私を暖かく迎え入れ、育ててくれた北大に心から感謝しています。

昨今の大学、とりわけ基礎分野を取り巻く環境は厳しいものがありますが、何時までも北大が基礎科学を目指す若者にとって魅力のある大学として輝きつづけることを祈っています。



加藤幾芳氏（理学研究院教授）

昭和22年7月9日生

（略歴）

昭和45年3月

名古屋大学理学部卒業

昭和47年3月

京都大学大学院理学研

究科物理学専攻修士課

程修了

昭和47年3月 理学修士（京都大学）

昭和50年3月 京都大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程単位修得退学

昭和50年10月 北海道大学理学部物理学科助手

昭和53年5月 理学博士（京都大学）

平成3年1月 北海道大学理学部物理学科講師

平成4年11月 北海道大学理学部物理学科助教授

平成12年4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

35年間、大変お世話になりました。この機会に、お礼申し上げます。

大学紛争の真最中を大学で過ごし、今、また歴史的な大学改革の中、大学を去ることにさまざまな思いが去来します。

学問研究は1個人の努力やその成果だけではなく、多くの人の蓄積で成り立つものであることを非常に強く感じます。学問の継承と発展、それがスクールなのだと思いますが、それが実現できない大学になりつつあることが大変残念です。

かわもと
河 本のぼる
昇

氏(理学研究院教授)



昭和23年2月25日生

(略歴)

昭和46年3月

横浜国立大学卒業

昭和48年3月

東京工業大学大学院修

士課程物理学専攻修了

昭和48年3月

理学修士

(東京工業大学)

昭和51年3月 東京工業大学大学院博士課程物
理学専攻修了

昭和51年3月 理学博士(東京工業大学)

昭和51年4月 高エネルギー研究所にて日本学
術振興会奨励研究員昭和52年6月 ドイツ エレクトロン・シンク
ロトロン研究所研究員昭和54年10月 オランダ アムステルダム大学
理論物理研究所研究員昭和56年9月 デンマーク ニールスボーア研
究所研究員昭和58年9月 デンマーク スカンジナビア諸
国連合ノルディタ研究所研究員

昭和59年9月 京都大学理学部助手

平成4年6月 東京大学原子核研究所助教授

平成6年4月 北海道大学理学部教授

平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

自然豊かな環境の中で行った冬の学校での幾多の交流も深く思い出として残っています。自分の下から巣立っていった若手研究者がどの様に落ち着くかは相変わらず気になるところですが、自分の事も含めこれまで通り楽観的に見据えていこうと思っています。

思えば博士課程終了後、私は外国3箇所国内4箇所を移動して北大にたどり着いたことになります。研究中心の生活でしたが、その間必ずしも落ち着いて目標とする研究テーマをじっくり研究できる環境ではなかった様に思います。北大に移ってからは流行からは一步距離をおいてオリジナリティーを大事にする研究テーマをじっくり研究できたことで、古くからある北大の気風を感受する事ができました。そしてその研究は海外の友人との共同研究として進行中で、目標の達成は未だ道半ばですが相変わらず執念を燃やしているのは我々の世代の宿命なのでしょうか。

豊かな北の大地の町の中心に有る恵まれた環境で院生とも腰を落ち着けた議論をしたり、時には羽目をはずして朝まで語り合ったり、また



岸本 晶孝 氏（理学研究院教授）
 昭和22年生
 （略 歴）
 昭和45年
 神戸大学理学部卒業
 昭和52年
 京都大学大学院理学研究科物理学第一専攻博士課程修了
 昭和54年 横浜市立大学文理学部助教授
 昭和58年 東北大学教養部助教授
 平成元年 北海道大学理学部教授
 平成7年 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年 北海道大学大学院理学研究院教授

札幌に来るまで、またその後も、ずいぶん大勢の方に世話になったものだと思う。そのなかには既に鬼籍に入られた方もいる。それを思えば今ここに至り、これまで受けた恩義の幾分かも次の世代に返したかと、自覚乏しく過ごしてきた年月に内心忸怩たる思いに駆られる。

三十年余数学にかかわってきたが、果たして研究というほどのことをしてきたか、また教育というほどのことをと、自問せざるをえない。ただ自分がむかし習ったことを再発見して、今様の数学の装いに仕立て直ただけかもしれない。時流に従えば学問も所詮は個人の能力と人間社会の關係に還元されるようだから、常に自分の非力と人との交わりのつたなさに悩まされてきたわけであるが、札幌という地が幾分かはその防壁をなしていたらしいことを幸せと思っている。



中村 郁 氏（理学研究院教授）
 昭和22年 5月24日生
 （略 歴）
 昭和45年 3月
 東京大学理学部卒業
 昭和47年 3月
 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
 昭和47年 3月
 理学修士（東京大学）
 昭和47年 4月 名古屋大学理学部助手
 昭和50年 3月 理学博士（名古屋大学）
 昭和52年10月 北海道大学理学部講師
 昭和55年 2月 北海道大学理学部助教授
 平成3年 7月 北海道大学理学部教授
 平成7年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

30年余り前の秋、初めて札幌に赴任して来た頃、キャンパスは雨に煙って実に美しく、

こんな素晴らしい環境でこれから仕事ができるのだ、とうれしさに心が震えたことを思い出します。

初めての冬、激しい吹雪の中を歩くのも、氷点下の中、砂のように散って行く雪の粒子を見るのも珍しく、毎日のようにキャンパスの中を遠回りして家に帰ったものでした。

厚手のコート、襟巻きにフード、その上にマスクという重装備姿でしたが。

この30年間、恵まれた環境で学問に向き合えたことに感謝します。

戦争のない平和な時代に生きた幸福を感謝しないではられません。

ともかく自分の力の限り、思い切り数学をやることができました。

長い間ありがとうございました。



藤本正行氏 (理学研究院教授)

昭和23年 1月22日生

(略 歴)

昭和46年 6月

東京大学理学部卒業

昭和48年 3月

東京大学大学院理学系
研究科天文学専攻修士
課程修了

昭和48年 3月 理学修士 (東京大学)
 昭和51年 3月 東京大学大学院理学系研究科天
 文学専攻博士課程修了
 昭和51年 3月 理学博士 (東京大学)
 昭和51年 4月 日本学術振興会奨励研究員
 昭和51年 4月 横浜国立大学教育学部非常勤講師
 昭和52年 4月 新潟大学教育学部講師
 昭和54年 4月 新潟大学教育学部助教授
 平成 8年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
 平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

今年で北大へ転任して15年になり、定年を迎えることになった。といっても、再雇用でもう1年間は、給料がカットされる以外は殆どこれまで通りの職務が続くことになるわけで、これといって特別な感慨があるわけではない。中途半端な状況に戸惑っているというのが正直なところである。

私の赴任は、大学院重点化され院生数が倍増して3年目ということであったが、その後も、法人化、理学院・理学研究院の再編などで、大学の内外の在り様が随分と変わってきた。とりわけ、オーバードクターが増え、若手研究者には厳しいものになっている。教員も、学科・教室事務の廃止とも相俟って講義や研究指導以外の事務負担が増え、学究面では、赴任当初抱いていたものとは大きく違ったものとなった。それでも、多くの方に支えられて職務を全う出来たことに感謝している。



吉田知行氏 (理学研究院教授)

昭和23年 3月生

(略 歴)

昭和46年 3月

北海道大学理学部卒業

昭和48年 3月

北海道大学大学院理学
研究科数学専攻修士課
程修了

昭和48年10月 北海道大学大学院理学研究科数
学専攻博士課程退学
昭和48年10月 北海道大学理学部助手
昭和51年 6月 北海道大学理学部講師
昭和51年12月 理学博士 (北海道大学)
昭和56年 7月 北海道大学理学部助教授
平成 4年 4月 熊本大学理学部教授
平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

私が中学のときに、理学祭の展示を見て北大理学部にあこがれて以来、半世紀がたちました。時の流れの速さに呆然とするばかりです。入学した昭和41年当時は学生運動で、日本中の大学が騒然としていました。今では信じられませんが、北大でもゲバ棒を持った学生同士の殴り合いがあり、石と火炎瓶が飛びかう時代でした。理学部の先生が、理学部本館の玄関に押し寄せた学生たちを必死になだめていたのを思い出します。

数学科で、代数学の都筑俊郎教授、木村浩助教授、岩崎助手の指導を受けたのは私の人生にとって、誠に有意義なことでした。それに見合う研究と教育の成果を上げることができたかはやや心許ないのですが、恵まれた研究環境で自由な研究ができました。研究を支えてくださった多くの関係者には感謝の念にたえません。

まだ1年間の再雇用の期間がありますが、これからは主に外から北海道大学の発展を応援してゆきます。

おう み や かず ひこ
近江谷 和 彦



氏（農学研究院教授）

昭和22年8月23日生

（略 歴）

昭和45年3月

北海道大学農学部卒業

平成元年12月

農学博士

（北海道大学）

昭和45年4月

北海道大学農学部助手

昭和61年5月 北海道大学農学部講師

平成2年4月 北海道大学農学部助教授

平成9年4月 北海道大学大学院農学研究科生
物資源生産学専攻助教授

平成18年4月 北海道大学大学院農学研究科生
物資源生産学部門助教授

平成19年4月 北海道大学大学院農学研究科生
物資源生産学部門准教授

平成21年4月 北海道大学大学院農学研究科生
物資源生産学部門教授

私は、農学部卒業後すぐに助手として勤めたので、学生時代を含めると45年間北大にお世話になったことになります。北大構内は四季によって様々に顔が変わり、その中で教育・研究を続けることができたことは幸せと思います。春のキレンギョウ、コブシ、サクラの花に始まり、ライラックが咲き、エルムが緑となり、そして秋を迎えるとイチヨウの葉が色付きます。退職の日が近づくにつれ北大構内の美しさを強く感じるようになりました。

研究環境という点では農場が構内にあることと大型の室内土壌槽のお陰で、圃場面の凹凸や土壌踏圧の低減などに取り組むことができました。

教員という仕事のお陰で一番得ることができたのは、人との出会いだと思います。この41年間で1200名以上の農業工学科に進学した学生と会うことができました。職場の諸先輩、同僚からも色々助けてもらいました。国内外の学会・国際会議、各種の委員会、調査活動などを通じて多くの方々と会うことができ、その方々のお陰で今の私があるものと思います。

最後に、こうして退職を迎えることができたことに感謝いたします。

こう だ やす のり
幸 田 泰 則



氏（農学研究院教授）

昭和22年11月8日生

（略 歴）

昭和45年3月

北海道大学農学部農業

生物学科卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院農学

研究科修士課程修了

昭和49年5月 北海道大学大学院農学研究科博
士課程中退

昭和49年6月 北海道大学農学部助手

平成元年4月 北海道大学農学部助教授

平成13年4月 北海道大学大学院農学研究科教授

平成15年4月 北海道大学北方生物圏フィール
ド科学センター教授・植物園園
長

平成17年4月 北海道大学大学院農学研究科教授

上野発の夜行列車に乗り、青函連絡船で北海道に渡った時の、「心細さ」と「未知への期待」がないまぜになった気持ちは、今でもたまに夢に出てきます。以来40数年間ずっと北大に甘えて育てて頂きました。ありがとうございます。人の集まるところには行かないのが私のポリシーで、妻は私を奇人だと言いますが、それは褒め言葉だと思っています。

研究では未知の植物ホルモンを追い続け、やっとのことでバレイショ塊茎形成物質とその他2つほどの実体を解明できました。素直でやる気のある学生・院生諸君に恵まれ、プレーヤーとしても最後まで実験を楽しませて頂きました。「やる気」と「余裕」が人を育てるのだと信じています。昨今の研究環境では「余裕」は望むべくもありませんが、後進の方々には逆境にめげず、できるだけ気楽にがんばって頂きたいと思っています。

退職後は畑作り（腕は既に自称プロ級）と、希少植物の人工増殖をたっぷりと楽しむ予定です。



鈴木 正彦 氏 (農学研究院教授)

昭和23年 2月2日生

(略 歴)

昭和45年 3月

東京大学理学部卒業

昭和52年 3月

東京大学大学院理学研究科博士課程修了

昭和52年 3月

理学博士 (東京大学)

昭和57年 1月 } 民間 (三菱化学株式会社)
 平成 6年 3月 }
 平成 6年 4月 } 青森県グリーンバイオセンター
 平成19年 3月 } 所長
 平成19年 4月 北海道大学大学院農学研究院教授

民間研究所から公立研究所、そして大学に移りましたが、北大は明るく自由な気風でのびのびと過ごせました。大学に来る前は長い間、研究所勤務を主としていたため、ややもすると閉鎖的な研究者集団に囲まれており特殊な環境であったと思います。その当時は研究自体は楽しいものの人の出入りが限られていたため個々の研究員の専門分野に偏りが生じやすく、所長時代はいかに融合して活性化するかに気を使っていました。当時も依頼された大学で非常勤で学生を教えたことはありますが、本格的に教育に取り組んだのは北大に来てからです。北大は学生の質も高く若い力に満ち溢れており、将来豊かな学生達と一緒に過ごすことは楽しく教えがいがありました。

また、キャンパスが広々として都会の真ん中にありながら、都市生活の利便性と静かな研究環境を有しており流石に日本でも有数の良い環境を維持しているなど感心しました。短い間でしたが、これからもなにか北大のお役に立てることがありましたら幸いです。



長澤 徹明 氏 (農学研究院教授)

昭和23年 1月27日生

(略 歴)

昭和45年 3月

北海道大学農学部卒業

昭和45年 4月

北海道大学農学部助手

昭和59年 6月

農学博士

(北海道大学)

平成 2年 2月 北海道大学農学部講師
 平成 7年 8月 北海道大学農学部助教授
 平成 8年 4月 北海道大学農学部教授
 平成11年 4月 北海道大学大学院農学研究科教授
 平成18年 4月 北海道大学大学院農学研究院教授
 平成21年 4月 } 北海道大学評議員
 平成23年 3月 }

雪深い大雪山のふもとで生をうけ、思い返すと小・中・高・大と在籍した学校にはすべて「北」の一文字が付いておりました。出張を除けば北海道外で暮らしたことがない「井の中の蛙」ならぬ「荒波に無縁のドサンコ」です。世界で仕事を、と野心を抱いていた青春を想うとき、そして定年を迎えるいま、内村鑑三の言う「後世への遺物」たり得るものがあるか、と自問自省しています。農学部会議室の扁額「心廣體胖」に込められた佐藤昌介先生の矜持、農学部長室に掲げられる南鷹次郎先生の「自彊不息」、いずれも総長職を離れる頃に揮毫されたものですが、日本の「農」が荒波に翻弄されている現状を泉下の大先達はどう見ているのでしょうか。とまれ、北海道大学が「学」の本質を問いかける木鐸でありつづけ、世情に右顧左眄することのない泰然自若とした風格の一層の琢磨を期待します。ここにいたって脳裏に去来する45年のすべてに深く感謝しつつ。

鍋田 憲助 氏（農学研究院教授）



（略 歴）
昭和45年 3 月
北海道大学農学部卒業
昭和50年 3 月
北海道大学大学院農学
研究科農芸化学専攻博
士課程修了
昭和50年 3 月
農学博士（北海道大学）

昭和50年 4 月 香川大学農学部食品学科助手
昭和60年 4 月 帯広畜産大学畜産学部農産化学
科助手
昭和63年 4 月 帯広畜産大学畜産学部農産化学
科助教授
平成 2 年 4 月 帯広畜産大学畜産学部生物資源
化学科助教授
平成 7 年 8 月 帯広畜産大学畜産学部生物資源
化学科教授
平成17年 4 月 北海道大学院農学研究科教授
平成18年 4 月 北海道大学院農学研究院教授

36年前に北大大学院博士課程を修了して以来、二つの地方大学で30年間教員を務め、幸運にも6年前に大学院農学研究科教授として採用頂いた。北大赴任前の主たる研究分野は食品化学、林産製造、生物有機化学と目紛しく変わり、とても一意専心とはいかない研究生活を送ってきた。あまり人のやらない、隙間の分野を探して研究してきたようにも思う。その中の一つ、コケ培養細胞を用いたテルペンの生合成研究は、比較的多くの労力と時間を費やすことのできたテーマで、まとまった成果が得られた。北大に移っての印象は、研究・教育環境、特に設備、スタッフ、情報検索システムあるいは人的交流の充実振りであり、社会の中核研究・教育機関としての北大に寄せる期待の大きさが伺えた。「隙間の研究」などと斜に構えていけないと思った。6年間という短い期間であるが、このように恵まれた研究環境で過ごせたことと併せて、お世話になった方々に感謝申し上げたい。

長谷川 周一 氏（農学研究院教授）



昭和23年 1 月13日生
（略 歴）
昭和46年 3 月
東京農工大学農学部卒業
昭和48年 3 月
北海道大学大学院農学
研究科修士課程修了
昭和52年 5 月
国際稲研究所研究員

昭和53年 6 月 北海道大学大学院農学研究科博
士課程修了
昭和54年 4 月 } 農林水産省農業土木試験場
平成元年 3 月 }
平成元年 4 月 } 農林水産省農業環境技術研究所
平成13年 3 月 }
平成13年 4 月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4 月 北海道大学北方生物圏フィール
ド科学センター教授
昭和21年 4 月 北海道大学大学院農学研究院教授
平成22年 4 月 } 北海道大学北方生物圏フィール
平成23年 3 月 } ド科学センター長、評議員

研究者としての最後の10年間を北大で過ごしました。私の専門は土壌物理学で、大学生のときは作物生産のための土を対象としていましたが、教員として北大に来てからは、環境問題としての土が主体でした。時代の移り変わりを感じますが、一方では、研究者として過ごした約30年間、我が国の農業が常に斜陽産業であったことが農学を目指した者としては残念でした。人間が農業開始して長い年月が過ぎ、そして環境問題が注目を浴びるようになった今でも、畑や水田土中の水やガス、溶質の移動速度を計測する、移動量を予測することは非常に困難なことの多いのが現状です。土壌が均質でないがゆえのことですが、一方では、多様な動植物が生息する場の裏返しでもあります。学生諸君と一緒に、畑、湿原、林において自然を測る工夫を続けてきました。



鈴 木 敏 正 氏 (教育学研究院教授)

昭和22年10月27日生

(略 歴)

昭和45年3月

京都大学農学部卒業

昭和47年3月

京都大学大学院農学研究科修士課程修了

昭和50年3月

京都大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学

昭和50年7月 島根大学農学部助手
 昭和53年3月 農学博士(京都大学)
 昭和54年8月 島根大学農学部助教授
 昭和56年7月 北海道大学教育学部助教授
 平成5年3月 博士(教育学)(北海道大学)
 平成6年3月 } 英国アルスター大学客員教授
 平成6年12月 }
 平成8年4月 北海道大学教育学部教授
 平成12年4月 北海道大学大学院教育学研究科教授
 平成14年4月 } 北海道大学評議員
 平成16年3月 }
 平成16年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
 平成17年4月 }
 平成16年4月 } 北海道大学大学院教育学研究科
 平成17年4月 } 副研究科長
 平成17年5月 } 北海道大学大学院教育学研究科長,
 平成19年3月 } 教育学部長
 平成19年4月 } 北海道大学大学院教育学研究院長,
 平成19年4月 } 大学院教育学院長, 教育学部長

ました。研究領域も教育学全体にひろがって、最近では現代教育計画論や環境教育論に取り組み、さらに、教育学を核とする社会科学のあり方まで考えるようになってきました。よほど北大が居心地よかったのですね。みなさまにあらためて御礼申し上げます。

北大にはあしかけ30年も在籍させていただき、ました。教育学部で農業・農民・農村教育を担当するということで赴任したのですが、もともと農林経済学を専攻していましたので、「5年いるべし10年いるべからず」の心構えでした。しかし、所属した社会教育学の研究と実践が面白くなったのか、10年はあっという間に経ち、北大で博士(教育学)の学位をいただくことになりました。その後は、地域住民の自己教育活動とそれを援助・組織化する社会教育実践の理論的・実証的研究をするということで北海道・全国をかけまわり、ヨーロッパの周辺・北アイルランドの調査研究をきっかけにして、日英韓の比較研究をするというところまでできてしまい

定年退職を迎えるにあたって

にし まさ き 西 昌 樹 氏

(メディア・コミュニケーション研究院教授)

昭和22年9月6日生

(略 歴)

昭和52年3月 京都大学大学院文学研究科フランス文学専攻 博士課程単位修得退学

昭和52年4月 北海道大学文学部講師

昭和57年4月 北海道大学言語文化部講師

昭和58年3月 北海道大学言語文化部助教授

平成11年5月 北海道大学言語文化部教授

平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

東京より北に行ったことのない身で、北海道大学に来たのはもういく昔前になりますか。その頃は、先生方の多くが冬にはゴム長靴を履いていたはずです。今と比べると牧歌的な時代でした。フランス語を教え、その他に何か学生を刺激する授業を考えて、その当時の同僚と教養部で北大初めての映画の授業を始めました。それ以来今年まで、フランス語と共にずっと映像関係の授業を続けています。また留学生には日本映画の授業を毎年行ない、ここ2年はそれに加えて日本の現代文学の授業も試みました。また大学院ができた後、映像文化論の授業も担当してきました。以上の教育活動により自分の研究も進んだと思います。北大で停年を迎えるにあたって、とりたてて別れの言葉はありません。老兵は消えてゆくのみです。

まつ の かず ひこ 松 野 一 彦 氏 (保健科学研究院教授)

昭和22年6月23日生

(略 歴)

昭和47年3月

北海道大学医学部医学科卒業

昭和57年3月

医学博士(昭和大学)

昭和47年4月

北海道大学医学部附属病院第3内科研修医

昭和49年4月 聖路加国際病院内科医員

昭和51年4月 昭和大学藤が丘病院血液内科助手

昭和57年4月 昭和大学藤が丘病院血液内科講師

昭和58年4月 北海道大学医学部附属病院検査部講師

平成3年11月 北海道大学医学部臨床検査医学助教授

平成8年4月 北海道大学医療技術短期大学部教授

平成15年10月 北海道大学医学部保健学科教授

平成19年4月 北海道大学病院検査・輸血部長(兼任)

平成20年4月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

平成13年4月 北海道大学医療技術短期大学部
平成15年9月 長, 評議員

平成15年10月 北海道大学医学部保健学科長,
平成19年3月 評議員

昭和47年、大学闘争のまっただ中、北大医学部を卒業し、その流れの中で北大病院第3内科にて自主研修の形で内科医としてのスタートを切りました。学生時代の「世の中を良くする」から「白血病を治す(治癒させる)」に目標を換えてがんばりましたが、患者さん全体を診られる医師にならなければ治すことはできないことを悟り、東京築地の聖路加国際病院のレジデントとして2年間病院に住み込んで内科全般を学びました。日野原重明先生も師の一人です。その後、昭和大学藤が丘病院血液内科に移って、白血病の治療を中心とした血液疾患の診療をしながら、血小板の止血に関わる働きについて研究を行いました。その関係で臨床検査の重要性を学びましたが、昭和58年に北大病院検査部からの教員の募集に応募し、講師として北大

に帰りました。それから28年間、臨床検査の世界に身をおき、医学部学生のみならず歯学部、薬学部、全学教育などでも臨床検査の重要性を伝えてきました。平成8年からは医療技術短期大学部に移り、臨床検査技師、看護師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士をめざす学生さんに内科学、臨床検査学の重要性、面白さを教育してきたつもりです。その間に保健学科が設置され、上記医療職教育の4年制化が実現しました。これからの医療の高度化に対応した教育の一里塚が築けたものと考えております。保健学科設置への全学のご支援に御礼申し上げます。

医師になって39年、現在は白血病も病型によりかなり治癒することができるようになりました。これにも臨床検査の貢献は大きいものと考えております。最後になりますが、北海道大学の益々の発展を祈っています。

田 中 啓 司 氏 (工学研究院教授)



昭和22年12月11日生

(略 歴)

昭和45年 3月

北海道大学工学部応用
物理学科卒業

昭和47年 3月

北海道大学大学院工学
研究科応用物理学専攻
修士課程修了

昭和47年 4月 民間 (株式会社キヤノン中央研
昭和49年 3月 究所)

昭和49年 4月 北海道大学工学部助手

昭和55年 4月 北海道大学工学部講師

昭和55年 6月 工学博士 (北海道大学)

昭和61年 4月 北海道大学工学部助教授

平成 3年 8月 北海道大学工学部教授

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

北大入学以来、2年間のサラリーマン生活を除き、40年以上も北大にお世話になりました。初代(?)団塊世代として生まれ、受験戦争をパスして北大に入学した後、学生紛争を経験し...と、当たり前のことですが、いろいろありました。教官(員)になってからは自分なりに、後輩の教育とアモルファス物質の研究を一所懸命やっていたつもりですが、さてさてどれだけのことができたのやら。ただ、先生と呼ばれる身になって良かったと思えることは、少なくとも二つあります。一つは、卒業生が活躍しているという風聞に接するとき、もう一つは、研究を通じて、知友を国内外に持てたことです。

ところで、昨今の最大の懸案事項は環境問題でしょう。豊かな生活の代償であるゴミや廃棄エネルギーが地球規模になり、それらをうまく制御しなければ、人間を含めた地球上での生命の存在が脅かされそうです。前途遼遠の大問題でしょうが、学際的協力に基づく対策が急務と思います。Be Ambitious!

井 口

まなぶ

氏 (工学研究院教授)



昭和22年11月9日生

(略 歴)

昭和46年3月

徳島大学工学部機械工
学科卒業

昭和48年3月

大阪大学大学院工学研
究科機械工学専攻修士
課程修了

昭和48年4月 阿南工業高等専門学校機械工学
科助手

昭和49年6月 大阪大学工学部助手

昭和56年11月 工学博士 (大阪大学)

平成3年7月 大阪大学工学部助教授

平成8年10月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

平成8年の9月末から10月にかけて北大で開催された鉄鋼協会・金属学会の全国大会へ参加すべく大阪大学を出張で出、帰ることなく10月1日付で北大の職員となり、既に14年半が過ぎ去りました。当初は気候の急激な変化に身体がついてゆけず、雪道で滑って坐骨神経痛になり、また、異なった文化に接したことによる戸惑いもありましたが、その後は充実した日々を過ごさせていただきました。この場をお借りして厚くお礼申しあげます。この間、材料プロセスの移動現象の解明と新しいセンサーの開発等にいそしんでまいりましたが、夢である1600℃の溶鋼の乱れ成分も測定可能な流速センサーの開発に関しては、北大在職中での実現は夢のまま終わってしまいました。ただ、北海道独自の技術をできるだけ多く発信したいというもう一つの夢は、高速融雪装置、排水浄化装置や降雪時の視界改善装置の実用化といった形で実現されつつあります。今になって、新しい技術の実用化は膨大な基礎的研究の蓄積の上に成り立つという先人の教えを痛感しているところです。末筆ですが、北大の益々の発展をお祈りしています。

ふじ

かわ

しげ

お

氏 (工学研究院教授)



昭和23年1月26日生

(略 歴)

昭和51年3月

京都大学大学院工学研
究科機械工学専攻博士
課程単位修得退学

昭和51年4月

日本学術振興会奨励研
究員

昭和52年4月 京都大学工学部助手

昭和55年3月 工学博士 (京都大学)

平成元年10月 東北大学流体科学研究所助教授

平成8年4月 富山県立大学工学部教授

平成11年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

(この間、昭和57年10月から1年間、昭和62年7月から3ヶ月間、平成21年6月から3ヶ月間、ドイツ連邦共和国フンボルト研究員としてアーヘン工科大学、ミュンヘン工科大学で研究に従事)

34年前、恩師のお勧めにより思いがけなく京都大学工学部機械工学科の助手に採用していただき、以来、流体力学の教育と研究に携わってきた。博士学位を取得してからは、一世紀以上にわたり未解明のままであった気液界面での質量・運動量・エネルギーの輸送過程を原子・分子レベルで解明してみたいと考え、衝撃波を利用した独自の研究方法を開発、分子気体力学に基づく理論を武器として研究を進めてきた。

以来、30年が経過し、北海道大学で定年を迎える年に、これまでの成果を“Vapor-Liquid Interfaces, Bubbles and Droplets; Fundamentals and Applications”と題する専門書としてまとめてドイツのシュプリンガー社から出版することができた。この分野では文字どおり最先端の研究成果を世界に問うことができたと自負している。定年後も一人で研究を続け、この本の応用編を書きたいと考えている。

すぎ やま けん いち ろう
杉 山 憲一郎

氏(工学研究院教授)

昭和22年5月4日生

(略 歴)

昭和45年3月

山梨大学工学部機械工
学科卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院工学
研究科機械工学専攻修
士課程修了

昭和47年4月 北海道大学工学部助手
昭和59年6月 工学博士(北海道大学)
平成2年4月 北海道大学工学部助教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助
教授
平成13年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

石油時代が開幕し、北海道の空知炭田で育った私は、父親の従事する石炭産業の急激な衰退を感じ取り、旭川工業高等専門学校に入学した。卒業後、最短年数で卒業できる大学に編入学し、先生と学生の関係、実習を含む実学教育では高専が優れていることを知った。また、大都会から来た編入生仲間から大学院へ行く時代だと教えられた。経済的理由で北海道大学大学院工学研究科を選択し、終生の研究テーマとなるNa冷却高速増殖炉の研究と出会った。

この研究テーマを通して、マスコミに惑わされることなく、21世紀のグローバル社会に貢献する原子力研究の大切さを多くの学生が学んでくれたと思う。また、学生との徹夜実験を通して世界に貢献する研究成果も残せた。アメリカ、イギリス、ドイツは脱落したが、ロシア、インド、中国は国情を反映しNa冷却高速増殖実証炉の建設・操業を20年代の目標にしている。フランスも同じ道を歩んでいる。世界に目を向けて北海道大学でもこの分野の研究が続くことを期待したい。

か が や せい いち
加賀屋 誠 一 氏

(工学研究院教授)

昭和22年5月25日生

(略 歴)

昭和45年3月

北海道大学工学部土木
工学科卒業

昭和45年4月

北海道開発局総理府技官

昭和50年4月

北海道大学工学部助手



昭和52年4月 北海道大学大学院環境科学研究
科助手
昭和58年3月 学術博士(北海道大学)
昭和59年9月 北海道大学大学院環境科学研究
科助教授
平成5年4月 北海道大学大学院地球環境科学
研究科助教授
平成7年4月 北海道大学工学部助教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院公共政策学連
携研究部教授
平成19年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

昭和50年、それまで勤務していた国の役所から、ふとしたきっかけで工学部助手として小川博三先生の下に学究の道に入りました。主として携わったのは地域計画、交通計画といった当時は土木工学の中でも比較的新しい学問領域でした。当時の学会での議論も比較的若い研究者のものが多く、その中でその領域を築いた先輩の先生がそれに答えるという形式が多かったように思います。

工学部に在籍して間もなく、新しい大学院大学である環境科学研究科へ移りました。そこでは、組織としては、学際的な分野でのフラッグシップをめざすという高い目標があったように思いますが、個人的には今までの要素重点からシステムベースの考え方に針路を変えた時でもありました。それ以来、主として、社会基盤にかかわる大規模で複雑なシステムを構築し、社会にとって望ましい意思決定の方法、すなわち社会政策工学の確立に微力を注いできました。

そのことを通して、社会における工学としての寄与は、非常に大きなものがあると改めて感じるとともに、他の分野の知見も積極的に取り

入れ、かつそれらの異分野の方々とも協力関係を持ちながら相乗的な成果を得る努力もすべきであると感じました。工学にとって複雑で、多様な視座を要求される今日、これからご活躍される皆様には、益々希望がある学究環境を創っていかれることを祈念しております。

かど
角

ゆき
幸

ひろ
博

氏（工学研究院教授）

昭和22年10月2日生

（略歴）

昭和45年3月

北海道大学工学部建築
工学科卒業

昭和45年10月

北海道大学工学部助手

平成7年9月

博士（工学）

（北海道大学）

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助
教授

平成14年5月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

昭和45年10月に助手として採用していただき、以来フィールドワークを中心に、北海道の近代建築史研究を続けさせていただいた。研究テーマは、建築家田上義也とマックス・ヒンデルを中心に、北海道近代の建築家・建設業者に関する研究で、およそ工学部では特異な分野であったと思われる。が、幸いにも建築学の分野では、建築史学は長い歴史を有する学問領域であり、北海道を基盤にサハリンまで研究領域を広げることができたのも本学に在職していたからこそである。この研究テーマを中心に、北海道の歴史的建造物の保存活用、空知の産炭遺産などの歴史的資産を生かしたまちづくり、南サハリンの樺太時代の建造物の現況と今後の活用方針など、広く活動を展開することができた。

北海道大学も多くの歴史的資産を有している。これらの資産を有効に活用することもサステイナブルキャンパスを実現していくために必要なことと思われる。今後もこれらの資産を維持管理しつつ、豊かな大学環境を形成し、全人教育にふさわしい場となることを願うものである。



太田 幸雄 氏 (工学研究院教授)

昭和22年 7月 6日生

(略 歴)

昭和45年 3月

東北大学理学部天文及
び地球物理学科第二卒業

昭和47年 3月

東北大学大学院理学研
究科地球物理学専攻修
士課程修了

昭和49年 8月 東北大学大学院理学研究科地球
物理学専攻博士課程退学

昭和49年 8月 東北大学理学部文部技官

昭和50年 4月 国立公衆衛生院厚生技官

昭和51年 6月 理学博士 (東北大学)

昭和52年 8月 北海道大学工学部助手

昭和59年 4月 北海道大学工学部助教授

平成 6年 4月 北海道大学工学部教授

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

昭和52年以来約33年にわたって工学部衛生工学科(現 衛生環境工学コース)において大気保全工学と環境気象学の教育・研究に携わってきました。研究面では、まず北極圏の大気汚染問題に取り組み、米国アラスカ州およびロシア・シベリア地域において大気汚染調査を実施しました。特にシベリアのエニセイ川河口の鉱業都市ノリリスク市においては高濃度の亜硫酸ガスによる深刻な酸性雨被害を目の当たりにし、排ガス処理対策の必要性を実感しました。その後、大気エアロゾル(大気浮遊微粒子)の気候影響(エアロゾルは二酸化炭素などによる地球温暖化を抑制します)を明らかにするためには、エアロゾルの化学成分と散乱・吸収特性の広域分布を明らかにすることが重要であるとの観点から、沖縄、奄美大島や五島列島福江島における観測や観測船による太平洋海域での観測等を実施して来ました。

学生諸君と共に観測に駆け回り、実験や解析に明け暮れた30年でしたが、充実した日々を過ごさせてもらいました。四季の美しい北大の教育・研究のさらなる進展をお祈りしております。



米田 哲朗 氏 (工学研究院教授)

昭和22年10月 5日生

(略 歴)

昭和45年 3月

北海道大学工学部鉱山
工学科卒業

昭和46年 3月

北海道大学大学院工学
研究科修士課程中退

昭和46年 4月 北海道大学工学部助手

平成 6年 7月 博士(工学)(九州大学)

平成 9年 4月 北海道大学大学院工学研究科助手

平成10年 7月 北海道大学大学院工学研究科助
教授

平成13年 4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成22年 4月 北海道大学大学院工学研究院教授

昭和46年に鉱山工学科応用地質学講座助手に採用されて以来、鉱山工学科・資源開発工学科・資源循環システムコースおよび工学研究科等において資源工学と応用地質学の教育に携わってきました。研究面では、中本 明先生をはじめとする諸先生のご指導を受けた学生時代の鉱床学を出発点として、近年の環境地質学に至るまでの応用地質学の幅広い問題に接してきました。当初から現在まで興味を持ち続けてきた鉱床の生成環境と鉱物特性などの基礎的な問題について存分に取り組むことができたと思っています。また、鉱床研究で身に着いた研究スタイルを持ち続け、地すべり・斜面崩落、岩石風化、地質材料評価、地質汚染など様々な課題と向き合ってきたように思います。これからの天然資源の持続的確保や地圏環境の評価・管理など、この分野の新しい課題に対して、北大の実績を生かした貢献が大いに期待されるところです。深く感謝しますと共に、一層のご発展を祈念いたします。

定年退職を迎えるにあたって

うえ だ てつ お 氏 (電子科学研究所教授)



昭和22年 8月20日生
(略 歴)
昭和45年 3月
大阪大学理学部卒業
昭和47年 3月
大阪大学大学院理学
研究科高分子学専攻修士
課程修了

昭和50年 3月 北海道大学大学院薬学研究科製
薬化学専攻博士課程修了
昭和50年 3月 薬学博士 (北海道大学)
昭和50年 4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和52年 8月 フンボルト財団奨学研究員
昭和53年 4月 北海道大学薬学部文部技官
昭和53年11月 北海道大学薬学部助手
平成元年 9月 北海道大学薬学部助教授
平成 4年 4月 名古屋大学大学院人間情報学研
究科教授
平成10年 2月 北海道大学電子科学研究所教授

ねんきん生活、はや35年。初来札はM1で、
冬季オリンピックの前年。宮部会館での宿泊以
来、40年。荷電膜輸送の物理化学的研究から、
神経興奮、化学受容、走化性の生物学研究へ転
身し、学位取得。人のまねごととはだめだ、故小
畠教授の教を心に刻み、細胞が情報を受容し、
情報を判断し、適切に行動する仕組みを研
究テーマに。

無職の自由を武器に、ボン大学で形態学、イ
ンペリアルカレッジで微生物学の基礎固め。爾
来、細胞インテリジェンスの創発を非平衡開放
系の自己組織化の視点から探求。ねんきん教授
と実験語で対話の日々。

大学は教育と研究の場。公宿での人間学の学
習。教育実践を胸に秘め名古屋大学へ。研究三
昧に惚れ、電子研に。この間、若い情熱の伸び
る場作りに苦心に腐心。研究者、大学教授、住
職、国会議員も出現。グループからのイグノー
ベル賞で、ねんきんが、普通名詞化。常に全力
の探求生活は、皆皆様のおかげ。感謝に感謝。

たか だ けん ぞう 氏 (遺伝子病制御研究所教授)



昭和22年 7月28日生
(略 歴)
昭和47年 3月
北海道大学医学部卒業
昭和55年 3月
北海道大学大学院医学
研究科博士課程修了
昭和55年 3月
医学博士 (北海道大学)

昭和55年 4月 北海道大学医学部助手
昭和59年 4月 日本大学医学部講師
平成 3年 6月 山口大学医学部教授
平成 7年10月 北海道大学大学院医学研究科教授
平成12年 4月 組織替えにより北海道大学遺伝
子病制御研究所教授
平成14年 4月 } 北海道大遺伝子病制御研究所長,
平成18年 3月 } 評議員
平成15年 1月 } 株式会社イーベック取締役
平成16年 6月 }
平成16年 7月 ~ 現在 株式会社イーベック代表取締役

昭和41年の入学以来、ドイツ留学、日大、山
口大勤務を除いて、実に31年間北大にお世話に
なりました。4年間の臨床研修の後、ヒト癌ウ
イルスの一つであるEBウイルスの研究に専念
してきましたが、8年前に抗体医薬開発を目的
にベンチャーを立ち上げました。資金繰りに苦
劳しましたが、幸いに欧米メガファーマとの大
型契約に成功し、今やサイエンスよりはバイオ
ベンチャーの数少ない成功者ということでは有
名になってしまいました。大学もいつの頃からか
トランスレーショナルリサーチ重視に変わって
きましたが、私はもっと基礎研究を大事にすべ
きであると思っています。文科省からの運営費
交付金削減など経営上厳しい状況にあることは
理解できますが、大学本来の知の創造の役割を
忘れずに進んでいってもらいたいと願ってい
ます。

もり うち てつ や
守 内 哲 也

氏(遺伝子病制御研究所教授)

昭和22年12月11日生

(略 歴)

昭和48年 3月

北海道大学医学部卒業

昭和54年 3月

北海道大学大学院医学

研究科博士課程修了

昭和54年 3月

医学博士(北海道大学)

昭和56年10月 アメリカ・ミシガン州立大学研究員

昭和59年 1月 東海大学医学部細胞生物学教室講師

平成 1年 1月 東海大学医学部細胞生物学教室助教授

平成 7年 9月 北海道大学医学部癌研究施設細胞制御部門教授

平成12年 4月 北海道大学遺伝子病制御研究所癌関連遺伝子分野教授

平成16年 3月 小樽商科大学大学院商学研究科修士課程修了

平成16年 3月 商学修士(小樽商科大学)

平成元年に東海大学医学部細胞生物学教室の所属長になって以来、23年にわたって教室を運営する仕事をしてきました。今年から1年間特任教授として再任用される制度ができましたが私はそれを辞退して退職します。平成7年9月に北大医学部教授として赴任してからの15年半は楽しい時間でした。北大構内の春と秋の風景は特にすばらしく、ここで定年まで健康に過ごせたことに感謝しています。在任中は、研究の他にたくさんの国々を旅行し、(株)ジェネティックラボ、(株)メディカルイネーテラボ、(株)イーバックを含む研究成果活用企業6社の共同設立も行いました。

4月からは臨床にもどって医療に貢献したいと考えています。終わりは新しい始まりです。

あま の てつ や
天 野 哲 也

氏(総合博物館教授)

昭和22年 9月13日生

(略 歴)

昭和46年 3月

同志社大学文学部卒業

昭和48年 3月

北海道大学大学院文学

研究科修士課程修了

昭和53年10月

北海道大学大学院文学

研究科博士課程修了

昭和53年11月 北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手

平成 7年 4月 北海道大学文学部助手

平成11年 4月 北海道大学総合博物館助教授

平成19年 4月 北海道大学総合博物館／理学院教授

平成21年 4月 北海道大学総合博物館研究部長

平成22年 3月 文学博士(北海道大学)

40年にわたって、勉学の機会・研究と教育の条件を与えてくれた北海道大学に対する感謝の気持ちは言い表すことが出来ないくらいに深い。

その北大で、勉学・研究の環境が悪化してきていることは残念でならない。朝夕、通勤でキャンパスを歩いている時などにそれが思い出されると心が痛む。

北大から受けた恩に少しでも報いるために提言したい。

- 1 「北大人」は、知的生産・人間的労働にとってなにより重要な条件である「ゆとり」が消失してきていることにもっと危機感をもつべきだと考える。
- 2 総長・理事など執行部は、手分けして現場に出向いて実情を観察し、現場の声を聞く。
- 3 このデータを基にして、総長・理事など執行部は、北大の問題点を改善して行くための明確なビジョンを打ち出し、心から「北大人」に改善運動への参加を呼びかける。



松 枝 大 治 氏（総合博物館教授）

昭和22年 5 月 6 日生

（略 歴）

昭和45年 3 月

九州大学理学部地質学
科卒業

昭和47年 3 月

九州大学大学院理学研
究科地質学専攻修士課
程修了

昭和50年 3 月 九州大学大学院理学研究科地質
学専攻博士課程単位取得退学

昭和50年 4 月 } 日本学術振興会奨励研究員
昭和51年 3 月 }

昭和51年 4 月 秋田大学鉱山学部助手

昭和53年 4 月 理学博士（九州大学）

昭和55年 4 月 秋田大学鉱山学部講師

昭和56年 7 月 } 第23次日本南極地域観測隊夏隊員
昭和57年 4 月 }

昭和59年 4 月 秋田大学鉱山学部助教授

昭和59年 4 月 秋田大学鉱山学部附属鉱業博物
館主事（併任）

昭和60年10月 } 米国モンタナ州モンタナ鉱物理
昭和61年 9 月 } 工科大学交換教授

昭和63年 4 月 北海道大学理学部助教授

平成 4 年 2 月 } 文部省学術審議会専門委員（科
平成 6 年 1 月 } 学研究費分科会）

平成 4 年 4 月 } 日本学術会議鉱物学研究連絡委
平成12年 3 月 } 員会（第15－17期）委員・委員
長

平成 7 年 4 月 北海道大学大学院理学研究科助
教授

平成11年 4 月 北海道大学総合博物館教授（理
学部・理学院兼任）

平成22年 4 月 北海道大学総合博物館館長

の着いた教育研究が次第に疎かになりつつある
ことも危惧しています。個人的には、大学の使
命・役割として大学における先端的かつ高度な
研究もさることながら、次世代を担う人的資源
となる学生の教育を重視する必要があると考
えています。この間、大学における学問の継承性
と「モノ」を基礎とした実証的な教育研究が如何
に重要かつ大切なことであるかということを痛
感して来ました。総合博物館館長就任時の挨拶
として、博物館ニュース第21号に「温故知新」
と「不易流行」の諺に例えて博物館の持つ重要な
使命・役割について言及しましたが、これは博
物館だけに留まる話ではなく、大学全般に共通
する事柄ではないかと考えています。

末筆ながらこの間のご厚情にお礼申し上げる
と共に、今後とも裾野を広げた教育研究が積極
的に展開され、北大がさらに発展してゆくこと
を心より祈念しています。

これまで、九大、秋田大、北大と夫々異なる
学風や教育研究スタイルを経験して来ました。
長い歴史を持つ北大は、全国的に見ても実学
（実証）的教育研究が通底する精神として今な
お受継がれている数少ない大学です。しかし、
最近の学生は知識や種々の技術には長けている
ものの、無批判で受動的な傾向が強く、結果と
して自立心や独創性に欠ける若者が増えつつあ
ることが気になります。一方、最近の日本の大
学では成果主義や効率主義が横行し、地に足

ことう あきら
後 藤 晃 氏

(北方生物圏フィールド科学センター教授)



昭和22年8月24日生

(略 歴)

昭和45年3月

北海道大学水産学部水産増殖学科卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了

昭和52年6月 北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了

昭和52年6月 水産学博士(北海道大学)

昭和52年7月 北海道大学水産学部助手

昭和61年4月 北海道大学水産学部助教授

平成15年7月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター助教授

平成18年11月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

平成21年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター副センター長、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション長

大学院修了後の30年余の間、北大に在職し、教育・研究の仕事を私なりに全うすることが出来ましたことに対して、まず大学の仲間や関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

私は、この大学院での研究期間を併せておよそ40年間にわたって、北海道を中心とした北日本、および東ユーラシアとアラスカにおける川と湖に生息する淡水魚類の分子系統、生物地理、生態、行動などの調査・研究を一貫して行い、その起源と進化、種分化機構、生物多様性の創出機構、また希少魚の保全施策に関する知見を積み上げることが出来ました。このことは私にとって、たいへん嬉しく、また有り難いことであったと思っています。

こうしたすぐに営利に結びつかない自然史に関する研究活動を前30年余の期間は水産学部で、またその後の7年余の間は北方生物圏フィールド科学センターにおいて続けることが出来ましたのは、北大の自由闊達な学風とアンビシャスな精神風土があったればこそと、今まさに強く感じるこの頃です。

ささ か いち ろう
笹 賀 一 郎 氏

(北方生物圏フィールド科学センター教授)



昭和23年1月5日生

(略 歴)

昭和45年3月

山形大学農学部林学科卒業

昭和50年3月

北海道大学大学院農学研究科修士課程修了

昭和53年3月

北海道大学大学院農学研究科博士課程修了

昭和53年3月 農学博士(北海道大学)

昭和54年5月 北海道大学農学部附属演習林助手

昭和63年5月 北海道大学農学部附属演習林助教授

平成6年4月 北海道大学農学部附属演習林教授

平成13年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授

平成15年4月 北方生物圏フィールド科学センター副センター長

平成18年3月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター長

30年あまり、とくにその半分以上の地方研究林勤務は、広大で多様なフィールドと多くの現地施設をそなえた北海道大学の特徴と優位性を確信していく日々でした。「実学の重視」をはじめとした北大の理念の推進に貢献している貴重な施設となっています。また、技術職員や技能員もふくめた教職員スタッフの存在により、独自の教育研究活動とともに、利用者への支援や共同研究もおこなう、機動力のあるフィールド施設が実現されています。

生産のあり方と環境保全や自然との共生にかかわる教育研究においては、自然や社会に飛び込み、原因究明とともに対応策を検討し、実践をとおして検証していく「フィールド科学」が不可欠と思っています。また、自然との共生を基礎としたライフスタイルや文化の創造が強く求められる時代になると思われます。北大のもつ優位なフィールド施設が、これらの教育研究の中心フィールドとして、さらには地域や世界へ展開していく拠点として、いっそう活用されていくことを願っています。

たいへんお世話になりました。

にし もり とし ゆき 西 森 敏 之 氏 (高等教育推進機構教授)



昭和22年 7月26日生
(略 歴)
昭和45年 3月
東京大学理学部卒業
昭和47年 3月
東京大学大学院理学研
究科修士課程修了
昭和47年12月
東京大学大学院理学研
究科博士課程退学

昭和48年 1月 東北大学理学部助手
昭和55年 1月 理学博士 (東京大学)
昭和57年 4月 北海道大学理学部講師
昭和60年12月 北海道大学理学部助教授
平成 7年 4月 北海道大学高等教育機能開発総
合センター教授
平成22年10月 北海道大学高等教育推進機構教授

昭和48年に東北大学理学部助手になり数学の
研究を続けてきましたが、平成 7年に北海道大
学高等教育機能開発総合センターに異動しまし
た。丁度その頃、日本数学会に「大学生の学
力低下」の対策のためのワーキンググループ
(WG) がつくられ、私も参加しました。学力
低下の調査や、大学初年次の数学のシラバスの
研究などを担当し、また、ベテラン教員の大学
での授業の仕方を冊子にまとめたりしました。
この問題は、平成11年に WGのメンバーが「分
数ができない大学生」を出版するまで、マスコ
ミには認知されませんでした。

北海道大学高等教育推進機構では、同僚の教
員と協力して、新任教員研修、1泊2日の教育
ワークショップ、TA研修会などを企画・実施
しました。また、特別講義「北海道大学の人と
学問」のお世話をしました。これらの活動を通
じて、北大の様々な分野の方々と知り合うこと
が出来たのは楽しいことでした。

か が まさ ゆき 加 我 正 行 氏 (歯学研究科准教授)



昭和22年 5月18日生
(略 歴)
昭和50年 3月
北海道大学歯学部歯学
科卒業
昭和54年 3月
北海道大学大学院歯学
研究科 (歯学基礎系)
修了

昭和54年 3月 歯学博士 (北海道大学)
昭和54年 4月 北海道大学歯学部助手
昭和56年 1月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成 8年 8月 北海道大学歯学部助教授
平成12年 4月 北海道大学大学院歯学研究科
助教授
平成19年 4月 北海道大学大学院歯学研究科
准教授

美唄市の炭鉱の町で生まれて高校卒業まで過
ごし、東京で浪人生活をしていた私にとって、
国立一期校北大に入学できたのは最高の喜びで
あった。東大闘争解決のために突然決定された
翌春の東大入試中止の報道は、受験生の志望校
選択に大きな影響を与え、人生を変えた。

北大体育館で予定された昭和44年度入学式
は、闘争家達のバリケード封鎖で中止となり、
新入生は担任の先生とともに教養部の各教室に
入り、放送で堀内学長の入学のお祝いの言葉を
戴いた。堀内学長は入れ歯だったらしく、歯切
れが悪くて聞き取りづらかったことが私の歯学
部入学と縁があったように思えた。大学院修了
後、う蝕の洪水の対策、研究と治療のために小
児歯科に就職した。将来に迷った時には「加我
先生、エルムの木陰は大きいぞ」と慰められ励
まされて31年間、自然と街が同居する札幌の緑
豊かな広大なキャンパスで四季の移ろいと共に
新入生を迎えて卒業生を送り、研修医とともに
大学病院で診療を行う生活は充足しておりました。

堀内学長の触媒研究の流れを汲む鈴木 章先
生がノーベル賞を受賞した知らせを聞くことが
できたことを含め、入学以来41年間も「都ぞ弥
生」の歴史と伝統のなかで大学生活を送ることが
出来たことに深く感謝する次第です。

たき なみ しゅう いち
滝 波 修 一

氏 (歯学研究科准教授)

昭和22年12月1日生

(略 歴)

昭和53年3月

北海道大学歯学部歯学
科卒業

昭和57年3月

北海道大学大学院歯学
研究科博士課程単位修
得退学

昭和57年4月 北海道大学歯学部助手

昭和57年12月 北海道大学歯学部附属病院助手

昭和58年3月 北海道大学大学院歯学研究科博
士課程修了

昭和58年3月 歯学博士 (北海道大学)

昭和61年7月 北海道大学歯学部附属病院講師

平成10年7月 北海道大学歯学部助教授

平成12年4月 北海道大学大学院歯学研究科
助教授平成19年4月 北海道大学大学院歯学研究科
准教授

本業である教育・研究・診療の記憶より、課外活動である「冒険歯科」の顧問として東南アジアを訪れて、各国の学生・教官や村人との交流が、充実した日々の思い出として強く残っています。

世界の中の「北海道大学」を、観光とは別物の実体験として、学生さん達が触れる機会を与えたいとの思いからのクラブ立ち上げと行動でした。

その結果として、部活のOB／OG達が、国際保健の分野や国際支援の分野へと進んでいる。顧問として幸せな今日です。

その分、周囲には多大な負担を押し付けることになりました。このようなワガママな教員を抱えていてくれた「北大の懐の大きさ、暖かさ」に、支えて下さった皆様に感謝の念で一杯です。

「老兵は死なず」などとカッコ良く「消え去る」術もないので、次なる「野心」に向かっていく所存です。

に い だ きよ あき
新井田 清 信

氏 (理学研究院准教授)

昭和22年8月30日生

(略 歴)

昭和45年3月

北海道大学理学部卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院理学
研究科地質学鉱物学専
攻修士課程修了

昭和47年3月 理学修士 (北海道大学)

昭和51年3月 北海道大学大学院理学研究科地
質学鉱物学専攻博士課程修了

昭和51年3月 理学博士 (北海道大学)

昭和52年5月 北海道大学理学部助手

昭和62年8月 北海道大学理学部講師

平成6年4月 北海道大学理学部助教授

平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授

平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院助教授

平成19年4月 北海道大学大学院理学研究院准教授

私は、北海道に生まれ育った道産子で、1970年に地質学鉱物学科を卒業、その後も大学院で「日高山脈アポイ岳のかんらん岩」を研究しました。学生時代は「地球内部の上部マントル」に専心しましたが、1977年、岩石学火山学講座の助手に採用されるやいなや有珠山が噴火し、活動終息までの5年間、現地で火山災害と噴出物の調査に明け暮れました。その後地球深部のマグマ活動に主軸を戻し、もともと北海道の大自然のような大きなスケールの地質学が夢でしたので、世界各地のかんらん岩の野外観察と試料採集にでかけました。1984年の西南極から、地中海キプロス島、北米西海岸、バイカルリフト帯、ODP153航海で大西洋中央海嶺、トルコ、スペイン、モロッコ、ハワイ、パキスタン北部やイタリア北部の山岳地帯、そしてインド領アンダマン諸島、潜水艇「しんかい6500」で伊豆-小笠原の深海底に2度も潜りました。こうして、世界各地の大陸リフト帯や島弧、海洋域でマグマが発生する上部マントルの様子や地球変動帯の地質の仕組みが解りかけてきました。

昨年末に日本列島の地質誌「北海道地方」(644ページ／朝倉書店)を出版し、変動する島弧-海溝系を代表する北海道の地質システムを解説しました。今、北海道の大自然と大地の魅力を伝えることができることを実感しています。

定年退職を迎えるにあたって



相馬 尅之氏（農学研究院准教授）
 昭和22年8月21日生
 （略歴）
 昭和46年3月 北海道大学農学部卒業
 昭和52年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程修了
 農学博士（北海道大学）
 昭和51年11月 北海道大学農学部助手
 昭和57年1月 北海道大学農学部講師
 昭和59年7月 北海道大学農学部助教授
 平成19年4月 北海道大学大学院農学研究院准教授

10年間の学生生活に35年間の教員生活を加えると約45年間、北海道大学でクラーク精神に触れながら定年を迎えることになりました。この間、多くの先輩後輩諸兄や同僚の皆さん、多くの先生方には大変お世話になりました。ここに心からお礼申し上げるとともに、北海道大学の益々の発展をご祈念申し上げます次第です。

振り返りますと、私の学生時代から、全国の農学系大学の学生の間には「農学栄えて農業減びる」という状況を如何にして打開するかが問題視されていました。しかし、全国的な「農学部」の名称変更（？）や昨今の「EPA」、 「TPP」に対する農業分野の反応をみますと、日本あるいは北海道の農業の状況は決して良くなっていないように見えます。教員生活の後半は、食料の生産基盤である農地の適正管理を対象として教育研究・普及啓蒙を行ってきましたが、定年を迎える頃になってようやく一条の光が見えてきたように感じられます。再雇用による定年延長の恩恵に浴することができそうですので、何とかしてこの光り「省耕起」をさらに拡大し北海道農業の発展に貢献できれば、北海道大学で長年お世話になったことへの恩返しになるのではと考えている今日この頃です。

長い間、有り難うございました。



白澤 邦男氏
 （低温科学研究所附属環オホーツク観測センター准教授）
 昭和23年2月6日生
 （略歴）
 昭和46年3月 北海道大学理学部地球物理学卒業
 昭和48年3月 北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻修士課程修了
 （理学修士）
 昭和50年8月 マギル大学（カナダ）大学院修了（M.Sc.）
 昭和53年3月 北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程単位修得退学
 昭和53年4月 日本学術振興会奨励研究員（北海道大学）
 昭和56年4月 北海道大学低温科学研究所研究生
 昭和56年6月 理学博士（北海道大学）
 昭和57年6月 カナダ・ニューファウンドランド記念大学応用理工学部兼水海資源工学研究センター博士取得研究員
 昭和58年11月 カナダ・ニューファウンドランド記念大学ニューファウンドランド寒冷海洋科学研究所助手
 昭和60年11月 カナダ・マギル大学大気海洋学科助手
 昭和62年6月 北海道大学低温科学研究所附属流水研究施設助手
 平成8年1月 北海道大学低温科学研究所附属流水研究施設助教授
 平成16年4月 北海道大学低温科学研究所附属環オホーツク観測研究センター助教授
 平成19年4月 北海道大学低温科学研究所附属環オホーツク観測研究センター准教授

北大の入学試験を受けるために夜行列車に乗り、青函連絡船で津軽海峡を渡り、初めて北の大地、北海道に足を踏み入れた時の感激は今も鮮明に覚えている。札幌の試験会場は老朽した木造校舎で、広々とした部屋の前には赤々と燃えるストーブが一つ、電気も薄暗く時々停電

し、窓際は隙間風が入り寒くオーバーを着たままで試験をする様であった。ここがクラーク博士の‘Boys, be ambitious!’の新天地なのかと、期待と不安に駆られた。この建物はその後すぐに取り壊され、次々に新しい建物が立ち並び、自然環境にも恵まれた素晴らしいキャンパスへと変貌した。そんな中で北海道の四季折々の自然の美しさに魅了され、以来寒冷圏、極域の自然科学に興味を持つようになった。研究テーマは、海が凍る現象、流水の科学である。オホーツク海から北極海へと活動の場をカナダへ移したが、数年後また北大へ戻ってきた。40年近く続けてきた凍る海の研究だが、北極海、オホーツク海やバルト海のような季節海水域が温暖化によりどのように変動するのか、まだ気掛かりなことである。今まで研究を支えてくださった皆さまに感謝するとともに今後のご活躍を切望します。



三宅 教 尚 氏 (創成研究機構准教授)

昭和22年5月17日生

(略 歴)

昭和45年3月

大阪大学理学部卒業

昭和50年3月

北海道大学大学院薬学

研究科薬化学専攻博士

課程修了

昭和50年3月 薬学博士(北海道大学)

昭和50年4月 民間(株式会社三菱化成生命科
昭和55年2月 学研究所)

昭和55年2月 北海道大学薬学部助手

昭和56年3月 北海道大学薬学部助教授

平成10年4月 北海道大学大学院薬学研究科
助教授

平成11年4月 北海道大学機器分析センター
助教授

平成19年4月 北海道大学機器分析センター
准教授

平成21年4月 北海道大学創成研究機構准教授

指導教官の転任に伴って、博士課程の院生として北大の門をくぐって40年近くが経ちます。その頃の札幌の4月は埃っぽかったのを今でも憶えておりますが、その後、学生に対しては優しい住み易い街だと強く感じました。博士課程修了後、東京で5年近くを過ごし、昭和56年に北大薬学部に戻ってから早いもので30年が経過しました。薬学部では神経系のチャンネルを電気生理学的手法で研究をしてまいりましたが、平成11年に当時の機器分析センターに移り、大型分析機器を使用した委託分析業務を管理する研究支援の仕事が加わりました。この間、北大での生活を振り返ってみますと常に良き先生、同僚と後輩の先生方や多くの学生、また有能な技術職員の皆様に囲まれて恵まれた環境で過ごさせていただいたと思います。

お世話になった多くの方々に感謝申し上げますとともに、今後の北大の更なる発展を心から願っております。本当に有難うございました。



氏（企画部情報基盤課長）

昭和25年8月12日生

（略 歴）

昭和44年3月

北海道北見北斗高等学校卒業

昭和44年4月

北見工業大会計課

昭和51年10月

旭川医科大学総務部会計課

昭和59年4月 旭川医科大学総務部会計課司係予算管理主任

昭和60年4月 旭川医科大学総務部会計課照査係監査主任

昭和62年5月 北海道大学教養部会計掛物品管理主任

昭和63年4月 北海道大学庶務部庶務課総務掛文書主任

平成2年4月 北海道大学経理部主計課総務掛会計法規主任

平成5年4月 北海道大学水産学部船舶掛長

平成8年4月 北海道大学歯学部総務課専門職員

平成9年4月 北海道大学歯学部総務課用度掛長

平成11年4月 北海道大学経理部第一契約課管理掛長

平成12年4月 北海道大学経理部主計課監査掛長

平成13年4月 北海道大学経理部主計課総務掛長

平成14年4月 北海道大学経理部主計課専門員

平成16年1月 北海道大学総務部人事課専門員

平成16年7月 北海道大学財務部調達課専門員

平成19年1月 北海道大学財務部調達課課長補佐

平成19年4月 北海道大学企画部情報基盤課長

北見工業大学、旭川医科大学及び北海道大学での42年間の勤務を経て、この度、定年を迎えることができます。

北見の片田舎から出てきた私が、こんな大きな大学に勤務することができたのは、先輩、同僚、後輩の方々のご指導によるものであり、深く感謝申し上げます。

本学での勤務を振り返ってみますと、一番印象に残っているのは、当時の国立大学で4大学にしかなかった水産学部船舶係で練習船等の管理運用を担当し、また、その間において、練習船航海中に乗組員が海に転落して行方不明とな

り、1週間をほぼ徹夜状態で捜索、関係機関等との対応を経験できたことであり、その経験が微力ではありましたが、その後の本学での勤務に生かすことができたのではないかと考えております。

また、国立大学法人化後の企業会計原則を取り入れた複式簿記による財務会計処理での対応も思い出深いものがあります。

最後に、第二期中期目標・中期計画期間に向けて、ますます厳しい業務運営になるものと思われませんが、皆様のご健勝とご活躍とともに、本学の発展を祈念しております。

た じま よし お
田 島 良 雄 氏 (施設部施設整備課長)



昭和26年 1月24日生
(略 歴)
昭和44年 3月
北海道美唄工業高等学
校卒業
昭和44年 4月
北海道大学工学部
昭和47年 9月 } 民間
昭和49年12月 }

昭和50年 1月 旭川医科大学施設課
昭和56年 4月 北海道大学施設部建築課
平成 2年 4月 小樽商科大学施設課工営係長
平成 4年 4月 北海道大学施設部企画課企画掛長
平成 9年 4月 北海道大学施設部建築課第一建
築掛長
平成10年 4月 北海道大学施設部建築課建築計
画掛長
平成11年 4月 長崎大学施設部企画課専門員
平成12年 5月 長崎大学施設部建築課課長補佐
平成15年 4月 帯広畜産大学施設課長
平成19年 4月 北海道大学施設部施設整備課長

通勤路の脇にうず高く積み上げられた雪山が日に日に低くなり、日ごと春の足音を感じております。

私は、本年 1月に還暦を迎えました。したがって、この 3月には定年退職を迎える歳になったわけです。

昭和44年 4月に北海道大学に採用になって以来、42年に亘り大過なく職務を遂行できましたのは、良き上司、先輩、同僚、後輩の方々の暖かいご指導ご支援に支えられたお陰であり、心から感謝申し上げます。

顧みますと、北海道大学をはじめ道内各地の大学や民間企業にお世話になり、また道外では長崎大学に 4年間お世話になりましたが、思い出深いことはすべての職場において様々なスポーツに取り組むことができたことです。このことは私にとって非常に幸せなことであり、この時間を与えていただいた方々に心より御礼申し上げます。

退職後は、趣味を楽しみながら生きて行きたいと考えております。

やま だ つとむ
山 田 勉 氏



(附属図書館利用支援課北図書館利用支援室長)
昭和25年 8月26日生
(略 歴)
昭和44年 3月
北海道遠軽高等学校卒業
昭和44年 4月
北海道大学庶務部人事課
昭和44年 6月
北海道大学文学部

昭和45年 6月 北海道大学附属図書館閲覧課
(併任46年 5月まで)
昭和50年 5月 北海道大学工学部
昭和52年 4月 北海道大学工学部総務課
昭和53年 5月 北海道大学経済学部
昭和58年 5月 北海道大学大学院環境科学研究科
昭和63年 4月 北海道大学医学部
平成 5年 4月 北海道大学理学部
平成 8年 4月 小樽商科大学附属図書館運用係長
平成11年 4月 北海道大学附属図書館情報サー
ビス課資料サービス掛長
平成15年 4月 北海道大学理学研究科・理学部
図書掛長
平成17年 4月 北海道大学附属図書館情報サー
ビス課課長補佐
平成19年 4月 北見工業大学情報図書課長
平成22年 4月 北海道大学附属図書館利用支援
課北図書館利用支援室長

昭和44年 4月庶務部に採用、6月に文学部図書係に配属されてから図書職員として勤務させていただきました。この間、小樽商科大学、北見工業大学にも勤務し、最後の 1年は本学図書館での勤務となり、無事定年を迎えることが出来ました。これもひとえに、良き上司、先輩、同僚、後輩並びに各部署長や先生方の暖かいご指導とご支援のおかげであり、心から感謝申し上げます。

私には、北図書館新館が建てられた年に採用され、この 4月に本館が新しくなるという年に定年を迎えることに、感慨深いものがあります。

42年前、オホーツクの遠軽町から深夜便の汽車で札幌に着き、満員電車で揺られて「北20条」から「北大正門前」を通勤した日々が昨日のように思い出されます。今日までの歳月は長くもあり、短くもありで、一気に駆け足で走り抜けたようにも思えます。

最後になりますが、北海道大学が益々発展することと、皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念しております。長い間、大変お世話になりありがとうございました。

^さ ^{たけ} ^{じゅん} ^{いち} 氏（医学系事務部長）



昭和25年12月13日生

（略 歴）

昭和44年 3 月

北海道帯広農業高等学校卒業

昭和44年 4 月

北海道大学農学部附属演習林

平成 5 年 4 月 国立日高少年自然の家庶務課庶務係長
平成 7 年 7 月 北海道大学農学部附属演習林庶務掛長
平成10年 4 月 北海道大学総務部総務課専門職員
平成12年 9 月 北海道大学総務部総務課企画掛長
平成13年 4 月 北海道大学総務部総務課総務掛長
平成14年 4 月 北海道大学総務部人事課専門員
平成16年 4 月 苫小牧工業高等専門学校庶務課長
平成18年11月 北海道大学歯学研究科・歯学部事務長
平成21年 4 月 北海道大学医学系事務部長

お正月休みに書棚を整理した際、朝日新聞社発行の「2001年の日本」という一冊の本を見つけました。その奥付には「昭和44年 2 月 3 日 帯広田村書店にて」とメモが書かれています。この本をもとめた年の 4 月に北海道大学に採用されて以来、国立日高少年自然の家及び苫小牧工業高等専門学校にも勤務する機会をいただき、このたび何とか健康で定年を迎えることになりました。これまでに携わった仕事では多くの失敗もあり、辛かったこともあります。成し遂げたという満足感はともかくとして、楽しかったという思いは多くはありませんが、それよりも勤務終了後の同僚との楽しい語らいの場面を思い出します。

元に戻ります。冒頭の本の帯に「あと32年で21世紀、われわれの生活はどう変っているのか？ 日本の国土・産業・文化など78分野を詳細なデータで描く具体的未来像!!」とあります。第1部「国土」の編は略しまして、第2部「生活」の編には、新聞、映画、カメラ、飛行機等々の70項目について、予想される2001年の様子がイラストと文章で書かれています。その一つの項「コンピュータ」を読み返して見ると、そこには「……。恐らく、今日、電話やラジオ、TVが、民衆のものになったと同

じ状態で、コンピュータも、それに直結する小型の送信・受信装置を、家庭に、職場に、散在させることになるだろう。……」とあり、まさしく21世紀初頭の様子を言い当てています。

科学技術がめざましく発展・進歩していく今日、この先10年後、20年後の私達の職場がどのように変化しているのか想像するのは難しいのですが、多分、今では思いもしない便利な機器が導入されていることでしょう。例えば、資料を作るに際してキーボードをたたかずとも、考えたことや思い浮かべたことが自動的に文字や図形として書き込まれるような機器が出現しているかも、などということを考えていると夜も眠れなくなるので、これでおしまいにします。

最後になりましたが、今まで一緒に仕事をした方々全員に感謝を申し上げます。ありがとうございました。皆様、何よりも健康が第一ですよ。

きた じま よし お 氏(医学系事務部会計課長)



昭和25年 8月 9日生

(略 歴)

昭和45年 4月

北海道大学農学部

昭和49年 5月

北海道大学医学部附属
病院業務課

昭和54年 5月

北海道大学工学部経理課

昭和60年 4月 北海道大学経理部経理課

昭和63年 5月 北海道大学医学部附属病院管理課

平成 3年 4月 北海道大学工学部経理課

平成 6年 4月 北海道大学経理部経理課

平成 7年10月 旭川医科大学総務部会計課専門
職員

平成 8年 4月 旭川医科大学総務部会計課用度
第一係長

平成11年 1月 北海道大学薬学部会計掛長

平成14年 4月 旭川医科大学総務部会計課課長
補佐

平成17年 4月 北海道大学病院管理課課長補佐

平成17年10月 北海道大学病院経営企画課課長
補佐

平成19年 4月 北海道大学財務部経理課課長補佐

平成21年 4月 北海道大学医学系事務部会計課長

昭和45年に農学部採用になって以来、2度の旭川医科大学の勤務を除けば、北海道大学の緑溢れるキャンパスで勤務することができ、大変幸せに感じております。農学部時代の冬の、ある天気の良い早朝、仲間とスキーを担いで農学部前のローンの真っ直ぐな雪道を歩いていた記憶、寒さと雪の匂い、やけに雪と太陽がまぶしかったこと、そして若くて元気に溢れていたこと、など他愛もないことの記憶。それから、あっという間の41年でした。その間、良き上司や皆様方の暖かいご指導とご支援により充実した時間を過ごせたことに心から感謝しております。

個人的なテーマとして、業務の平準化と部下の育成を心がけてきたように思うが、十分にできたとは到底思えないし、法人化により仕事の平準化は改善されつつあるようですが、部下の育成については大変難しいことだと思っています。本当に長い間お世話になり、ありがとうございました。

定年退職を迎えるにあたって

まつ い てつ じ 氏
松 井 哲 司 氏

(歯学研究科・歯学部事務長)



昭和25年 6 月 4 日生
(略 歴)
昭和44年 4 月
室蘭工業大学
昭和53年 1 月
北海道大学
平成 3 年 4 月
旭川医科大学総務部庶
務課人事第一係長

平成 6 年 8 月 北海道大学大型計算機センター
庶務掛長
平成 9 年 4 月 北海道大学総務部人事課第二給
与掛長
平成11年 4 月 北海道大学総務部人事課第一給
与掛長
平成12年 4 月 北海道大学総務部人事課任用掛長
平成14年 4 月 室蘭工業大学総務課課長補佐
平成17年 4 月 北海道大学総務部人事課課長補佐
平成18年 4 月 北海道大学総務部職員課課長補佐
平成19年 4 月 北海道大学工学研究科・情報科
学研究科・工学部総務課長
平成21年 4 月 北海道大学歯学研究科・歯学部
事務長

振り返れば、昭和44年 4 月、室蘭工業大学に
採用いただき、親元を離れ、右も左も分からず
不安一杯でスタートをきり、昭和53年 1 月、北
海道大学に転任となった訳ですが、諸先輩は、
親、兄弟のように温かく受け入れてくれ有り難
く思っております。

その後、旭川医科大学、室蘭工業大学の勤務
を経て、このたび定年退職を迎えることになり
ました。

札幌の都心にありながら、四季折々の美しい
キャンパスで勤務できたことは、忘れることの
できない思い出となっております。

これからは、27年間という長い間お世話に
なった北海道大学の一応援団員として、北海道
大学の発展を見守っていきたいと思っております。

最後になりますが、良き先輩や仲間に恵ま
れ、感謝で一杯です。有り難うございました。

なか じま ゆき お 氏
中 嶋 幸 夫 氏

(獣医学研究科・獣医学部事務長)



昭和25年 7 月25日生
(略 歴)
昭和45年 6 月
北海道大学経理部
平成 6 年 4 月
旭川医科大学総務部会
計課司計係長
平成 9 年 4 月
北海道大学経理部経理
課第二契約掛長

平成10年 4 月 北海道大学経理部主計課第二予算掛長
平成11年 4 月 北海道大学経理部主計課第一予算掛長
平成12年 4 月 北海道大学経理部主計課専門職
員(予算担当)
平成13年 4 月 北見工業大学会計課課長補佐
平成16年 4 月 北海道大学学術国際部研究協力
課課長補佐
平成19年 4 月 北海道大学メディア・観光学事
務部事務長
平成21年 4 月 北海道大学大学院獣医学研究科
・獣医学部事務長

昭和45年 6 月、事務局経理部に採用され、本年
の3月で定年退職を迎えることになりました。

無事に今日を迎えることができましたこと
は、多くの上司、先輩、同僚、後輩の皆様、さ
らには各職場で関係しました先生方の暖かいご
指導ご支援に支えられたお陰であると心より感
謝申し上げます。

北大でのスタート初日、案内された勤務場所
の事務局は大学紛争の影響で、各部屋は復旧し
ておらず、焼け跡のような光景が随所で残って
おり、ここがこれから私の勤務する場所?とい
う感慨深い思い出として残っております。

以来北海道大学には35年、旭川医科大学、北
見工業大学での6年を含め、41年の長きに亘り
多くの「人」に支えられて楽しく過ごさせてい
ただきましたことは忘れることができません。

また、札幌の都心にありながら静寂で緑豊か
な自然環境に恵まれた札幌キャンパスで勤務さ
せていただきましたことは大きな幸せでした。

最後になりますが、北海道大学が今後、益々
発展されることを祈念しますとともに、皆様方
のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。本当
に長い間ありがとうございました。

まつもと
松 本

おさむ

治 氏 (薬学事務部事務長)



昭和26年 1月21日生
(略 歴)
昭和44年 4月
北海道大学経済学部
昭和47年 5月
北海道大学結核研究所
昭和49年 6月
北海道大学免疫科学研究所

昭和50年 5月 北海道大学医学部附属病院管理課
昭和54年 8月 北海道大学理学部
昭和59年 5月 北海道大学農学部
昭和63年 7月 北海道大学水産学部営繕掛国
有財産管理主任
平成03年 4月 北海道大学経理部管財課第二
管財掛財産管理主任
平成06年 4月 国立日高少年自然の家庶務課会計係長
平成08年 4月 北海道大学医学部附属病院管理課企画掛長
平成10年 4月 北海道大学経理部管財課第二管財掛長
平成12年 4月 北海道大学大学院環境科学研究科会計掛長
平成15年 4月 室蘭工業大学会計課課長補佐
平成18年 4月 北海道大学工学研究科・情報科学
研究科・工学部経理課課長補佐
平成20年 4月 北海道大学工学研究科・情報科学
研究科・工学部経理課課長補
佐(安全衛生管理事務室長)
平成21年 4月 北海道大学薬学事務部事務長

昭和44年 4月、経済学部教務掛に採用され、社会人としての一步を踏み出し、右も左も分からぬ若輩に指導・ご高配をいただいた諸先輩、先生方に心から感謝申し上げます。この間、他機関の日高少年自然の家、室蘭工業大学にお世話になった5年間を除き、研究所、病院、事務局、理、農、水、環境、工、薬学部と、北海道大学での37年間、ほとんどの学部等を経験させていただき、様々な場面での仕事をうまく完了できたこと、そうでなかったことなどが思い出されます。

四季折々の顔を現し、特に、春から初夏にかけての木々の芽吹きは、心まで洗われた札幌キャンパスで、入院生活も一度もなく無事に定年を迎えることができることは、このうえない幸せです。

最後に北海道大学の益々の躍進と皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話になり、本当にありがとうございました。

すが

の

のぶ

お

菅 野 信 雄 氏 (農学事務部事務長)



昭和25年 4月15日生
(略 歴)
昭和44年 3月
北海道白糠高等学校卒業
昭和44年 4月
釧路工業高等専門学校
昭和51年11月
北海道大学医学部附属
病院総務課

昭和55年 4月 北海道大学庶務部人事課
昭和59年 4月 北海道大学低温科学研究所庶務
掛主任
昭和62年 4月 北海道大学庶務部人事課主任
平成 2年 2月 北海道大学水産学部庶務掛長
平成 5年 4月 北海道大学法学部庶務掛長
平成 7年 4月 北海道大学総務部人事課掛長
平成13年 4月 帯広畜産大学総務課課長補佐
平成16年 4月 北海道大学総務部職員課課長補佐
平成18年 4月 北海道大学北方生物圏フイ
ールド科学センター事務長
平成20年 4月 北海道大学農学事務部事務長

昭和44年から釧路高専を初めとして42年間大学の業務に携わって来ました。早いものでこのたび定年を迎えることになりました。

この間、庶務・人事関係の仕事を中心に従事してきましたが、無事に定年を迎えることができたのは、良き上司・先輩、同僚そして部下のお力添えがあったお陰と深く感謝しております。長い公務員生活のなかで、すべてが「良き上司・先輩」に出合えたかという、僅かではありますが、どうしても尊敬できなかった上司がいたことは否めませんが、どういうわけかそういう人ほど、その人の言動が記憶にしっかりと残っており、叱り方ひとつにしても部下の人格やプライドを傷付けないようにすることが重要だと感じさせられました。

どんな組織も中に入ってみれば、絶えず多くの困難な問題に直面しています。乗り越えてみれば、深刻に悩むほどでもないと分かることが多く、どんな困難でもいつかは片付くものですし、壁にぶつかって行き詰まりを感じたときでも、どこかに出口は見つかるものです。最近、ハラスメントで職員や学生さんが心の病で悩む方が多くなっているのが気になるところで

すが、これまで以上に大学における仕事や勉学が楽しく行える環境作りと職場の良好な人間関係が築かれるよう切望します。

最後に、在職したそれぞれの部署でお世話になりました諸先生、上司、同僚、部下の方々の益々のご健勝とご活躍を、心より祈念しております。長い間、ありがとうございました。

鈴木 春樹 氏

(北海道大学病院診療支援部長)

昭和25年 5月13日生

(略 歴)

昭和46年 3月

北海道大学医学部附属
衛生検査技師学校卒業

昭和46年 4月

北海道大学医学部附属
病院技術補佐員



昭和46年 9月 北海道大学医学部附属病院文部
技官

昭和47年 8月 北海道大学医学部附属病院検査
部臨床検査技師

平成 2年 6月 北海道大学医学部附属病院検査
部主任臨床検査技師

平成 7年 4月 北海道大学医学部附属病院検査
部副臨床検査技師長

平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属
病院診療支援部副臨床検査技師
長

平成19年 4月 北海道大学病院診療支援部臨床
検査技師長

平成22年 4月 北海道大学病院診療支援部長

昭和46年に北大病院検査部に採用になって以来、40年の歳月がたちました。当時の検査業務はすべて用手法であり、検査技師が手を使って行っていました。用手法の時代から数度の自動化、システム化を経て、現在は病院情報システムにより、高精度の検査結果を迅速に診療側に報告できる時代になり検査技術、情報の進歩を膚で感じてきました。

平成16年の法人化の際に病院内の医療技術職を統合し、診療支援部が誕生しましたが、大学病院に求められる診療、教育、研究に診療支援部は決して欠かすことのできない重要な部門であり、専門技術職として、今後もさらに協力してゆけるものと思っています。

これまで良き先輩、同僚、後輩に恵まれ、皆様のご指導、ご協力、ご支援のおかげで充実した日々を過ごさせていただき、無事に定年を迎えることができました。心から感謝申し上げます。これからも北海道大学病院が、さらに発展されることを願っております。

表 敬 訪 問

〈国内〉

月 日	来 訪 者	目 的
23. 2 .28	駐カナダ特命全権大使 石川 薫 氏	両国の交流に関する懇談

(国際本部国際連携課)

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
23. 2 . 2	駐日タジキスタン共和国特命全権大使 BOBOZODA Gulomjon Jura 氏	スラブ研究センター主催の講演会出席のため
23. 2 . 8	マッコーリー大学（オーストラリア）国際教育プログラムディレクター Ernest Jordan 教授	情報科学研究科主催のFD研修会出席のため
23. 2 . 9	駐日チェコ共和国特命全権大使 Katerina FIALKOVA 氏	両国の交流に関する懇談
23. 2 .14	中華人民共和国駐札幌総領事館総領事 胡 勝才 氏	両国の交流に関する懇談



駐カナダ特命全権大使 石川 薫 氏（中央）

駐日タジキスタン共和国特命全権大使
BOBOZODA Gulomjon Jura 氏（右から2人目）マッコーリー大学 国際教育プログラムディレク
ター Ernest Jordan 教授（左から2人目）駐日チェコ共和国特命全権大使 Katerina
FIALKOVA 氏（右から3人目）中華人民共和国駐札幌総領事館総領事
胡 勝才 氏（右から3人目）

(国際本部国際連携課)

諸会議の開催状況

役員会（平成23年 2 月 8 日）

- 議 案・「女性教員の積極的採用のためのポジティブアクション北大方式」及び外国人教員の積極的採用のための方策について
- ・中期目標期間評価（教育研究に係る現況分析分）の評価結果に基づく検証について
 - ・北海道大学ソウルオフィスの設置について
- 協議事項・薬学院の設置構想について
- ・履修証明制度の導入について
 - ・「国立大学法人北海道大学における評価に関する基本的な考え方」の改訂について
 - ・平成23年度北海道大学予算編成方針について
 - ・単身赴任手当の見直しについて
 - ・嘱託職員（事務系職員）の給与等の見直しについて
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・理事の交代について
- ・商標「札幌農学校」について
 - ・地球環境科学研究所の分野の再編について
 - ・保健科学研究所の分野の設置について
 - ・情報科学研究科の連携講座の設置について
 - ・農学研究所の連携分野の廃止・設置について
 - ・生命科学の連携分野の設置について
 - ・先端生命科学研究の連携分野の設置について

教育研究評議会（平成23年 2 月15日）

- 議 題・副学長の任命等について
- ・履修証明制度の導入について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・「国立大学法人北海道大学における評価に関する基本的な考え方」の改訂について
 - ・平成23年度北海道大学予算編成方針について
 - ・教員の懲戒に係る陳述について
 - ・教員の懲戒について
- 報告事項・生涯メールサービスについて
- ・教員の定年前退職制度について
 - ・講座・分野の設置改廃について
 - ・北海道大学ソウルオフィスの設置について
 - ・サステナビリティ・ウィーク2010の報告並びにサステナビリティ・ウィーク2011の開催について

役員会（平成23年 2 月28日）

- 議 案・「国立大学法人北海道大学における評価に関する基本的な考え方」の改訂について
- ・平成22年度中期目標達成強化経費第三次決定事業について
- 協議事項・全学運用教員の措置について
- 報告事項・環境保全センターの設置目的の一部変更について
- ・中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果（原案）について
 - ・中期目標期間評価（教育研究に係る現況分析分）の評価結果に基づく検証に係るヒアリング日程について
 - ・大学評価・学位授与機構における大学評価基準（機関別認証評価）等の改訂案について
 - ・産学連携本部の部門等の再編について
 - ・創成研究機構生物機能分子研究開発プラットフォーム推進センターの設置について
 - ・防災訓練（図上訓練）の実施について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

学 内 規 程

北海道大学大学院通則の一部を改正する規則

(平成23年 2 月 2 日海大達第 9 号)

本学において、平成22年 7 月15日付けの学校教育法施行規則等の一部改正に伴い、国際連合大学の課程を修了した者について、本学の大学院（博士課程）への入学資格がある者として規定すること、及び国際連合大学の課程での学修について、本学の大学院の単位として認定することができることについて規定することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学創成研究機構規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第12号)

本年 3 月 1 日付けで、創成研究機構に、生物機能分子研究開発プラットフォームにおいて行う創薬又は機能性食品の開発に係る拠点形成を図るための研究を推進し、並びにプラットフォームの管理及び運営を行うため、生物機能分子研究開発プラットフォーム推進センターを設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学安全衛生本部規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第13号)

本年 3 月 1 日付けで、本学の運営組織として安全衛生本部を設置することに伴い、安全衛生本部の組織及び運営について所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則

(平成23年 3 月 1 日海大達第10号)

国立大学法人北海道大学内部監査規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第11号)

国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第14号)

国立大学法人北海道大学ハラスメント防止規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第15号)

国立大学法人北海道大学職員兼業規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第16号)

国立大学法人北海道大学利益相反マネジメント規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第17号)

国立大学法人北海道大学における公益通報の処理及び公益通報者の保護等に関する規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第18号)

国立大学法人北海道大学職員の懲戒の手続きに関する規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第19号)

国立大学法人北海道大学危機管理規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第21号)

国立大学法人北海道大学安全保障輸出管理規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第22号)

国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第23号)

国立大学法人北海道大学文書処理規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第24号)

国立大学法人北海道大学法人文書管理規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第25号)

学 内 規 程

国立大学法人北海道大学情報公開規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第26号)

国立大学法人北海道大学における個人情報の開示等に関する規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第27号)

国立大学法人北海道大学入構車両規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第28号)

本年 3 月 1 日付けで、本学の運営組織として安全衛生本部を設置することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第20号)

感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行令及び検疫法施行令の一部を改正する政令（平成23年政令第 5 号）が、平成23年 1 月14日に公布され、同年 1 月24日及び 2 月 1 日から施行されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

北海道大学大学院教育学研究院臨床心理発達相談規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第29号)

本年 4 月 1 日より本学大学院教育学研究院において、臨床心理学等に関する教育研究並びに大学院教育学院に所属する学生に対する研究指導及び臨床心理士の養成に係る教育訓練を行うための臨床心理発達相談を行うこととすることに伴い、相談の実施について所要の定めを行ったものです。（平成 23 年 4 月 1 日施行）

北海道大学環境保全センター規程の一部を改正する規程

(平成23年 3 月 1 日海大達第30号)

本年 3 月 1 日付けで本学の運営組織として安全衛生本部を設置し、環境保全センターの業務の一部を安全衛生本部に移行することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

人 事

平成23年 2 月22日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (辞職)	須 戸 しお吏	子どもの園保育園保育士

平成23年 2 月28日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【講師】 (辞職)	BENGUA GERARD	大学院医学研究科講師
【技術職員】 (辞職)	杉 浦 由佳里 増 田 恵 子	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成23年 3 月 1 日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長・施設長等】 安全衛生本部長 (期間：平成23年 3 月31日まで)	岡 田 尚 武	理事 (副学長)
【講師】 大学院医学研究科講師	山 崎 美和子	大学院医学研究科助教
【助教】 北海道大学病院助教 北海道大学病院助教 低温科学研究所助教 遺伝子病制御研究所助教 触媒化学研究センター助教	小 堀 善 則 松 田 康 裕 伊 藤 寿 梶 田 美穂子 宋 志 毅	採用 採用 採用 採用 採用
【係長】 施設部施設企画課付係長	太 田 政 市	北海道大学病院管理課係長
【技術職員】 北海道大学病院看護部助産師	佐々木 紀 子	北海道大学病院看護部看護師

新任部局長等紹介

平成23年 3月 1日付

安全衛生本部長に おかだ ひさたけ 岡田 尚武 氏



平成23年 3月 1日付けで運営組織として安全衛生本部が新設され、初代の本部長として岡田尚武理事・副学長が発令されました。

任期は、平成23年 3月 31日までです。

略 歴

生 年 月 日	昭和19年 3月 4日
昭和41年 3月	北海道大学理学部卒業
昭和43年 3月	北海道大学大学院理学研究科 修士課程修了 理学修士
昭和46年 3月	北海道大学大学院理学研究科 博士課程修了 理学博士
昭和46年 3月	ウッズホール海洋研究所研究員
昭和48年10月	コロンビア大学附属ラumont・ ドーティ地質学研究所研究員
昭和51年11月	山形大学理学部助教授
昭和63年 4月	山形大学理学部教授
平成 7年 4月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成13年 5月	北海道大学評議員
平成15年 4月	
平成15年 5月	北海道大学大学院理学研究科長 ・理学部長
平成18年 4月	北海道大学大学院理学研究院長 ・理学院長・理学部長
平成19年 4月	北海道大学理事・副学長

計

報

名誉教授 ^{てらやま} 寺山 ^{よしひこ} 吉彦 氏 (享年88歳)



名誉教授 寺山吉彦氏は、大正13年7月17日札幌市に生まれ、昭和23年9月北海道帝国大学医学部を卒業、実地修練を経て、同27年8月同学部助手、同31年11月同学部講師、昭和48年11月北海道大学

医学部教授に昇任、同63年3月同大学を停年退職され、同63年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。退官後は、昭和63年4月から手稲溪仁会病院顧問、平成8年4月から耳鼻咽喉科麻生病院理事、平成19年4月からは同病院の顧問を歴任されました。

この間、寺山氏は、永年にわたって耳鼻咽喉科学を専攻され、北海道大学在任中は、昭和48年11月から同63年3月までの14年余の長きにわたり耳鼻咽喉科学講座を担当され医学の教育・研究に努め、多大な功績をあげられました。

また、昭和61年1月から1年3ヶ月北海道大学医学部附属病院長を務められ、同病院の管理運営に多大な貢献をされました。

寺山氏の研究活動は耳鼻咽喉科学、気管食道科学など多岐にわたりますが、特に内耳の基礎的研究と、難聴の臨床、基礎の両面からの研究に精力を注がれました。内耳の基礎研究の手始めとなりました昭和39年の自己免疫による内耳炎の実験的研究では現在広く注目されている内耳の免疫病理の草分け的業績として知られています。また、昭和39年から同41年までのフライブルグ大学留学中に行われた蝸牛のアドレナリン作動性神経についての研究は、蝸牛において全く新しい神経系を発見したものとして世界的評価を受けた研究です。昭和41年帰国後は内耳のアドレナリン作動神経に関する研究をさらに発展させ、その起源を確立した他、さらに蝸牛の遠心性神経系に関しても蝸牛軸内における神経の構造について新たな知見を加えられました。

昭和48年教授就任後は厚生省特定疾患である突発性難聴(昭和48年～同50年)、特発性難聴(昭和54年～同56年)、急性高度難聴(昭和57年～同62年)の各研究班に参画し、これらの難聴について次にあげるような基礎的・臨床的研

究を行い、現在の教室の数々の研究のバックボーンをつくり上げられました。

主な基礎的研究としては、ウイルス性難聴の実験的研究、外リンパ瘻の実験的研究、内耳血流に関する研究、内耳交感神経の機能に関する研究、アスピリンの聴覚への影響に関する電気生理学的研究を行われました。

また、臨床的研究としては、突発性難聴、外リンパ瘻症例の膨大な集積とそのコンピューター解析を主とし、耳音響放射に関する研究を行われました。

治療面では外リンパ瘻の手術的治療、特殊補聴器外来の設置を行い、さらに将来の感音難聴治療上重要な地位を占める人工内耳の研究を応用電気研究所と共同で行われました。

日常の診療では難聴の手術を数多く手がけ、なかでも伝音難聴の手術、即ち外耳道閉鎖症、内耳奇形など先天性奇形の聴力改善手術を数多く行って優れた業績を残されました。

昭和55年9月には、これらの内耳研究の業績に対して北海道医師会賞を受賞されています。学内にあっては北海道大学医学部附属病院手術部長(昭和57年2月～同61年1月)、北海道大学評議員(昭和59年6月～同61年1月)、北海道大学医学部附属病院長(昭和61年1月～同62年4月)を併任され、医学部及び同附属病院の運営に尽力され、特に同附属病院長として同附属病院外来棟新築と神経内科設置の具体化についての功績が顕著でありました。また、昭和50年4月から北海道大学競技スキー部顧問教授として学生に親しまれてきました。

学会活動としては教授在任中を通じて日本耳鼻咽喉科学会評議員、同学会北海道地方部会長の任にあり、昭和59年5月～同61年5月には日本耳鼻咽喉科学会理事を務められ、学会の発展と地域医療のために多大の貢献をされました(平成7年7月～同学会参与、平成12年5月～同学会名誉会員)。在任中の昭和54年6月には第26回日本内耳生化学研究会、同56年9月に第33回日本気管食道科学会、同60年5月には第87回日本耳鼻咽喉科学会総会を開催し、主要な学会の会長としての責務を果たされました。また、国際耳鼻咽喉科学会、国際オージオロジー学会などいくつかの国際学会で業績を報告され高く評価されました。その他にも日本気管食道

科学会（平成2年10月～同学会名誉会員，平成5年10月～同学会永久認定医），日本基礎耳科学会の理事，また，日本鼻科学会，日本聴覚医学会，日本気管食道科学会，日本臨床耳科学会，日本音声言語学会の評議員として活躍されました。

また，平成13年4月29日には勲三等旭日中綬章を授与され，大学教授として，また管理者として北海道大学，同大学医学部及び同大学医学部附属病院の発展に大いに貢献されたのみならず，耳鼻咽喉科学の教育，研究及び診療において優れた業績を上げるとともに，学生の教育，人材育成等我が国の学術進歩に大きな足跡を残されました。

ここに謹んで先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

（医学研究科・医学部）

〈編集メモ〉

▼リテラポプリ44号は、毎年恒例となっている新入生歓迎号です。巻頭対談では二人の学生が総長室を訪ねて、佐伯総長から北海道大学の魅力や新たに導入した総合入試などについてお話を聞き、学生に総長から高校時代と大学生活の違い、興味のある研究などの質問がされました。「先輩からのメッセージ」では、新2年生の全52クラスの代表から新1年生へメッセージをもらいました。また「教員からのメッセージ」では全学教育担当の11人の先生にも協力をいただき、「学生時代にぜひやってほしいこと」「学生に読んでほし

い本」などの質問にお答えいただきました。この号は、4月8日(金)の入学式で、新入生全員と会場にいらした父母の皆さんに配布します。

▼オリジナルフレーム切手「さっぽろ街景」は、札幌市内の街景を題材にした切手10枚で構成されています。2月7日(月)から販売されているシリーズのⅣには農学部校舎、Ⅴにはポプラ並木の写真がそれぞれ使われています。写真は広報課から提供しました。



2008. 6 . 8 広尾町

北の息吹⑦ エゾノハナシノブ (*Polemonium caeruleum* ssp. *yezoense*)

個人的には、高山ではない野山の花でもっとも好ましく思うのは本種である。花の色と形は並みの園芸植物を圧倒するほどの存在感があり、かつて礼文島で最初にこの花を見たときは、直ぐには野生植物とは信じられなかった。何処にでもあるという植物ではないが、日本国内には多くの種や変種があり、青紫や赤紫から白色まで花色が変化する。しかし、どれもよく似ているので、一見してハナシノブという和名を外す心配はない。花のポートレート撮影では直射日光を避けた方がよいことが多いが、この写真も望ましい光線状態からはほど遠い状況下での撮影である。

理事・副学長 岡田 尚武

北大時報③ March 2011 No.684

平成23年 3 月発行

北海道大学総務部広報課

〒 060-0808 札幌市北区北 8 条西 5 丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http : //www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/